

満韓ところどころ

夏目漱石

青空文庫

なんまんでつどうかいしゃ

南満鉄道会社 っていつたい何をするんだいと真面目に聞い

たら、満鉄まんてつの総裁も少し呆れた顔をして、御前おまえもよつほど馬鹿

だなあと云った。是公ぜこうから馬鹿と云われたつて怖くも何ともない

から黙っていた。すると是公が笑いながら、どうだ今度こんだいっしよ

に連れてつてやろうかと云い出した。是公の連れて行つてやろう

かは久しいもので、二十四五年前ぜん、神田の小川亭おがわていの前にあつた

怪しげな天麩羅屋てんぷらやへ連れて行つてくれた以来時々連れてつてやろ

うかを余に向つて繰返す癖がある。そのくせいまだ大した所へ連

れて行つてくれた試ためしがない。「今度こんだいっしよに連れてつてやろうか」もおおかたその格かくだろうと思つてただうんと答えておいた。この氣のない返事を聞いた総裁は、まあ海外における日本人がどんな事をしているか、ちつと見て来るがいい。御前みたように何にも知らないで高慢な顔をしていられては傍はたが迷惑するからとすこぶる適切めいた事を云う。何でも是公に聞いて見ると馬関ばかんや何かで我々の不必要と認めるほどの御茶代などを宿屋へ置くんだそうだから、是公といっしよに歩いて、この彪ぼうだい大な御茶代が宿屋の主人下女下男にどんな影響を生ずるかちよつと見たくなつた。そこで、じゃ君の供をしてへいへい云つて歩いて見たいなどと注文をつけたら、そりやどうでも構わない、いっしよが厭いやなら別でも

差さし支つかえないと云う返事であつた。

それから御供をするのはいつだろうかと思つて、面白半分^なに待つてゐると、八月半なかばに使が来ていつでも立てる用意ができてるかと念を押した。立てると云えば立てるような身しんじょう上だから立てると答えた。するとまた十日ほどしていつ何日いつかの船で馬関から乗るが、好いかと云う手紙が来た。それも、ちゃんと心得た。次には用事ができたから一ひとつ船延ふねばすがどうだと云う便りたよがあつた。これも訳なく承知した。しかし承知している最中に、突然急性胃カタルでどつとやられてしまった。こうなるといかに約束を重んずる余も、出発までに全快するかしないか自分で保証くし悪くなつて来た。胸へ差し込みが来ると、約束どころじゃない。馬関も

御茶代も、是公も大連もめちやめちやになつてしまふ。世界がただ真黒な塊かたまりに見えた。それでも御供旅行の好奇心はどこかに潜ひそんでいたと見えて、先へ行つてくれと云う事は一口も是公に云わなかつた。

そのうち胃のところガスか何かでいっぱいになつた。茶碗の音などを聞くと腹が立つた。人間は何の必要があつて飯などを食うのか気の知れない動物だ、こうして氷さえ嚙かじつていれば清しやうじ浄じやうようけつぽく、潔けつ白はくで何も不足はないじやないかと云う氣になつた。枕まくらもと

元もとで人が何か云うと、話をしなくつちあ生きていられないおしやべりほど情ない下賤げせんなものはあるまいと思つた。眼を開いて本ほん棚なだなを見渡すと書物がぎっしり詰つている。その書物が一々違つ

た色をしてそうしてことごとく別々な名を持っている。煩わづらわしい
 事おびただ夥しい。何の酔すいきよう興きようでこんな差別をつけたものだろう、また
 何の因果いんがでそれを大事そうに列ならべ立てたものだろう。実にしち面
 倒臭い世の中だ。早く死んじまえと云う気になった。

禎ていじ二さんが蒲団ふとんの横へ来て、どうですと尋ねたが、返事をする
 のが馬鹿ばかげ気げでいて何とも云う了りようけん見けんにならない。代診が来て、
 これじゃ旅行は無理ですよ、医者として是非と止めなくつちやなら
 ないと説諭したが、御ごもつと尤もつともだとも不ふもつと尤もつともだとも答えるのが厭いや
 だった。

そのうち日は容赦なく経たつた。病気は依然として元のところに
 逗とうりゆう留ゆうしていた。とうとう出発の前日になって、電話で中村へ

断つた。中村は御大事になさいと云つて先へ立つてしまった。

二

小蒸氣こじょうきを出て鉄嶺丸てつれいまるの舷側げんそくを上のぼるや否や、商船会社の大お河平おかわひらさんが、どうか総裁とごいっしよのように伺いましたかと云われる。船が動き出すと、事務長の佐治君さじくんが総裁と同じ船でおいでになると聞いていましたかと聞かれる。船長さんにサルーンであの出口で出逢うと総裁と御同行のはずだと誰か云つてたようでしたかと質問を受ける。こうみんなが総裁総裁と云うと是公ぜこうと呼ぶのが急に恐ろしくなる。仕方がないから、ええ総裁といっしよの

はずでしたが、ええ総裁と同じ船に乗る約束でしたがと、たちま
 ち二十五年来用い慣れた是公を儉約し始めた。この儉約は鉄嶺丸
 に始まつて、大連から満洲一面に広がつて、とうとう安東県あんとうけんを
 経て、へ韓 国かんこくにまで及んだのだから少からず恐縮した。総裁とい
 う言葉は、世間にはどう通用するか知らないが、余が旧友中村なかむら
ぜこう是公を代表する名詞としては、あまりにえら過ぎて、あまりに
おおげさ大袈裟で、あまりに親しみがなくつて、あまりに角かどが出過ぎてい
 る。いっこう味あじわいがない。たとい世間がどう云おうと、余一人はや
 はり昔の通り是公是公と呼び棄すてにしたかつたんだが、衆寡敵しゅうがかてき
 せず、やむをえず、せつかくの友達を、他人扱いにして五十日間
 通して来たのは遺憾いかんである。

船の中は比較的楽だった。二百十日にひやくとおかの明るあくる日に神戸を立つたのだから、多少の波風は無論おいでなさるんだらうと思つてちやんと覚悟をきめていたところが、天氣が存外のんき呑気にできたもので、神戸から大連に着くまでたいいは鈍にぶり返っていた。甲板かんばんの上に若い英吉利イギリスの男が犬を抱いて穩かに寝ていたと云つたら、海のようにすもたいていは想像されるだらうと思う。

ありや何ですかと事務長の佐治さじさんに聞くと、え、あれは英国ふくりようじの副領事だそうですね、佐治さんが答えた。副領事かも知れないが余には美しい二十一二の青年としか思われなかつた、これに反して犬はすこぶる妙な顔をしていた。もつともブルドッグだから両親からしてすでに普通の顔とは縁の遠い方に違いない。した

がって特にこいつだけを責めるのは残酷だが、一方から云うと、また不思議に妙な顔をしているんだからやむをえない。この犬はその後大連に渡つて大和ホテルに投宿した。そうとはちつとも知らずに、食堂に入つて飯を食っていると、突然この顔に出食わして一驚を喫した。固より犬の食堂じゃないんだけど、犬の方で間違えて這入つて来たものと見える。もつとも彼の主人もその時食堂にいた。主人は多数の人間のいるところで、犬と高声に談判するのを非紳士的と考えたと見えて、いきなりかの妙な顔を睨ぐるみ脇の下に抱えて食堂の外に出て行つた。その退却の模様はすこぶる優美であつた。彼は重い犬をあたかも風呂敷包のごとく安々と小脇に抱えて、多くの人の並んでいる食卓の間を、

足音も立てず大股おおまたに歩んで戸の外に身体からだを隠した。その時犬はわんとも云わなかつた。ぐうとも云わなかつた。あたたかも弾力ある暖かい器械すなおの、素直すなおに自然の力に従うように、おとなしく抱かれて行つた。顔はたびたび云う通りはなはだ妙だが、行状ぎょうじょうに至つてはすこぶる気高いものであつた。余はその後ごついにこの犬に逢う機会を得なかつた。

三

退屈かただから甲板かんぱんに出て向うを見ると、晴れたとも曇つたとも方のつかない天気うちの中に、黒い影が煙を吐いて、静かな空を濁し

ながら動いて行く。しばらくその痕を眺めていたが、やがてまた籐椅子の上に腰をおろした。例の英吉利の男が、今日は犬を椅子の足に鎖で縛りつけて、長い脛をその上に延ばして書物を読んでゐる。もう一人の異人はサルーンで何かしきりに認め物をしてゐる。その妻君はどこへ行つたか見えない。亜米利加の宣教師夫婦は席を船長室の傍へ移した。甲板の上はいつもの通り無事であつた。ただ機関の音だけが足の裏へ響けるほど猛烈に鳴り渡つた。その響の中でいつの間にかうとうとした。

眼が覚めてから、サルーンに入つて亜米利加の絵入りの雑誌を引つ剥がして見た。傍には日本の雑誌も五六冊片寄せてあつた。いずれも佐治文庫と云う判が押してある。これは事務長の佐治さ

んが、自分で読むために上陸の際に買入れて、読んでしまうと船の図書館に寄附するのだと佐治さん自身から聞いた。佐治さんは文学好と見えて、余の著書なども読んでいる。友人の畔柳芥舟くろやなぎかいしゅうと同郷だと云うから、差し向いで芥舟の評判を少しやった。

また室へやを出て海を眺めた。すると先刻さつき黒い影を波の上に残して、

遠くの向うを動いていた船が、すぐ眼の前に見える。大きさは鉄て

つれいまる

嶺丸とほぼ同じぐらいに思われるが、船ふな足あしがだいぶ遅のろいと見

えて、しばらくの間まにもうこれほど追おっつかれたのである。欄干らんかん

に頼ほおづえ杖えを突いて、見ていると鉄嶺丸が刻一刻と後うしろから逼せまつて行

くのがよく分る。しまいには黄色い文字で書いた營口丸えいこうまるの三字

さえ明あきらかに読めるようになった。やがて余の船の頭が營口丸の尻

より先へ出た。そうして、尻から胴の方へじりじりと競り上げて行つた。船は約一丁を隔ててほとんど並行の姿勢で進行している。もう七八分すると、余の船は全く営口丸を乗り切る事ができそうに思われた。時に約一丁もあろうと云う船と船の間隔が妙に逼つて来た。向うの甲板にいる乗客の影が確かに勘定ができるようになった。見るとことごとく西洋人である。中には眼鏡を出してこつちを眺めているのもあつた。けれども見るうちに眼鏡は不必要になつた。髪の色も眼鼻立も甲板に立っている人は御互に鮮かな顔を見合せるほど船は近くなつた。その時は全く美しかつた。と思うと、船は今までよりも倍以上の速力を鼓して刹那に近寄り始めた。海の水を細い谷川のように仕切つて、営口丸

の船体が、六尺ほどの眼の前に黒く切つ立つた時は、ああ打つか
 るなど思った。途端とたんに向うの舳へさきは余の眼を掠かすめて過ぎ去りつつ、
 逼せまりつつ、とうとう中等甲板の角かどの所まで行つてどきりと当つた。
 同時に甲板の上に釣るしてあつた端艇ポートが二艘そうほどでんぐり返つた。
 端艇つなを繋いであつた鉄の棒は無雑作むぞうさに曲つた。営口丸の船員は手
 を拍うつてわあと嘸はやし立たてた。余と並んで立っていた異人が、妙な
 声を出してダム何とか云つた。

一時間の後のち佐治さんがやつて来て、夏目さん身をおかわすのかわ
 すと云う字はどう書いたら好いでしようと聞くから、そうですね
 と云つて見たが、実は余も知らなかつた。為替かわせの替かわせると云う字
 じやいけませんかとはいはなはだ文学者らしからぬ事を答えると、佐

治さんは承知できない顔をして、だってあれは物を取り替える時に使うんでしょうとやり込めるから、やむをえず、じゃ仮名かなが好いでしようあきと忠告した。佐治さんは呆れて出て行つた。後で聞くと、衝突の始末を書くので、その中に、本船は身をかわしと云う文句を入れたかつたのださうである。

四

船が飯田いいたがし河岸のような石垣へ横にびたりと着くんだから海とは思えない。河岸の上には人がたくさん並んでいる。けれどもその大部分は支那のクーリーで、一人見ても汚きたならしいが、二人寄る

となお見苦しい。こうたくさん塊かたまるとさらに不体裁ふていさいである。余は甲板の上に立って、遠くからこの群集を見下みおろしながら、腹の中で、へえー、こいつは妙な所へ着いたねと思つた。そのうち船がだんだん河岸に近づいてくるに従つて、陸おかの方で帽子を振つて知人に挨拶あいさつをするものなどができて来た。宣教師のウインという人の妻君が、中村さんが多分迎えに来ておいででしょうと、笑いながら御世辞おせじを云つたが、電報も打たず、いつ着くとも知らせなかつた余の到着を、いくら権威けんい赫赫かくかくたる総裁だつて予知し得る道理がない。余は欄らんかん干かんに頬杖ほおづえを突きながら、なるほどこいつはどうしたものかな、ひとまず是公の家うちへ行つて宿を聞いて、それからその宿へ移る事にでもするかなと思つてるうちに、船は鷹お

揚うようにかの汚ならしいクーリー団の前に横づけになって止まった。止まるや否や、クーリー団は、怒おこった蜂はちの巣めいどのように、急に鳴動うどうし始めた。その鳴動の突然なものには、ちよつと胆力を奪われたが、何しろ早晚地面の上へ下りるべき運命を持った身体からだなんだから、しまいにはどうかしてくれるだろうと思つて、やつぱり頬杖を突いて河岸の上の混戦を眺めていた。すると佐治さんが来て、夏目さんどこへおいでになりますと聞いてくれた。まあひとまず総裁うちの家へでも行つて見ましようと答えていると、そこへ背の高い、紺色こんいろの夏服を着た立派な紳士が出て来て、懐中から名刺を出して叮嚀ていねいに挨拶をされた。それが秘書の沼田ぬまたさんだったので、頬杖を突いて、いつまでも鳴動を眺めている余には、大變な好都

合になった。沼田さんは今度郷里から呼び迎えられた老人を、自宅へ案内されるために、船まで来られたのだそうだが、同じ鉄嶺丸に余の乗っている事を聞いて、わざわざ刺しを通じられたのである。

じゃホテルの馬車でと沼田さんが佐治さんに話している。河岸かしの上を見ると、なるほど馬車が並んでいた。力車りきしやもたくさんある、ところが力車はみんな鳴動連めいどうれんが引くので、内地のに比べるとはなはだ景気が好くない。馬車の大部分もまた鳴動連によつて、御せぎよられている様子である。したがっていずれも鳴動流めいどうりゅうに汚きたないものばかりであつた。ことに馬車に至つては、その昔日露戦争の当時、露助ろすけが大連を引上げる際に、このまま日本人に引渡すのは

残念だと云うので、御^ご町^{てい}嚙^{ねい}に穴を掘って、土の中に埋^うめて行つたのを、チャンが土の臭^{におい}を嗅^かいで歩いて、とうとう嗅^かぎあてて、一つ掘っては鳴動させ、二つ掘っては鳴動させ、とうとう大連を縦^{たてよこ}横^{よこ}十文字に鳴動させるまでに掘り尽くしたと云う評判のある、——評判だから、本当の事は分らないが、この評判があらゆる評判のうちでもっとも巧妙なものと、誰しも認めざるを得ないほどの泥だらけの馬車である。

その中に東京の真中でも容易に見る事のできないくらい、新しい奇麗^{きれい}なのが二台あった。御^ぎ者^{よしや}が立派なりヴェリーを着て、光った長靴を穿^はいて、哈爾賓^{ハルビン}の肥えた馬の手綱^{たづな}を取って控えていた。佐治さんは、船から河岸へ掛けた橋を渡って、鳴動の中を突

き切つて、わざわざ余をその奇麗な馬車の傍そばまで連れて行つた。さあ御乗んなさいと勧めながら、すぐ御者台の方へ向いて、総裁の御宅までと注意を与えた。御者はすぐ鞭むちを執とつた。車は鳴動うちゆるの中を揺ゆるぎ出だした。

五

門を這はい入いつて馬車の輪が砂利の上を二三間きし軋きしつたかと思うと、馬は大きな玄関の前へ来て静かに留とどまつた。石段を上あががつて、入口の所に立つや否や、色の白い十四五の給仕が、頑がん丈じょうな櫳かしの戸を内から開いて、余の顔を見ながら挨あい拶さつをした。もう御帰りか

と尋ねると、まだでございませと云う。留守では仕方がない。どうしたものだろうと思つて、石の上に佇たずんで首を傾かたけているところへ、後うしろに足音がするようだからふり向くと、先刻鉄嶺丸で知ちかづき己おのれになつた沼田さんである。さあ、どうぞと云われるので、中に入った。沼田さんは先へ立つて、ホールの突き当りにある厚い戸を開いた。その戸の中へ首を突つ込んで、室へやの奥を見渡した時に、こりや滅法広いなと思つた。数字の観念たに乏しい性質ちだから何畳敷だかんとと要領を得ないが、何でも細長い御寺の本堂のよくな心持がした。その広い座敷がただ一枚の絨じゅうたん毯たんで敷きつめられて、四角よすみだけがわずかばかり華はなやかな織物の色と映てり合あうために、薄暗く光っている。この大きな絨じゅうたん毯たんの上に、応接用の

椅子いすと卓テーブルがちよんぼりふたところ一一所に並べてある。一方の卓と一方の卓とは、まるで隣家りんかの座敷ぐらい離れている。沼田さんは余をその一方に導いて席を与えられた。仰向あおむいて見ると天井てんじょうがむやみに高い。高いはずである。室へやの入口には二階がついていて、その二階の手摺てすりから、余の坐っている所が一目に見下みおろされるような構造なんだから、つまるところは、余の頭の上が、一階の天井兼けん二階の天井である。後のちに人の説明を聞いて始めて知つたのだが、このだだっ広い応接間おんげつかんは、実は舞踏室で、それを見下みくだしている手摺付の二階は、楽隊の樂を奏する所にできているのだそうだ。そんなら、そうと早くから教えてくれれば、安心するものを、断りなしに急に仏様のない本堂へ案内されたものだからまず一番に吃く

驚びっくりした。余は大連滞在中何度となくこの部屋を横切つて、是公ぜこうの書齋へ通つたので、喫驚びっくりする事は、最初の一度だけですんだが、通るたんびに、おりもせぬ阿弥陀様あみださまを思い出さない事はなかつた。

室を這入はいつて右は、往來を向いた窓で、左の中央から長い幕が次の部屋の仕切りに垂れている。正面に五尺ほどの盆栽を二鉢置はちいて、横に奇麗きれいな象の置物が据すえてある。大きさは豚の子ほどである。これは狸穴まみあなの支社の客間で見たものと同じだから、一対いっついを二つに分けたものだろうと思つた。そのほかには長い幕の上に、大額おおきがかかつていた。その左りの端に、小さく南満鐵道会社総裁後藤新平と書いてある。書体から云うと、上海シャンハイ辺へんで見る看

板のような字で、筆画がすこぶる整っている。後藤さんも満洲へ来ていただけに、字が旨くなつたものだと感じしたが、その実感心したのは、後藤さんの揮毫ではなくつて、清国皇帝の御筆であつた。右の肩に賜うと云う字があるのを見落した上に後藤さんの名前が小さ過ぎるのでつい失礼をしたのである。後藤さんも清国皇帝に逢つて、こう小さく呼び棄に書かれちやたまらない。えらい人からは、滅多に賜わつたり何かされない方がいいと思つた。沼田さんは給仕を呼んで、処々方々へ電話をかけさせて、是公の行方を聞き合せてくれたが全く分らない。米国の艦隊が港内に碇泊しているので、驩迎のため、今日はベースボールがあるはずだから、あるいはそれを観に行つても知れない

と云う話であつた。

そのうち広い部屋がようやくやく暗くなりかけた。じやどこぞ宿屋へでも行つて待ちましようと言うと、社の宿屋ですから、やっぱり大和ホテルやまとがいいでしょうと、沼田さんが親切に自分で余をホテルまで案内してくれた。

六

湯を立ててもらつて、久しぶりに塩しお気のない真水まみずの中に長くなつて寝ている最中に、湯殿の戸をこつこつ叩たたくものがある。風呂場で訪問を受けた試ためしはいまだかつてないんだから、湯槽ゆぶねの中で

身を浮かしながら少々 逡巡しゅんじゆん していると、叩く方ではどうあつても訪問の礼を尽くさねばやまぬという決心と見えて、なおのこ
と、こつこつやる。いくらこつこつやつたつて、まさか赤裸はだかで飛
び出して、室の錠へやしようを明ける訳にも行かないから、風呂の中から大
きな声で、おい何だと用事を聞いて見た。すると摺硝子すりガラスの向
側がわで、ちよつと明けなさいと云う声がある。この声なら明けて
も差支さしつかえないと思つて、身体全体からだから雫しずくを垂らしながら、素すっぱ
裸だかでボールトを外はずすと、はたして是公ぜいこうが杖つえを突いて戸口に立っ
ていた。来るなら電報でもちよつとかければ好いものと云う。
どこへ行つていたんだと聞くと、ベースボールを觀みて、それから
舟を漕こいでいたと云う挨拶あいさつである。飯を食つたら遊びに来なさ

いと案内をするから、よろしいと答えてまた戸を締めた。締めながら、おいこの宿は少し窮屈だね、浴衣ゆかたでぶらぶらする事は禁制なんだろうと聞いたら、ここが厭いやなら遼りょうとう東ホテルへでも行けと云つて歸つて行つた。

例刻に食堂へ下りて飯を食つたら、知らない西洋人といつしよテーブルの卓へ坐らせられた。その男が御免ごめんなさい、どうも嚏くしゃみが出てと、手帛ハンケチを鼻へ当てたが、嚏の音はちつともしなかつたから、余はさあさあと、暗あんに嚏を奨しょうれい励しておいた。この男は自分で英人だと名乗つた。そうして御前は旅順りよじゆんを見たかと余に尋ねた。旅順を見ないなら教えるが、いつの汽車で行つて、どことどこを見て、それからいつの汽車で帰るが好いと、自分のやった通りを

委くわしく語つて聞かせた。余はなるほどなるほどと聞いていた。次に御前は門司もじを見たかと聞いた。次にあすこの石炭はもう沢山たんとは出まいと聞いた。沢山は出まいと答えた。実は沢山出るか出ないか知らなかつたのである。

しばらくして、君は旅順に行つた事があるかとまた同じ事を尋ね出した。少々変だが面倒だから、いやまだだと、こつちも前同ぜん様な返事をしておいた。すると旅順に行くには朝八時と十一時の汽車があつて……とまた先刻さつきと寸すんぶん分ぶん違ちがわないような案内者めいた事を云つて聞かせた。先が先だから余も依然としてなるほどなるほどを繰り返した。最後に突然御前は日本人かと尋ねた。余はそうだと正直なところを答えたようなものの、今までは何国どこじん人と

思われていたんだろうかと考えると、多少心細かった。

余は日本人なりの答を得るや否や、この男が、おれも四十年前横浜に行った事があるが、どうも日本人は町ていねいで親切で慇懃いんぎんで実に模範的国民だなどとしきりに御世辞おせじを振り廻し始めた。せっかくだとは思ったが、是公との約束もある事だから、好い加減なところで談話を切り上げて、この老人と別れた。

表へ出るとアカシヤの葉が朗ほがらかな夜の空気の中にしんと落ちついて、人道を行く靴の音が向うから響いて来る。暗い所から白服を着けた西洋人が馬車で現れた。ホテルへ帰って行くのだろう。馬の蹄ひづめは玄関の前で留まつたらしい。是公の家の屋根から突出つきだした細長い塔が、瑠璃色るりいろの大空の一部分を黒く染抜いて、大連の初は

つあき
秋が、内地では見る事のできない深い色の奥に、数えるほどの
星を輝きらつかせていた。

七

この間から米国の艦隊が四艘そう来ているので、毎日いろいろな事
をして遊ばせるのだが、翌日あすの晩は舞踏会をやるはずになつてい
るから出て見ると是公ぜこうが勧めた。出て見ろつたつて、燕尾服えんびふくも
何も持つて来やしないから駄目だめだよと断ると、是公が希知けちな奴やつだ
など云つた。燕尾服は其上ロンドン倫敦留学中トテナムコートロードの
怪しげな洋服屋で、もつとも安い奴こしらを拵おぼええた覚があるが、爾来じらい筆た

筥んすの底に深く蔵しているのみで、親友といえども、持つてるか持つてないか知らないくらいである。いくら大連がハイカラだつて、東京を立つ時に、この古燕尾服が役に立とうとは思いがけないから、やっぱり筥の底にしまったなりで出て来た。じゃ、おれの袴はかまわり羽織を貸してやるから、日本服で出る、出て、まあ、どんな容よ子うすだか見るが好いと、是公は何でも引き摺ずり出そうとする。いっそ出るくらいなら踊らなくっちゃつまらないから、日本服ならまあ止よそうと云いたかつたが、是公は正直だから本当にすると好くないと思つて、ただ羽織袴はいけないよと断つた。是公はそれでも舞踏会を見せる氣と見えて、翌日あくるひの午ひる、社の二階で上田君を捕つらまえて、君の燕尾服をこいつに貸してやらないか、君のならちよう

ど合あいそうだと云いつていた。上田君もこの突然な相談には辟へ易きしたに違ちがない。笑わらいながら、いえ私わたしのは誰たれにも合あいませんと謙けん遜そされた。

舞踏会ラブはそれですんだが、しばらくすると、今度はこれから倶ク楽部ラブに連れて行いつてやろうと、例のごとく連れて行いつてやろうを出だし始めた。だいぶ遅おそいようだとは思おもつたが、座まにある国沢君も、行いこうと云いわれるので、三人で涼すずしい夜の電灯でんとうの下もとに出でた。広ひろい通とほりを一いち二に丁ぢやう来きると日に本ほん橋ばしである。名なは日に本ほん橋ばしだけれどもその実じつは純然たる洋式やうしきで、しかも欧お洲しゆうの中心しんしんでなければ見みられそうもないほどに、雅がにも丈じやう夫ぶにもできている。三人は橋の手前てまへにある一ひと棟むねの煉瓦れんが造づくりに這はい入いつた。誰たれかいるかなと、玉突場たまづつばを覗のぞ

いたが、ただ電灯が明るく点ついているだけで玉の鳴る音はしなかつた。読書室へ這入つつたが、西洋の雑誌が、秩序よく列ならべてあるばかりで、ページを繰る手の影はどこにも見えなかつた。将棋歌か留多るたをやる所へ這入つつて腰をかけて見たが、三人の尻をおろしたほかは、椅子いすも洋卓テーブルもことごとく空あいていた。今日は遅いので西洋人がいないからつまらないと是公が云う。是公の会話の下手な事は天品てんぴんと云うくらいなものだから、不思議に思つて、御前は平生ここに出入でいりして赤髯あかひげと交際するのかと聞いたら、まあ来た事はないなと澄ましている。それじゃ西洋人がいなくつてつまらないどころか、いなくつて仕合せなくらいなものだろうと聞いて見ると、それでもおれはこの倶楽部クラブの会長だよ、出席しないで

も好いと云う条件で会長になったんだと呑気な説明をした。

会員の名札はなるほど外国流の綴が多い。国沢君は大きな本を拡げて、余の姓名を書き込ました上、是公に君ここへと催促した。是公はよろしいと答えて、自分の名の前に proposed by と付けた。それへ国沢君が、同く seconded by と加えつくくれたので、大連滞在中はいつでも、倶楽部クラブに出入する資格ができた。

それから三人でバーへ行つた。バーは支那人がやっている。英語だか支那語だか日本語だか分らない言葉で注文を通して、妙に赤い酒を飲みながら話をした。酔つて外へ出ると濃い空がますます濃く澄み渡つて、見た事のない深い高さの裡うちに星の光を認めた。国沢君がわざわざホテルの玄関まで送られた。玄関を入ると、正

面の時計がちようど十二時を打った。国沢君はこの十二時を聞きながら、では御休みなさいと云つて、戻られた。

八

ホテルの玄関で、是公（ぜこう）が馬車をと云うと、ブローラムに致しませうかと給仕が聞いた。いや開（ひら）いた奴が好いと命じている。余は石段の上に立つて、玄関から一直線に日本橋まで続いている、広い往来を眺めた。大連の日は日本の日よりもたしかに明るく眼の前を照らした。日は遠くに見える、けれども光は近くにある、とでも評したらよかろうと思うほど空気が透（す）き徹（とお）つて、路（みち）も樹（き）も屋根

も煉瓦れんがも、それぞれ鮮あざやかに眸ひとみの中に浮き出した。

やがて蹄ひづめの音がして、是公の馬車は二人の前に留まった。二人

はこの麗うらわらかな空気の中をふわふわ揺られながら日本橋を渡った。

橋向うは市街である。それを通り越すと満鉄の本社になる。馬車

は市街の中へ這はい入らずに、すぐ右へ切れた。気がついて見ると、

遥はるかむこ向おうの岡おかの上に高いオベリスクが、白い剣つるぎのように切つ立

つて、青空に聳そびえている。その奥に同じく白い色の大きな棟むねが見

える。屋根は鈍にぶい赤で塗つてあつた。オベリスクの手前には奇麗きれい

な橋がかかつていた。家も塔も橋も三つながら同じ色で、三つと

も強い日を受けて輝いた。余は遠くからこの三つの建築の位地いちと

関係と恰かつこう好こうとを眺めて、その釣合のうまく取れているのに感心

した。

あれは何だいと車の上で聞くと、あれは電気公園と云つて、内地にも無いものだ。電気仕掛でいろいろな娯樂をやつて、大連の人に保養をさせるために、会社で拵こしらへてるんだと云う説明である。電気公園には恐縮したが、内地にもないくらいのものなら、すこぶる珍らしいに違ないと思つて、娯樂つてどんな事をやるんだと重ねて聞き返すと、娯樂とは字のごとく娯樂でさあと、何だか少々危あやしくなつて来た。よくよく糺きゆうめい明あして見ると、実は今月こんげつ末すえとかに開場するんで、何をやるんだか、その日になつて見なければ、総裁にも分らないのださうである。

そのうち馬車が、電車の軌道レールを敷いている所へ出た。電車も電

気公園と同じく、今月末に開業するんだとか云つて、会社では今支那人の車掌運転手を雇つて、訓練のために、ある局部だけの試運転をやらしている。御忘れものはありませんか、ちんちん動きますを支那の口で稽古けいこしている最中なのだから、軌道レールがここまです延長して来るのは、別段怪しい事もないが、気がついて見ると、鉄軌レールの据え方すかたが少々違うようである。第一内地のように石を敷かない計画らしい。御影石みかげいしが払底ふつていなのかいと質問して見たら、すぐ、冗談云つちやいけないとやられてしまった。これが最新式の敷方しきかたなんで、土台をどうかして、どうかして、鉄軌と鉄軌の間を混合金属で塗り固めて全線をたつた一本の長い棒にしてしまつて……とあたかも自分が技師であるかのごとき自慢である。

内地から来たものはなるほど田舎いなかもの取扱にされても仕方がない。そいつは感心だと、全く感心すると、技師を信任して、少しも口を出さずに、どうしても自分の思った通りをやらせるから、そんな仕事もできるのさと云った。内地では何でもやかましく干渉する奴がたくさん出て来るものと見える。

馬車が岡の上へ出た。そこはまだ道路が完成していないので、満洲特有の黄土こうどが、見るうちに靴の先から洋袴ズボンの膝ひざの上まで細かに積もった。この辺ももう少しすると、ホテルの前のように、カンカンした路に変化する事だろうが、そんな事を口外すれば、是公がますます得意になるばかりだから、わざと黙っていた。

九

これが豆^{まめあぶら}油の精製しない方で、こつちが精製した方です。色が違うばかりじゃない、香^{におい}も少し変っています。嗅^かいで御覧なさいと技師が注意するので嗅いで見た。

用^{もち}いる途ですか、まあ料理用ですね。外国では動物性の油が高価ですから、こう云うのができたら便利でしょう。第一大変安いのです。これでオリーブ油の何分の一にしか当らないんだから。そうして効用は両方共ほぼ同じです。その点から見てもはなはだ重^{ちようほう}宝です。それにこの油の特色は他の植物性のもののように不消化でないです。動物性と同じくらいに消化^{こな}れますと云われた

ので急に豆油がありがたくなつた。やはり天麩羅てんぷらなどにできますかと聞くと、無論できませんと答えたので、近き将来において一つ豆油の天麩羅を食つてみようと思つてその室を出た。

出がけに御邪魔でもこれをお持ちなさいと云つて細長い箱を開けたから、何だろうと思つて、即座に開けて見ると、石鹼シャボンが三つ並んでいた。これがやつぱり同じ材料から製造した石鹼ですと説明されたが、普通の石鹼と別に変つたところもないようだから、ただなるほどと云つたなり眺めていた。すると、この石鹼に面白いところは、塩水に溶解するから奇体ですよとの追加があつたので、急に貫つて行く気になつて蓋ふたをした。

柞蚕さくさんから取つた糸を並べて、これが従来さくさんの奴ですと云うのを

見ると、なるほど色が黒い。こっちは精製した方でと、傍そばに出されるとと全く白い。かつ節ふしなしにでき上っている。これで織ったの
 がありますかと聞いて見ると、あいにく有りませんと云う答である。しかしもし織ったらどんなものができるでしょうと聞くと、
 羽はぶたえ二重のようなものができるつもりですと云う。その上ねだん価段が半
 分だと云う。柞さくさん蚕から羽はぶたえ二重が織れて、それが内地の半額で買
 えたらさぞ善よかろう。

高梁酒こうりょうしゆを出して洋盃コップに注ぎながら、こっちが普通の方で、

こっちが精製した方でと、またやりだしたから、いや御酒はたくさんですと断った。さすが酒好きの是公も高粱酒の比較飲みは、思わしくないと見えて、並製も上製も同じく謝絶した。是公の話

によると、この間高峯讓たかみねじょうきち吉さんが来て、高粱からウイスキーを採とるとか採らないとかしきりに研究していたそうである。ウイスキーがこの試験場でできるようになつたら是公がさぞ喜んで飲む事だろう。

陶器を作っている部屋もあつたようだが、これはほんの試験中で、並製も上製もないようであつた。

中央試験所を出て、五六町来ると、馬車を下りて草の中に迷い込んだ。路のない谷へ下りたり、足場のない岡へ上のぼつたりするの
で、汗が出て、顔の皮がひりひりして来た。その上胃がしきりに痛む。是公に聞いて見ると、射撃場へ連れて行ってやるんだと云うから、例の連れて行ってやると云う厚意めんに免じて、腹の痛いの

を我慢して目的の家まで行つてすぐ椅子の上へ腰をかけてしまつた。是公がしきりに鉄砲の話をするようであつたが、とんと頭に響かない。何でもこの家だけは会社から寄附してやった。これでも二千円とか三千円とかかかつたという事だけがようやく耳に這入つた。

そこへ汚ない支那人が二三人、綺麗な鳥籠を提げてやつて来た。支那人て奴は風雅なものだよ。着るものもない貧乏人のくせに、ああやって、鳥をぶら下げて、山の中をまごついて、鳥籠を樹の枝に釣るして、その下に坐つて、食うものも食わずにおとなしく聞いているんだよ。それがもし二人集まれば鳴き競をするからね。ああ実に風雅なものだよ。としきりに支那人を賞めている。

余はポケットからゼムを出して呑んだ。

十

政樹公が^{まさきこう}大連の税関長になつていと聞いてちよつと驚いた。政樹公には十年前^{ぜんせん}上^{シャン}海^{ハイ}で^{であ}出逢つたきりである。その時政樹公は、サー・ロバート・ハートの子分になつて、やはりその税関に勤務していた。政樹公の大学を卒業したのは余より二年前で、二人共同し英文科の出身だから、職業違いであるにかかわらず、比較的縁が近いのである。

政樹公の姓は立花^{たちばな}と云つて柳川藩^{やながわはん}だから、立派な御侍^{おさむらい}。

に違ない。それをなぜ立花さんと云わないで、政樹公と呼ぶかと云うに、同じ頃同じ文科に同藩から出た同姓の男がいた。しかも双方共寄宿舎に這入^{はい}っていたものだから、立花君や立花さんでは紛^{まぎ}れやすくはいけない。で一方は政樹という名だから政樹公と呼び、一方は銚^{せんざぶろう}三郎という俗称だから銚^{せん}さん銚^{せん}さんと云った。なぜ片^こつ方が公^{こう}なのに、片^こつ方はさんづけにされてしまったのか、ちよつと分らない。銚^{せん}さんの方は、余と前後して洋行したが、不幸にして肺病に罹^かつて、帰り路に香^{ホン}港^{コン}で死んでしまった。そこで残るは政樹公ばかりになった。したがって政樹公をやめて立花君と云つたつて、少しも混雑はしないのだが、つい立花よりは政樹公の方が先へ出る。やっぱり中村とも総裁とも云わないで是^ぜ公^{こう}

と云い馴れたようなものだろう。

ここだと云うので、二人馬車を下りて税関に這入つて見ると、あいにく政樹公は先刻さつき具合が悪いとかで家へ歸つた後であつた。こつちの都合もあるし、所しよろう勞の人に迷惑をかけるのも本意でないから、他日を期して税関を出た。すると今度は馬車が満鉄の本社へ横づけになつた。広い階はしごだん子段を二階へ上がつて、右へ折れて、突き当りをまた左へ行くと、取付とつつきが重役の部屋である。重役は東京に行つてゐるもののほかは皆出ていた。それに一々紹介された。その中うちで昔見た田中君の顔を覚えていた。どうです始めて大連に御着きになつた時の感想はと聞かれるから、そうです船から上がつてこつちへ来る所は、まるで焼やけあと迹のようじやありません。

んかと、正直な事を答えると、あすこはね、軍用地だものだから建物を^{こしら}えたる訳に行かないんで、誰もそう云う感じがするんですと教えられた。

しばらく椅子に腰を掛けて、おとなしく執務の様子を見ていると、じき午^{ひる}になった。さあ飯を食おうと、食堂へ案内された。こへと云う席へ坐つて、サーヴィエツトを取り上げると、給仕が来て、それは国沢さんのですから、ただいま新しいのを持って参りますと云つた。食堂は社の表二階にあたる大広間で、晩になれば、それが舞踏室に変化するほどの大きなものであつた。これは社員全体に向つて公開してあるのだそうだが、同じ食卓に着いた人の数を云うと、約三十人に過ぎなかつた。この人数^{にんず}から推して、

あるいは制限でもありはせぬのかと思つたのは余の想像に過ぎなかつた。

料理は大和ホテルから持つて来るのだそうで、同席の三十余人が、みな一様の皿を平らげていた。胃が痛いので肉刀ナイフと肉匙フォークはひとなみ人並に動かしたようなものの、その実は肉も野菜も咽喉のどの奥へ詰め込んだ姿である。一つどうですと向う側の田中君から瓢箪ひょうたん形んがたの西洋梨せいようなしを勧めすすめられた時は、手を出す勇氣すらなかつた。

十一

河村調査課長の前へ行つて挨拶あいさつをすると、河村さんは、まあ

おかけなさいと椅子を勧めながら、何を御調べになりますかと叮てい々いねいに聞かれる。何を調べるほどの人間でもないんだから、この間に逢あった時は実は弱った。先刻重役室へ河村さんが這入はいつて来たとき、是公ぜいこうが余を紹介して、河村さん満鉄の事業の種類その他について、あとでこの男にすっかり説明してやって下さいと云ったのが本もとで、とうとう余は調査課へ来るような訳になったものの、その実世間じっの知るごとき人間なんだから、こう真面目まじめに、どう云う方面の研究をやる気かと尋ねられるとはなはだ迷まよついでしまう。そうかと云つて、けっして悪気があつて冷かしに來た次第でない事もまた、世間の知る通りなんだから、河村さんに対して敬意を失するような冗談は云えた義理のものでない。やむをえず、しか

つめらしい顔をして、満鉄のやっているいろいろな事業一般について知識を得たいと述べた。——何でも述べたつもりである。固^{もと}より内心に確乎^{かっこ}たる覚悟があつて述べる事でないんだから、顔だけはしかつめらしいが、述べる事の内容は、すこぶる赤毛布^{あかげつとしき}式に縹^{ひょう}緲^{びょう}とふわついていたに違ない。ただ今から顧みても、少し得意なのは、その時余の態度挙動は非常に落ちついて、魂がさも丹^{たん}田^{でん}に膠^{こう}着^{ちやく}しているかのごとく河村さんには見えたりという自覚である。人を欺^{だま}し終^{おほ}せて知らん顔をしているのは善^よくない事だから、ここで全く懺悔^{ざんげ}してしまうが、実を云うと、その時は胃がしくしく痛んで、言葉に抑揚をつけようにも、声に張りを見せようにも、身体^{からだ}に活気^{みな}を漲^{みな}ぎらせようにも、とうてい自己

が自己以上に沈着してしまつて、一寸いっすんもあがきが取れなかつたのである。

そこへ大きな印刷ものが五六冊出て来た。一番上には第一回営業報告とある。二冊目は第二回で、三冊目は第三回で、四冊目は第四回の営業報告に違ない。この大冊子を机の上に置いて、たいいていこれで分りますがねと河村さんが云い出した時は、さあ大変だと思つた。今この胃の痛い最中にこの大部の営業報告を研究しなければすまない事になつては、とうてい持ち切れる訳のものではない。余はまだ営業報告を開あけないうちに、早速一工夫ひとくふうしてこう云つた。——私は専門家でないんですから、そう詳くわしい事を調査しても、とても分りますまいと思ひますので、ただ諸君がいろ

いろいろな方面でどんな風に働いていられるか、ざあつとその状況を目撃さしていただけはたくさんですから、じゅうらん縦覧すべき箇所を御面倒でもちよつと書いて下さいませんか。

河村さんははあそうですかと、気軽にすぐ筆を執とつてくれた。

ところへどこからか突然妙な小さな男があらわれて、やあと声を

かけた。見るとまたのよしろう股野義郎である。昔「猫」を書いた時、その中

にちくご筑後の国はくるめ久留米の住人に、多々たたらさんぺい羅三平というきじん崎人がいる

とふいちよう吹聴した事がある。当時股野はみいけ三池の炭坑に在勤していた

が、どう云う間違か、多々羅三平はすなわち股野義郎であると云

う評判がぱつと立って、しまいには股野をつか捕まえて、おい多々羅

君などと云うものがたくさん出て来たそうである。そこで股野は

大いに憤慨して、至急親展の書面を余に寄せて、是非取り消してくれと請求に及んだ。余も気の毒に思ったが、多々羅三平の件をことごとく削除さくじよしては、全巻を改板かいはんする事になるから、簡潔めいりよう明瞭めいりように多々羅三平は股野義郎にあらずと新聞に広告しちやいけないかと照会したら、いけないと云つて来た。それから三度も四度も猛烈な手紙を寄こしたあとで、とうとうこう云う条件を出した。自分が三平と誤られるのは、双方とも筑後久留米ちくごくるめの住人だからである。幸い、肥前唐津ひぜんからつに多々羅たたらの浜はまと云う名所があるから、せめて三平の戸籍だけでもそつちへ移してくれ。これだけは是非御願するとあつたんで、余はとうとう三平の方を肥前唐津の住人に改めてしまった。今でも「猫」を御読みになれば分る。肥前の

国は唐津の住人多々羅三平とちやんと訂正してある。

こう云う訳で余と因縁いんねんの浅からざる股野に、ここでひよつくり出逢であうとは全く思いがけなかつた。しかも、その家へ呼ばれて御馳走ごちそうになつたり、二三日間朝から晩まで懇切に連れて歩いて貰つたり、昔日せきじつの紛議ふんぎを忘れて、旧歡きゆうかんを暖める事ができたのは望外ぼうがいの仕合しあわせである。実を云うと、余は股野がまだ撫順ぶじゆんにいる事とばかり思つていた。

余は大連で見物すべき満鉄の事業その他を、ここで河村さんと股野ひょうに、表ひょうのような形かたちに拵こしらえて貰もらつた。

腹がしきりに痛むので、寢室へ退いて、長椅子の上に横になっていると、窓を撲つ雨の音がしだいに繁しげくなった。これじゃ舞踏会に行く連中も、だいぶ御苦勞様な事になったものだと思つて、ポケットから招待状を出して寝ながら、また眺めて見た。絵葉書ぐらいの大きさの厚紙の一面には、歌うた麿まろの美人が好い色に印刷されている。一面には中村是公同夫人連名で、夏目金之助を招待している。よくこんなものを拵える時間があつたなと感心して、うとうとしかけたところへ、ボーイ頭がしらが来て、ただいま総裁からの電話で、今夜舞踏会へおいでになるか伺うかがえと云う事でございますがと云うから、行かないと返事をしてくれと頼んで、本当に寝

てしまった。眼が覚めたら雨はいつの間にか歇んで、綺麗な空が磨き上げたように一色ひとついろに広く見える中に、明かな月が出ていた。余は硝子越ガラスゴシにこの大きな色を覗のぞいて、思わず是公のために、舞踏会の成功を祝した。

後で本人に聞いて見ると、是公はその夜舞踏の済んだ後で、多数の亜米利加士官アメリカシカと共に倶楽部のバーに繰り込んだのだそうだ。

そこで、士官連が是公に向つて、今夜の会は大成功であるとか、非常に盛さかんであつたとか、口々に賛辞ていを呈したものだから、是公はやむをえず、大声たいせいを振り絞しぼつて gentlemen 《ゼントルメン》と叫んだ。すると今までがやがや云つていた連中が、総裁の演説でも始まる事と思つて、一度に口を閉とじて、満場は水を打ったよう

に静かになつた。是公は固もとよりゼントルメンの後あとを何とかつけなければならぬ。ところがゼントルメン以外の英語があいにくひこと
 言も出て来なかつた。英語と云う英語は頭の底からことごとく
 酒で洗い去られてしまつているので、仕方なしに、急に日本語に
 鞍くらがえ換かをして、ゼントルメンの次へもつてきて、すぐ大いに飲み
 ましようどなと怒鳴つた。ゼントルメン大いに飲みましようは、たい
 ていの亜米利加人アメリカじんに通じる訳のものではないが、そこがバーのバ
 ーたるところで、ゼントルメン大いに飲みましようどなとやるや否や、
 士官連がわあつと云つて主人公を胴どうあげ上うへにしたそうである。

明治二十年の頃だつたと思う。同じ下宿にごろごろしていた連
 中が七人ほど、江の島まで日着ひづきひがえ日帰りの遠足をやった事がある。

赤毛布あかげつとを背負しよつて弁当をぶら下げて、懐中にはおのおの二十銭
ずつ持つて、そうして夜の十時頃までかかつて、ようやく江の島
のこつち側がわまで着いた事は着いたが、思い切つて海を渡るものは
誰もなかつた。申し合せたように毛布けつとに包くるまつて砂浜の上に寝た。
夜中に眼が覚さめると、ぽつりぽつりと雨が顔へあたつていた。そ
の上犬が来て真水英夫まみずひでおの脚絆きやはんを啣くわえて行つた。夜が白んで物の
色ほのかが仄ほのかに明るくなつた頃、御互の顔を見渡すと、誰も彼も奇麗きれいに
砂だらけになつてゐる。眼を擦こすると砂が出る。耳を掘ほじくると砂が
出る。頭を搔かいても砂が出る。七人はそれで江の島へ渡つた。そ
の時夜明けの風が島を繞めぐつて、山にはびこる樹きがさあと靡なびいた。
すると余の傍そばに立つていた是公が何と思つたものか、急にどうだ、

あの樹を見ろ、戦々せんせん兢きやうきやう々々として
 いるじゃないかと云つた。

草木の風に靡なびく様を戦々兢々と真面目まじめに形容したのは是公が嚙はじめ矢じめなので、それから当分の間は是公の事を、みんなが戦々兢々と号ごうしていた。当人だけは、いまだに戦々兢々で差さ支しえつかないと信じているかも知れないんだから、ゼントルメン大いに飲みましようも、この際亜米利加語として士官側に通用したと心得ているんだらう。通じた証しょうこ拠こには胴上どうじやうにしたじやないかくらい、酔ようと云いかねない男である。

昨夕は川崎造船所の須田君すだくんからいつしよに晩食ばんめしでも食おうと云う案内があつたが、例のごとく腹が痛むので、残念ながら辞退して、寢室で肉汁ソツヅを飲んで寝てしまった。朝起きるや否や、もう好かろうと思つて、腹の近所へ神経をやつて、探りさぐを入れて見ると、ヤツぱり変だ。何だか自分の胃が朝から自分を裏切ろうと工たくんでいるような不安がある。さてどこが不安だろうと、局所を押えにかかると、どこも応じない。ただ曇つた空のように、鈍痛どんつうが薄く一面に広がっている。苦にがい顔をして食堂へ下りて飯をすましてまた室へやへ帰つてぼんやりしていると、河村さんが戸口まで来て、今夜満鉄のものが主人役になつてあなたがた二三名を扇芳せんぼう

亭へ招待したいからと云う叮嚀な御挨拶である。どうもせっかくですが、実はこれこれだと断ると、そうですか、実は總裁も今夜は所労で出られませんと答えて帰られた。

河村君が帰るや否や股野が案内もなくやって来た。今日は襟の開いた着物を着て、ちゃんと白い襯衣と白い襟をにかけているから感心した。股野と少し話しているところへ、また御客があらわれた。ボイの持って来た名刺には東北大学教授 橋本左五郎 とあったので、おやと思った。

橋本左五郎とは、明治十七年の頃、小石川の極楽水の傍で御寺の二階を借りていっしょに自炊をしていた事がある。その時はまだ、隔日に牛肉を食って、一等米を焚いて、それで月

々二円ですんだ。もつとも牛肉は大きな鍋へ汁をいっぱい拵えて、その中に浮かして食った。十銭の牛を七人で食うのだから、こうしなければ食いようがなかつたのである。飯は釜から杓しゃくつて食った。高い二階へ大きな釜を揚あげるのは難義であつた。余はここで橋本といつしよに予備門へ這はい入る準備をした。橋本は余よりも英語や数字において先輩であつた。入学試験のとき代数がむずかしくつて途方に暮れたから、そつと隣席の橋本から教えて貰つて、その御蔭おかげでやつと入学した。ところが教えた方の橋本は見事に落第した。入学をした余もすぐ盲腸炎に罹かかつた。これは毎晩寺の門前へ売りに来る汁粉しるこを、規則のごとく毎晩食つたからである。汁粉屋は門前まで来た合図に、きつと団扇うちわをばたばたと鳴らした。

そのばたばた云う音を聞くと、どうしても汁粉を食わずにはいられなかった。したがって、余はこの汁粉屋の爺おやしのために盲腸炎にされたと同然である。

その後左五のちさごは——当時余等は橋本を呼んで、左五左五と云つていた。實際彼は岡山の農家の生れであつた。——左五はその後追試験に及第したにはしたが、するかと思うとまた落第した。そうして、何だ下らないと云つて北海道へ行つて農学校へ這入はいつてしまつた。それから独逸ドイツへ行つた。独逸へ行つて、いつまで経たつても帰らない。とうとう五年か六年かいた。つまり留学期限の倍か倍以上も向うで暮した事になる、その費用はどうして拵えたものかほとんど分らない。

この橋本が不思議にも余より二三月前に満鉄の依頼に応じて、
 蒙古もうちこの畜産事状を調査に来て、その調査が済んで今大連に帰った
 ばかりのところへ出つ食わしたのである。顔を見ると、昔から慄ひ
 ょうかんようかんの相そうがあつたのだが、その慄悍りょうかんが今蒙古と新しい関係がつ
 いたため、すこぶる活躍かくやくしている。闖ドリアを排はいして這入はいつて来るや否
 や、どうだ相変さへらず頑健がんけんかねと聞かざるを得なかつたくらいで
 ある。

十四

ええまあ相変さへらずでと、橋本は案に相違さへした落ちつき方である。

昔予備門に這入って及第だとか落第だとか騒いでいた時分にはけつしてこう穏かじやなかつた。彼の鼻の先が反返そりかえっているごとく、彼は剽ひょうきん軽かろうでかつ苛辣からつであつた。余はこの鼻のためによくへこ凹へこまされた事を記憶している。

その頃は大勢で猿ざる楽がくちよう町の末富屋すえとみやという下宿に陣取つていた。この同勢は前後を通じると約十人近くあつたが、みんな揃そろいも揃つた馬鹿の腕白で、勉強を軽蔑けいべつするのが自己の天職であるかのごとくに心得ていた。下読などはほとんどやらずに、一学期から一学期へ辛かろうじて綱渡りをしていた。英語は教場であてられた時に、分らない訳やくを好い加減につけるだけであつた。数学はでききるまで塗板ボードの前に立つているのを常としていた。余のごとき

は毎々一時間ぶつ通しに立往生をしたものだ。みんなが代数書を抱えて今日も脚かっけ気になるかなど云つては出かけた。

こう云う連中だから、大概は級の尻しりの方に塊かたまつて、いつでも雑然ちんれつと陳列ちんれつされていた。余のごときは、入学の当時こそ芳賀矢一いちの隣いぢに坐つていたが、試験のあるたんびに下落して、しまいは土俵際どひょうぎわからあまり遠くない所でやつと踏ふみ応こたえていた。それでも、みんな得意であつた。級の上にいるものを見て、なんだ点取とがと云つて威張やつていたくらいである。そうして、稍ややともすると、我々はポテンシャル・エナジーを養うんだと云つて、むやみに牛肉を喰くつて端艇ポートを漕こいだ。試験が済むとその晩から机を重ねて縁側えんがわの隅すみへ積み上げて、誰も勉強のできないような工夫を

して、比較的広くなつた座敷へ集つて腕押うで押しをやつた。岡野とい
う男はどこからか、玩具おもちゃの大砲を買つて来て、それをポンポン
座敷の壁へ向つて発射した。壁には穴がたくさん開いたあ。試験の
成績が出ると、一人では恐こわいからみんなを駆かり催もよおして揃そろつて見
行つた。するとことごとく六十代際きわどく引つ掛つてゐる。橋本
は威勢の好い男だから、ある時詩を作つて連中一同に示した。韻いん
も平ひょうそく仄へつもない長い詩であつたが、その中に、何ぞ憂うれえん席せきじ
序よかさん下算べんの便と云う句が出て来たので、誰にも分らなくなつた。
だんだん聞いて見ると席序下算の便とは、席順を上から勘かんじよう定てい
しないで、下から計算する方が早分りだと云う意味であつた。ま
るで御籤おみくじみたよな文句である。我々はみんなこの御籤にあた

つてひやひやしていた。

そのうち下算かさんにも上算じょうさんにもまるで勘定に這入らないものが、

ぼつぼつできて来た。一人消え、二人消えるうちに橋本がいた。

是公せこうがいた。こう云う自分もいた。大連では是公に逢あつて、この落

第の話が出た時、是公は、やあ、あの時貴様も落第したのかな。

そいつは頼母たのもしいやと大いに嬉うれしがるから、落第だつて、落第の

質たちが違ちがわあ。おれのは名譽の負傷だと答えておいた。

是公だの、余だの、今の旅順の警視けいし総長そうちょうだのが落ちながら、

ぶら下がっている間に、左五だけは決然として北海道へ落ち延び

たのである。その落第の張本ちようほんとも云うべき彼が、いくら年を

取つたつて、かほどに慇懃いんぎんになろうとは思ひも寄らぬ事であつ

た。今日は午後から満鉄の社へ行つて、蒙古旅行に関する話をするんだと云つてゐる。

十五

河村さんの書いてくれた表ひょうを見ると、娯楽機関という題目のもとに、倶楽部クラブとか会とか名のつくものが十ばかり並べてある。中にはゴルフ会だの、ヨット倶楽部だのと、名前からして洒落しゃれたのさえ、ちらほら見える。ヨット倶楽部の下に（ただし一艘そう）と括か弧つっこで註がついているのは、新設だからまだ一艘しかないという意味なんだろう。

參觀すべき場所と云う標題みだしのもとには、山城町やまぎちようの大連医院だ
 の、児玉町こだまちようの従業員養成所だの近江町おうみちようの合宿所だの、浜はまちよ
 町の発電所だの、何だのかだのみんなで十五六ほどある。なる
 ほどこれでは大連に一週間ぐらいいなければ、満鉄の事業も一通
 り観みる訳に行かないと云われるはずだ。しかも是公ぜこうは是非共万まんべ
 遍んなくよく観て行かなくつちやいけないよと命令的に注意する
 んだから、容易じやない。その上よく観て、何でも気がついた事
 があるなら、そう云いなさいと、あたかも余を視察家扱にするん
 だからなおさら痛み入る。余は手に持った表に通り眼を通しな
 がら、傍そばにいる股野に、おい少し出て見るかなと云った。股野は
 固もとより余を連れて、大連中ぐるぐる引き廻す気で来ている。もつ

とも別段社からつけてくれたという訳じゃないんだが、本人の志で社の用事をすつぽかすりようけん了見らしい。そうしていつの間にか、ホテルへ馬車を云いつけている。

余は股野と相乗りで立派な馬車を走らして北公園に行った。と云うと大層だが、車の輪が五六度回転すると、もう公園で、公園に這はい入ったかと思うと、もう突き抜けてしまった。それから社員倶楽部と云うのに連れて行かれて、うたい謡の先生の月給が百五十円だと云う事を聞いて、また馬車へ乗って、今度は川崎造船所の須田君の所の工場を外から覗のぞき込んで、すぐ隣の事務所に這入って、須田君に昨日きのうの御礼を述べた。事務所の前がすぐ海で、船渠ドックの中が蒼あおく澄あんでいる。あれで何なん噸トンぐらいの船が這入りますかと聞

いたら、三千噸ぐらいまでは入れる事ができますという須田君の答であつた。船渠の入口は四十二尺だとか云つた。余は高い日がまともに水の中に差し込んで、動きたがる波を、じつと締めつけているように静かな船渠の中を、窓から見下しながら、夏の盛りみおろに、この大きな石で畳んだ風呂へ這入つて泳ぎ回つたらさぞ結構だろふと思つた。

今度はどこだと股野に聞いて見ると、今度は電氣の工場へ行きましようという事である。てつれいまる鉄嶺丸が大連の港へ這入つたときままつすぐず第一に余の眼に、高く赤く真直に映じたものはこの工場の煙突であつた。船のものはあれが東洋第一の煙突だと云つていた。なるほど東洋第一の煙突を持つていただけに、中へ這入ると、すさま凄

じいものである。その一部分では、てんじょう天井を突き抜いて、青空が見えるようにして、四方の壁を高く積み上げていた。屋根の高さを増す必要があつての事だろうが、青空が煉瓦れんがの上に遠く見えるばかりか、尋常の会話はとうてい聞えないくらいに、恐ろしい音が響いている中に、塵ちりを浴びて立つた時は、妙な心持がした。ある所は足の下も掘り下げて、暗い所にさまざまの仕掛しかけが猛烈に活動していた。工業世界にも、文学者の頭以上に崇高なものがあ
るなど感心して、すぐその棟むねを飛び出したくらいである。詮せんずるに要領はただ凄まじい音を聞いて、同じく凄まじい運動を見たのみである。

股野はその間を馳かけ回まわって、おい誰さんはいないかねと、しき

りに技師を探していた。技師は股野に捕まるほど閑でなかつたと見えて、とうとう見当らなかつた。

十六

今日は化物屋敷を見て来たと云うと、田中君が笑いながら、夏目さん、なぜ化物屋敷というんだか訳を知っていますかと聞いた。余は固より下級社員合宿所の標本として、化物屋敷の中を一覧したままで、化物の因縁はまだ詮議していなかつた。けれども化物屋敷はこれだと云われた時には、うんそうかと云つて、少しも躊躇なく足を踏込んだ。なぜそんな恐ろしい名が、この建物

に付纏つけまとっているのかと、立ちどまつて疑つて見る暇も何もなかつた。いわゆる化物屋敷はそれほど陰気にでき上がつていた。でき上つたというと新規こしらに拵こしらえた意味を含んでいゝから、この建築の形容としては、むしろ不適當であるかも知れない。化物屋敷はそのくらい古い色をしている。壁は煉瓦れんがだろうが、外部は一面の灰色で、中には日の透とおりそうもない、薄暗い空気を湛たえるごとくに思われた。

余はこの屋敷の長い廊下を一階二階三階と幾いくか返かえりりか往來おうらいした。歩けば固い音がする。階はし段ごだんを上あるときはなおさらこつこつ鳴つた。階段は鉄でできていた。廊下の左右はことごとく部屋で、部屋という部屋は皆締め切つてあつた。その戸の上に、室しつの

所有者の標札がかかっている。烈しい光線に慣れた眼で、すぐその標札を読もうとすると、判然読めないくらい廊下は暗かった。余はちよつと立ちどまって室の中を見る訳には行かないのかなと股野に聞いて見た。股野はすぐ持つていた洋杖で右手の戸をとんと叩いた。しかしはいとも、這入れとも応えるものはなかった。股野はまた二番目の戸をとんと叩いた。これも中はしんとしてゐる。股野は毫も辟易した気色なく無遠慮にそこいら中こつこつ叩いて歩いたが、しまいまで人氣のする室には打つからなかった。あたかも立ち退いた町の中を歩いているような感じがした。三階に来た時、細い廊下の曲り角で一人の女が鍋で御菜を煮ているのに出逢った。そこには台所があつた。化物屋敷では五六軒寄

つて一つの台所を持つているのだそうだ。御神おかみさん水は上にありますかと尋ねたら、いえ下から汲くんで揚げますと答えた。余はこの暗い町内に、便所がどこにいくつあるか不審に思ったが、つい聞きもせず、女の前を行き過ぎて通ろうとすると、そっちは行きどまりでございまして注意された。道理で真ま闇くらであつた。

田中君の話によると、この建物は日露戦争の当時の病院だとか云う事である。戦争が烈はげしくなつて、負傷者の数が増して来るに従つて、収容した人間に充分の手当ができないばかりでなく、気の毒ながら見殺しにしなければならぬ兵士がたくさんにできて、それらの創きず口ぐちから出る怨うらみの声が大連中に響き渡るほど凄すさまじかつたので、その以後はこの一ひと廓くるわを化物屋敷と呼ぶようになって

た。しかし本当だか嘘だか実は僕も保証しないと、田中君自身が笑っていたから、余はなおさら保証しない。

ただ満鉄の重役が始めて大連に渡ったとき、この化物屋敷に陣を構えた事だけは事実である。その時この建物は化物さえ住みかねるほどに荒れ果てて、残焼家屋として、骸骨のごとくに突っ立っていたそうである。陣取った連中は死物狂で、天候と欠乏と不便に対して戦後の戦争を開始した。汽車の中で炭を焚いて死に損なったり、貨車へ乗って、カンテラを点けて用を足そうとすると、そのカンテラが揺ぶれてすぐ消えてしまったり、サイホン呑むと二三滴口へ這入るだけであとはすぐ氷の棒に変化したり、すべてが探険と同様であった。

「清野せいのみが毛織シヤツの襯衣シヤツを半ダース重ねて着たのは彼時あのときだよ」

「清野は驚いて、あれつきりやつて来ない」

余は田中君と是公がこんな話をするのを聞いて、つい化物屋敷の事を忘れてしまった。

十七

三階へ上あがつて見ると豆ばかりである。ただ窓際まどぎわだけが人の通る幅ぐらいの床ゆかになっている。余は静かに豆と壁の間をぐるぐる廻まわつて歩いた。気をつけないと、足の裏で豆を踏み潰つぶす恐れがある上に、人のいない天井裏を無益に響かすのが苦くになったからで

ある。豆は砂山のごとく脚下に起伏している。こちらの端から向うの端まで眺めて見ると、随分と長い豆の山脈ができ上つていた。その真中を通して三カ所ほどに井桁いげたに似たかつこう恰好の穴が掘つてある。豆はその中から断えず下へ落ちて行つて、平たく引割られるのだそうだ。時々どきつと音がして、三階のひとすみ一隅に新しい砂山ができる。これはクーリーが下から豆の袋を背負しよつて来て、加減の好い場所を見計らつて、袋の口から、ばらに打ち撒まけて行くのである。その時はぼうと咽むせるような煙けむが立つて、数え切れぬほどの豆と豆の間に潜ひそんでいる塵ちりが一度に踊おどり上あがる。

クーリーはおとなしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、ただ見物するのでさえ心持が好い。彼等の背中に担かついでいる豆の

袋は、米俵のように軽いものではないそうである。それを遥はるかの下から、のそのそ背負しよつて来ては三階の上へ空あけて行く。空けて行つたかと思うとまた空けに来る。何人がかりで順々に運んでくるのか知れないが、その歩調から態度から時間から、間隔からことごとく一樣である。通り路は長い厚板を坂に渡して、下から三階までを、普請ふしんの足場のようこしらに拵こしらえてある。彼等はこの坂の一つを登つて来て、その一つをまた下りて行く。上のぼるものと下りるものが左右の坂の途中で顔を見合せてもほとんど口を利きいた事がない。彼等は舌のない人間のように黙々として、朝から晩まで、この重い豆の袋を担かつぎ続けに担いで、三階へ上つては、また三階を下くだるのである。その沈黙と、その規則ずくな運動と、その忍耐とその

精力とはほとんど運命の影のごとくに見える。實際立つて彼等を観察していると、しばらくするうちに妙に考えたくなるくらいである。

三階から落ちた豆が下へ回るや否や、大きな麻風呂敷あさぶろしきが受取つて、たちまち釜かまの中に運び込む。釜の中で豆を蒸むすのは実に早いものである。入れるかと思ふと、すぐ出している。出すときには、風呂敷の四隅つかを攫つかんで、濛もうもう々と湯氣の立つやつを床ゆかの上に放り出す。赤銅しゃくどうのような肉の色が煙の間から、汗で光びか々びかするの
 が勇ましく見える。この素裸すはだかなクーリーの体格を眺めたとき、余はふと漢楚軍談かんそくんだんを思い出した。昔韓信かんしんに股くぐを潜くぐらした豪傑はきつとこんな連中に違ちがひない。彼等は胴たぐまから上の筋肉たぐまを逞たくましく露あら

わして、大きな足に牛の生皮きがわを縫合せた堅い靴かたを穿はいている。蒸した豆を藪いで囲んで、丸い杵わくを上から穿はめて、二尺ばかりの高さになった時、クーリーはたちまちこの靴のまま杵わくの中に這はい入つて、ぐんぐん豆を踏み固める。そうして、それを螺旋らせんの締棒しめぼうの下に押込んで、把てをぐるぐると廻し始める。油は同時に搾しぼられて床ゆかし下の溝たみぞにどろどろに流れ込む。豆は全くの糟かすだけになつてしまふ。すべてが約二三分の仕事である。

この油が唧筒ポンプの力で一丈四方もあろうという大きな鉄の桶おけに吸上げられて、静しずかに深よどそうに淀んでいるところを、二階へ上がつて三つも四つも覗のぞき込んだときには、恐ろしくなつた。この中に落ちて死ぬ事がありますかと、案内に聞いたたら、案内は平気な顔を

して、まあ滅多めったに落ちるような事はありませんねと答えたが、余はどうしても落ちそうな気がしてならなかった。

クーリーは実にみごとに働きますね、かつ非常に静肅だ。と出がけに感心すると、案内は、とても日本人には真似まねもできません。あれで一日五六銭で食っているんですからね。どうしてああ強いのだか全く分りませんと、さも呆あきれたように云つて聞かせた。

十八

股野うまが先生私の宅うちへ来なさらんか、八畳の間が空あいています、夜具ふとんも蒲団ふとんもあります。ホテルにいるより呑気のんきで好いでしよう

親切に云つてくれる。何でも股野の家の座敷からは、大連が一目に見渡されるのみならず、海が手に取るように眺められるのみならず、海の向うに連なる突つら兀とつこつ極まる山脈さえ、坐つていると、窓の中に向うから這入はいつて来てくれるという重ちようほう宝うちな家なんだ
そうである。

始めのうちは股野の自慢を好い加減かげんに聞き流して、そうかそうかと答えていたが、せつかくの好意ではあるし、もともと気の多い男だから、都合によつては少し厄やっかい介かいになつても好いぐらいに思つて、ついでの時ぜこう是公こうにこの話をすると、そんな所へ行つちやいかんとたちまち叱られてしまった。もしホテルが厭いやなら、おれの宅へ来い、あの部屋へ入れてやるからと云うんで、書齋の次の

畳の敷いてある間を見せてくれるのだが、別に西洋流の宿屋に愛あ想いそをつかした訳でもないんだから、じゃ厄介になろうとも云わなかつた。

是公は書齋の大きな椅子いすの上に胡坐あぐらをかいて、河豚ふぐの干物ひものを噛かじつて酒を呑のんでいる。どうして、あんな堅いものが胃に収容できるかと思うと、実に恐ろしくなる。そうこうする内に、おいゼムを持っていくなら少しくれ、何だかおれも胃が悪くなったようだ。と手を出した。そうして、胃が悪いときは、河豚の干物でも何でも、ぐんぐん喰なつて、胃病を驚かしてやらなければ駄目だ。そうすればきつと癒なると云つた。酔よっていたに違ちがない。

余はポケットから注文の薬を出して相手にあてがつた。これ

は二三日前は公といつしよに馬車に乗って、市中を乗り廻した時、是公の御者ぎよしやから二十錢借りて大連の薬屋で買ったものである。その時は是公の御者に対する態度のすこぶる叮嚀ていねいなのに気がついて少しく驚かされた。君ちよつとそこいらの薬屋へ寄って、ゼムを買ってやって下さいと云うんだから非凡である。

君は御者に対して叮嚀過ぎるよと忠告してやったら、うんあの時の二十錢をまだ払わなかつたつけと思ひ出したように河豚の干物をまた囓っていた。

是公の御者には廿錢借かりがあるだけだが、その別当べつとうに至つては全く奇抜である。第一日本人じゃない。辮髪べんぱつを自慢そうに垂らして、黄色の洋服ズボンに羅紗らしゃの長靴を穿はいて、手に三尺ほどのほつす扨子を

ぶら下げている。そうして馬の先へ立って駆ける。よくあんな紳士的な服装なりをして汗も出さずに走かけられる事だと思ふくらいに早く走ける。もつとも足も長かった。身の丈たけは六尺近くある。

別当と御者はこのくらいにしてまた股野にかえるが、余は是公に叱られたため、とうとう股野の家へは移らなかつた。けれども遊びには行つた。なるほど小山の上に建てられた好い社宅である。もつとも一軒立いっけんだてではない。長い棟むねがいくつも灰色に並んでいるうちの一番はずれの棟の、一番最後の番号のその二階が彼の家族の領分であつた。岡の下から見ると、まるで英国の避暑地へ行つたようだとある西洋人が評したほど、外部は厚い壁で洋式にできているが、中には日本の香においがする奇麗きれいな畳が敷いてあつた。なる

ほど景色けしきが好い。大連の市街が見える、大連の海が見える、大連の向うの山が見える。股野の家にはもつたないくらいである。余はそこで村井君に逢あつて、股野の細君に逢つて、手厚い御馳走ごちそうになつて歸つた。

十九

支那の宿屋を一つ見ましようと言いながら、股野は路の左側にある戸を開けて中へ這入はいつた。そこには日本人が三人ほど机を並べて事務を執とつていた。股野はそのうちの紺こんの洋服を着た人を捕つかまえて、話を始めた。君ここは宿屋だろうと聞いている。宿屋じ

やないよと立ちながら返事をしている。何だか様子が変になって来た。やがて余はこの紺服の人に紹介された。紹介されて見ると、これは商業学校出の谷村君で、無論旅屋やどやの亭主ではなかつた。谷村君はこの地で支那人と組んで豆の商売を営んでいる。したがつて取引上の必要があつて、奥の方から大連へ出て来る豆の荷主にぬしと接触しなければならぬのだが、こつちの習慣として、こう云う荷主はけつして普通の旅籠はたごを取らない。出て来ればきつと取引先へ宿とまつて、用の済むまではいつまでもそこに滞在している。しかもその数は一人や二人ではない。したがつて谷村君の奥座敷は一種の宿屋みたような組織にできている。

じゃその奥座敷をちよつと拝見できますかと云うと、谷村君は

さあさあと自分から席を離れて、快よく案内に立たれる。余は谷村君の後へ追いて事務室の裏へ出た。股野も食付いて出た。裏は真四角な庭になっている。無論樹も草も花も見当らない、ただの平たい場所である。そこを突き抜けた正面の座敷が応接間であった。応接間の入口は低い板間で、突当りの高い所に蒲団が敷いてある。その上に腰をかけて談判をするのだそうだが、横着な事には大きな括くくりまくら枕まくらさえ備えつけてある。しかし肱ひじを突くためか、頭のを載せるためかは聞き糺ただして見なかつた。彼等は談判をしなから阿片あへんを飲む。でなければ煙草たばこを吸う。その煙管きせるは煙管と云うよりも一種の器械と評した方が好いくらいである。錫すずの胴どうに水を盛すすつて雁首がんくびから洩もれる煙がこの水の中を通つて吸口まで登つてく

る仕掛なのだから、慣れないうちは水を吸い上げて口中へ入れる恐れがある。一服やって御覧なさいと勧められたから、やって見たが、ごぼごぼ音がしてまるで脂やにを呑むような心持がした。

二階が荷主の室へやだと云うんで、二階へ上あがつて見ると、なるほど室がたくさん並んでいる。その中うちの一つでは四よつたり人で博奕ばくちを打っていた。博奕の道具はすこぶる雅がなものであった。厚みも大きさも将棋しょうぎの飛車角ひしゃかくぐらいに当る札を五六十枚ほど四人で分けて、それをいろいろに並べかえて勝負を決していた。その札は磨いた竹と薄い象牙ぞうげとを背中合せに接ついだもので、その象牙の方にはいろいろの模様が彫刻してあった。この模様の揃った札を何枚か並べて出すと勝になるようにも思われたが、要するに、竹と象牙が

ぱちぱち触れて鳴るばかりで、どこが博奕なんだか、実はいつこ
う解らなかつた。ただこの象牙と竹を接ぎ合わせた札を二三枚貰
つて来たかつた。

一つの室では五六人寄つて、そのうちの一人が笛ふえを吹くのを聞
いていた。幕を開けて首を出したら、ぱたりと笛やを歇めてしまつ
た。また吹き始めるかと思つて、しばらく室の中に立つていたが、
とうとう吹かなかつた。室の中には妙な書が麗々と壁はに貼りつけ
てある。いずれも下手まいものなのに、何々先生のために何々書す
と云つたようにもつたいぶつたのばかりであつた。股野が何か云
うと、向うの支那人も何か云う。しかし両方の云う事は両方へ通
じないようである。

二十

波止場はとばから上あがつて真直まっすぐに行くと、大連の町へ出る。それを真直まっすぐに行かずに、すぐ左へ折れて長い上屋うわやの影を向うへ、三四町通り越した所に相生あいおいさんの家がある。西洋館の二階を客間にして古い仏像やら鏡やら銅器陶器たぐいの類きらいを奇麗きれいに飾っているから、客間を見ただけではただ一通りの風流人としか見えなない。相生さんは満鉄の社員として埠頭ふとう事務所じむしょの取締である。

もつと卑近な言葉で云うと、荷物の揚あげ卸おろしに使われる仲仕なかしの親方をやっている。かつて門司の労働者が三井に対してストライ

キをやったときに、相生さんが進んでその衝に当つたため、てぎわ手際

よく解決が着いたとか云うので、満鉄から仲仕の親分としてしょう招

へい聘されたようなものである。実際相生さんは親分おやぶんかたぎ氣質にでき

上っている。満鉄から任用の話があつたとき、子供が病気で危篤きとく

であつたのに、相生さんはさつさと大連へ来てしまった。来て一

週間すると子供が死んだと云う便りたよがあつた。相生さんは内地を

去る時、すでにこの悲報を手にする覚悟をしていたのだそうだ。

相生さんは大連に来るや否や、仲仕その他すべて埠頭に関する

事務を取り扱う連中を集めてここに一部落を築き上げた。相生さ

んの家を通り越すと、左右に並んでいる建物は皆自分の経営にな

つたものばかりである。その中には図書館がある。倶楽部クラブがある。

運動場がある。演武場がある。部下の住宅は無論ある。

倶楽部では玉を突いていた。図書館には沙翁全集さおうがあつた。ポ
ルグレーヴの経済字彙じいがあつた。余の著書も二三冊あつた。

ここは柔道の道場に使っていますが、時によると講談をやつた
り演説をやつたりしますと云う相生さん自身の説明について、中
を覗のぞき込むと、なるほど道場にはちようど好い建物がある。その
奥こうざに高座こうざができていて、いつでも寄席よせもしくは講演を開くような
設備もある。講演でどんな講演ですかと聞き返したら、相生さん
は、まあ内地から来られた人だとか何とかいうのを頼んでやりま
すと答えられた。ことによると、遠からぬうちつかに捕つかまって、ここ

へ引つ張り出されはしまいかと、その時すぐ気がついたが、真逆まさか私わたしはどうぞ廢よしにして下さいと、頼まれもしないうちに断るのも失礼だと思つて、はあなるほどと首肯うなずいて通り過ぎた。

最後にもつとも長い二階建の一棟ひとむねの前に出た。これが共同生活をやらしている所だと、相生さんが先へ這入はいる。中は勸工場かんこうばのように真中を往来にして、同く勸工場おなじの見世みせに当る所を長屋の上り口にしてある。だから長屋と長屋とは壁かべ一重ひとえで仕切られながら、約一丁も並んでいるばかりか、三尺の往来を越すとすぐ向うの家うちになる。上り口を枕にして寝れば、吸付すいつけた苳ぼこのやり取りぐらいはできるほど近い。相生さんが先へ立つて、この狭い往来を通ると、裁縫しごとをしたり、子供を寝かしたりしている神かみさん達が、

みんな町^{てい}噺^{ない}に挨拶^{あいさつ}をする。しかし中には気がつかずに何か話しているのも見える。

この部落に住んでいる人間が総^{そう}がかりになった上に、その何十倍か何百倍のクーリーを使つても、豆の出盛^{でさか}りには持て余すほど荷が後から後からと出てくる。相生さんの話によると、多い時は着^{ちやく}荷^{くに}の量が一日ならし五千噸^{トン}あるそうである。これがため去年^{うき}雨期を持ち越した噸数は四万噸で、今年^{こんねん}はそれが十五万噸^{のぼ}に上つたとか聞いた。

南北千五百尺東西四千二百尺の埠頭^{ふとう}の側^{そば}にこのくらい豆を積んだら、ずいぶん盛^{さかん}なものだろう。

二十一

旅順から電話がかかってこつちへはいつ来るかという問合わせである。おい誰がかけてくれるんだろうなと橋本に聞いて見ると、橋本はそうだなあと云うだけで要領を得ない。おい名前は分らないのかとやむをえずボイに尋ね返したら、ボイは依然として、ただ民政署みんせいしよだと云つてかけて参りましたと同じ事を繰返している。おおかた友熊ともくまだろうぐらいに橋本と二人で見当をつけて返事をさせた。これが白仁しらにちようかん長官の好意から出た聞き合せであつた事は旅順に着いて後のち始めて知つた。

旅順には佐藤友熊と云う旧友があつて、警視総長と云ういかめ厳しい

役を勤めている。これは友熊の名前が広告する通りの薩州人さつしゅうじんで、顔も氣質も看板のごとく精悍せいかんにでき上がっている。始めて彼を知ったのは駿河台するがだいの成立学舎という汚きたない学校で、その学校へは佐藤も余も予備門に這入はいる準備のために通学したのであるからよほど古い事になる。佐藤はその頃筒袖つつそでに、脛すねの出る袴はかまを穿はいてやって来た。余のごとく東京に生れたものの眼には、この姿がすこぶる異様に感ぜられた。ちようど白虎隊びやくこたいの一人いちにんが、腹を切り損なつて、入学試験を受けに東京に出たと思われなかつた。教場へは無論下駄げたを穿はいたまま上あがつた。もつともこれは佐藤ばかりじゃない。我等もことごとく下駄のままあがつた。上う草履わぞうりや素足すあしで歩くような学校じゃないのだから仕方がない。床ゆか

に穴が開いていて、気をつけないと、縁の下へ落ちる拍子に、
 向脛むこうずねを摺剥すりむくだけが、普通の往来より悪いぐらいのものである。
 る。

古い屋敷をそのまま学校に用いているので玄関からがすでに教
 場であつた。ある雨の降る日余はこの玄関に上つて時間の来るの
 を待っている、黒い桐油とうゆを着て 饅頭まんじゅう笠がさを被かぶつた郵便脚夫が
 門から這入つて来た。不思議な事にこの郵便屋が鉄瓶てつびんを提さげて
 いる。しかも全くの素足である。足袋たびは無な論りの事、草鞋わらじさえ穿はい
 ていない。そうして、普通なら玄関の前へ来て、郵便と大きな声
 を出すべきところを、無言のまますたすた敷台から教場の中へ這
 入いつて来た。この郵便屋がすなわち佐藤であつたので大いに感心

した。なぜ鉄瓶を提さげていたものかその理由わけは今こんにち日までついに聞く機会がない。

その後ご佐藤は成立学舎の寄宿へ這入った。そこで賄まか征伐をやつた時、どうした機勢はずみか額きずに創きずをして、しばらくの間しろぬの白布で頭を巻いていたが、それが、後うしろ鉢巻はちまきのようにいかにも勇ましく見えた。賄なぐに擲なられたなど調戲からかつて苛ひどい目に逢あつたので今にその颯さ爽つそたる姿を覚えている。

佐藤はその頃頭どしつに毛とぼしの乏とぼしい男であつた。無論老朽はげした禿はげではな
いのだが、まあ土質どしつの悪い草原どしつのように、一面に青々とは茂らな
かつたのである。漢語でいうと短たんぱつ髪つし種しょう々しょうとでも形容なびかしたら
好ないのかも知れない。風が吹けば毛なびかの方かたで一本一本に靡なびかく傾たむが

った。この頭は予備門へ這入つても黒くならなかつた。それで皆みんなして佐藤の事を寒かんすずめ雀寒雀と囃はやしていた。当時余は寒雀とはどんなものか知らなかつた。けれども佐藤の頭のようなものが寒雀なんだろうと思つて、いっしょになつてやっぱり寒雀寒雀と調戯からかつた。この渾名あだなを發明した男はその後技師になつて今は北海道にいる。

話が前後するようだが、旅順に来て十何年ぶりに佐藤に逢つて、例の頭を注意して見ると、不思議な事に、その頭には万遍まんべんなく綿密に毛が生えていた。もつとも黒いのばかりではなかつた。近頃は正当防禦ぼうぎよのために、こう短く刈つているんだと云つて、三分刈の濃い頭を笑いながら搔かいて見せた。

旅順から二度目の電話がかかった翌日の朝、橋本と余は、この旧友に逢うため、また日露の戦跡をみ観るため、大連から汽車に乗った。乗る時、是公が友熊ともくまによりしくと云った。是公は何か用事があつたと見えて、国沢君と二人で停車場ステーションの構内を横切つて妙な方角へ向いて歩いて行つた。やがて二人の影は物にささえ遮ぎられて、汽車の窓から見えなくなつた。そうして満洲に有名な高こうりよ梁うの色が始めて眼底に映じ出した。汽車は広い野の中に出たのである。

おい旅順に着いたら久しぶりに日本流の宿屋へ泊ろうかと橋本に相談を掛けるとそうだな浴衣ゆかたを着てごろごろするのも好いねという同意である。橋本は新しく蒙古から帰ったので、しきりに支那宿に降参した話を始めた。その支那宿には、名は塞さいほく北ほくに馳はせ、味あじわいは江南を圧すなどという広告の文字がべたべた壁に貼はりつけてあるそうだ。橋本はこう云う文句をたくさん手帳に控えている。ほかに使い路のない文句なものだから、汽車の中で、それを残らず余に読んで聞かせてしまった。二人は笑いながら日本流の奇麗きれいな宿屋を想像して旅順のプラットフォームに降りた。降りるとそこに馬車がある。我々の名前を聞くものがある。

この馬車が民政署の馬車で、我々を尋ねてくれた人が、渡辺わたなべ

秘書ひしよであるという事を発見した時は兩人ともだいぶ恐縮した。

橋本を振り返ると相変らず鼻の先を反そらして、台湾パナマだか何だかペコペコになった帽子を被かぶっている。おい宿屋はどうするんだいと小さな声で聞くと、うんそうさなと云ったが、そのうち二人とも馬車へ乗らなければならぬ段になった。いったい橋本といつしよにあるくときは、何でも橋本が進んで始末をつけてくれる事に昔からきまつているんだからこの際もどうかするだろうと思つて放つておいた。すると予想通、日本流の宿屋へ行くつもりで来たんですがと渡辺さんに相談し始めた。ところが渡辺さんはどうも御泊りになられるような日本の宿屋は一軒もありませんから、やっぱり大和ホテルやまとになさつた方が好いでしようと思つて忠告して

いる。

やがて馬車は新市街の方へ向いて動き出した。二人は十五分の^{のち}後ホテルの二階に導かれて、行き通いのできる室^{へや}を二つ並べて取った。そこで革靴^{かばん}の中から刷毛^{はけ}を出して塵^{ちり}だらけの服を払ったあとで、しばらく休息のため安楽椅子に腰をおろして見ると、急に気がついたように四辺^{あたり}が森閑^{しんかん}としている。ホテルの中には一人も客がいらないように見える。ホテルの外にもいっさい人が住んでいないようには思われない。開^{ヴェランダ}廊へ出て往來を眺めると、往來はだいぶ広い。手摺^{てすり}の真下にある人道の石の中から草が生えて、茎の長さが一尺余りになったのが二三本見える。日中だけれども虫の音^ねが微^{かす}かに聞える。隣は主^{ぬし}のない家と見えて、締め切った門

やら戸やらに蔦が一面に絡んでゐる。往来を隔てて向うを見ると、ホテルよりは広い赤煉瓦の家が一棟ある。けれども煉瓦が積んであるだけで屋根も葺いてなければ窓硝子もついてない。足場に使つた材木さえ処々に残つてゐるくらいの半建てである。淋しい事には、工事を中止してから何年になるか知らないが、何年になつてもこのままの姿で、とうてい変る事はあるまいと云う感じが起る。そうしてその感じが家にも往来にも、美しい空にも、一面に充ちている。余は開廊の手摺を掌で抑えながら、奥にいる橋本に、淋しいなあと云つた。旅順の港は鏡のごとく暗緑に光つた。港を囲む山はことごとく坊主であつた。

まるで廢墟だと思ひながら、また室の中に這入ると、寢床に

は雪のような敷布シートがかかっている。床には柔かい絨毯じゅうたんが敷いてある。豊かな安楽椅子が据すえてある。器物はことごとく新式である。いつさいが整っている。外と内とは全く反対である。満鉄の経営にかかるこのホテルは、固もとより算盤そろばんを取つての儲け仕事でないと言ふ事を思い出すまでは、どうしても矛盾の念が頭を離れなかつた。

食堂に下りて、窓の外に簇むらがる草花の香を嗅かぎながら、橋本と二人静かに午餐ごさんの卓に着いたときは、機会があつたら、ここへ来て一夏気楽に暮したいと思つた。

旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山の上に、円柱のような高い塔が見えた。それがあまり高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈あおむに仰向あおむかなくては頂てっぺん点ままで見上げる訳に行かなかつた。

馬車はくぎょくさんが新市街を通り越してまたこの塔の真下に出た時に、これが白玉山はくぎょくさんで、あの上の高い塔が表忠塔だと説明してくれた。よく見ると高い灯台のような恰好かつこうである。二百何尺とかと云う話であつた。この山の麓ふもとを通り越して、旧市街を抜けると、また山路にかかる。その登り口を少し右へ這入はいった所に、戦利品陳列所がある。佐藤は第一番にそれを見せるつもりで兩人ふたりを引張つて

来た。

陳列所は固もとより山の上の一軒家で、その山には樹きと名のつくほどの青いものが一本も茂っていないのだから、はなはだ淋さびしい。当時の戦争に従事したと云う中尉のA君がただ独ひとり番をしている。この尉官は陳列所に幾十種となく並べてある戦利品について、一々叮ていねい嚀いに説明の労を取ってくれるのみならず、兩人を鷄冠山けいかんざんの上まで連れて行って、草も木もない高い所から、遥はるかの麓を指さしながら、自分の従軍当時の実歴譚じつれきだんをことごとく語って聞かせてくれた人である。始め佐藤から砲台案内を依頼したときには、今日はちと差さしつかえがあるから四時頃までならと云う条件であったが、山の出鼻へ立って洋剣サーベルを鞭むちの代りにして、あちらこちら

と方角を教える段になると、かんじん肝心の要事はまるでそつちのけにして、満洲の赤い日が、向うの山の頂いただきに、大きくなって近づくまで帰ろうとは云わなかった。もし忘れたんじや気の毒だと思つて、こつちから注意すると、何ようございます、構いませんと断りながら、ますます講釈をしてくれる。あんまり不思議だから、全体何の御用事が御有りなのですかと、せんさく詮索がましからぬ程度に聞いて見ると、実は妻さいが病気でと云う返事である。さすが横着な両人も、この際だけは、それじや御迷惑でもせつかくだからついでにもう少し案内を願おうと云う気にもなれなかった。言葉は無論出なかつた。長い日が山の途中で暮れて、電氣の力を借りなければ人の顔が判はつきり然分らない頃になつて、我々の馬車がようやく旧

市街まで戻った時、中尉はある煉瓦塀れんがべいの所で、それじゃ私はここで失礼しますと挨拶あいさつして、馬車から下りて、門の中へ急いで這入って行かれた。この煉瓦の塀を回めぐらした一ひとかまえ構は病院であった。そうして中尉の妻君はこの病院の一室に寝ていたのである。これほど世話になり、面倒を掛けた人の名前を忘れるのははなはだすまん事だが、どうしても思い出せない。佐藤に、よろしくと伝言を頼んだ時は、ただ、あの中尉君と書いた。ここに某中尉ういなどとよそよそしく取り扱ううのはあまり失礼だから、やむをえずA君としておいた。

A君の親切に説明してくれた戦利品の一々を叙述したら、この陳列所だけの記載でも、二十枚や三十枚の紙数では足るまいと思

うが、残念な事にたいてい忘れてしまった。しかしたった一つ覚えていたものがある。それは女の穿はいた靴の片足である。地じが繻し子ゆすで、色は薄うすねずみ鼠ねずみであつた。その他の手てなげだん投弾だんや、鉄条網てつじょうもうや、魚形水雷ぎょがたすいらいや、偽造の大砲は、ただ単なる言葉になつて、今は頭の底はつきりに判然残はつきりつていないが、この一足の靴だけは色と云い、形と云い、いつなん時ときでも意志の起り次第あざやか鮮あざやかに思い浮べる事ができる。

戦争後ある露西亞ロシアの士官がこの陳列所一覽のためわざわざ旅順まで来た事がある。その時彼はこの靴を一目み観みて非常に驚いたそうだ。そうしてA君に、これは自分の妻の穿はいていたものであると云つて聞かしたそうだ。この小さな白き華やしゃ奢しゃな靴の所有者は、戦争の際に死んでしまったのか、またはいまだに生存しているも

のか、その点はつい聞き洩もらした。

二十四

今までは白馬しろうまを着けた佐藤の馬車に澄まして乗っていたが、山へかかるや否や、例の泥だらけの掘出しものの中へ放り込まれてしまった。とうてい普通の馬車では上がれないと云うんだからやむをえない。それでも露西亞人ロシアじんだけあつて、眼にあまる山のこごとくに砲台を構えて、その砲台のことごとくに、馬車を駆かつて頂てっぺん辺まで登れるような広い路みちをつけたのは感心ですとA君が語られる。実際その当時は奇麗きれいな馬車を傷いためずに、心持よく砲台

のある地点まで乗りつけられたものと見える。ところが戦争がすんで往復の必要がなくなつたので、せつかくできた山路に手を入れる機会を失つたため、我々ごとき物数奇は、かように零落した馬車をさえ、時々復活させる始末になるのである。元来旅順ほど小山が四方に割拠して、禿頭を炎天に曝し合っている所はない。樹が乏しい土質へ、遠慮のない強雨がどつと突き通ると、傾斜の多い山路の側面が、すぐ往来へ崩れ出す。その崩れるものがけつして尋常の土じやない。堅い石である。しかも頑固に角張っている。ある所などは、五寸から一尺ほどもあろうと云う火打石のために、累々と往来を塞がれている。零落した馬車は容赦なく鳴動してその上を通るのだから、凸凹の多い川床を渡る

よりも危険である。 にひやくさんこうち 二百三高地へ行く途中などでは、とうとう

この火打石に降参して、馬車から下りてしまった。そうして痛い

腹を抱えながら、膏汗あぶらあせになつて歩いたくらいである。鶏冠けいかん

山ざんを下りるとき、馬の足搔あがきが何だか変になつたので、気をつけ

て見ると、左の前足の爪の中に大きな石がいつぱいに詰はまつていた。

よほど厚い石と見えて爪から余つた先が一寸いっすんほどもある。した

がつて馬は一寸がた跛ちんぱを引いて車体を前へ運んで行く訳になる。

席から首を延ばして、この様子を見た時は、安んじて車に乗つて

いるのが気の毒なくらい、馬に対して痛わしい心持がした。御ぎよし

者やに注意してやると、御者は支那語で何とか云いながら、鞭むちを

棄すてて下へ下りたが、非常に固く詰つまつていたと見えて、叩たたいても

引つ張つても石が取れないので、またのそのそ御者台へ上がった。そうして、後うしろにいる余の方をふりむいて、にやにや笑いながら、また鞭を鳴らし出した。馬も存外平気なもので、そのままとうとう大和ホテルまで帰つて来た。

橋本と余はこう云う馬車の中で、こう云う路の上に揺振ゆすぶられべく旧市街から出立した。あれがステツセル將軍の家だと云うのを遠くから見ると、なかなか立派にできている。戦争の烈はげしくならない時は、將軍がみごとな馬車を駆かつてそこいらを乗り廻しているのが遥はるかの先から見えたそうである。A君の指ゆびさして教えられた中うちで、ただ一つ質素な板いたがこい 囲こいの小さい家があった。それがまるで日本の内地で見る普通の木造なのだから珍めづらしかつた。何とか云

う有名な將軍の住宅だと説明されたが、不幸にしてその有名な將軍の名を忘れてしまった。何でも非常に人望のある人で、戦争のときも一番先に打^{うち}死^じをしたのだそうである。ああ云う質素の家に住んでおられたのも、一つは人望のあつた原因になつてゐるのでありましよう。とA君は丁寧に敬慕の意を表^ひされる。この將軍は戦争だけには熱心で、ほかの事にはよほど無頓着^{むとんじやく}であつた人らしい。この辺にある露国の將軍などの住宅は皆それ相應に立派なものばかりである。新市街の白^{しら}仁^に長^{ちやうかん}官^{かん}の家を訪ねた時、結構な御住居^{おすまい}だが、もとは誰のいた所ですかと聞いたたら、何でもある大佐の家だそうですと答えられた。こう云う家に住んで、こういう景色^{けしき}を眼の下に見れば、内地を離れる賠償^{ばいしょう}には充分なりま

すねと云つたら、白仁君も笑いながら、日本じやとても這入れませんと云われたくらいである。

そのうち馬車は無鉄砲に山路やまみちを上つて、旅順の市街を遥の下にうちやるようになった。A君は坂の途中で車を留めて、私は近路を歩いて、御先へ行つて御待ち申しますと云いながら、左手の急な岨路そばみちをずんずん登つて行つた。我々の車はまたのそのそ動き出した。

二十五

下を見下すと、山の側面はそれほど急でないが、樹きと名のつく

ような青いものはまるで眸ひとみを遮さらない。一眼ひととこに麓ふもとまで透すかさされるのみならず、麓ふもとからさき一里余はたけの畠まつすぐが真直まゆに眉まゆの下まゆに集あまつて来る。この辺あぎやかの空気は内地あぎやかよりも遙あぎやかに澄あんでいるから、遠こよりくもののが、つい鼻あぎやかの先あぎやかにあるように鮮あぎやかである。そのうちで高こより梁ようの色あぎやかが一番多く眼あぎやかを染あめた。

あの先に、小指あぎやかの頭あぎやかのような小さい白いものが見えるでしょう、あすこからこつちの方あぎやかへ向あぎやかいて対たい溝こうを掘あ出したのですとA君あぎやかが遠あくの方あぎやかを指あさしながら云あった。この辺あぎやかに穴あぎやかを掘あるのは石あぎやかを割あると一般あぎやかなのだから一町あぎやか掘あるのだから容易あぎやかな事あぎやかではない。現あに外そと濠ほから窖こう道どうへ通あずる路あぎやかをつけるときなどは、朝あから晩あまで一日あ働あいて四十五サンチ掘あつたのが一番あの手柄あであつたそうだ。

余は余の立っている高い山の鼻と、遠くの先にある白いものと
 を見較べて、その中間に横わる距離を胸算用で割り出して見て、
 軍人の根気の好いのにことごとく敬服した。全体どこまで掘って
 来たのですかと聞き返すと、ついそこですと洋剣を向けて教え
 てくれた。何でも九月二日から十月二十日とかまで掘っていたと
 云うのだから恐るべき忍耐である。その時敵も砲台の方から反
 対壕道と云うのを掘って来た。日本の兵卒が例のごとく工事
 をしているところかでかんかん石を割る音が聞えたので、敵も暗
 い中を一寸二寸と近寄って来た事が知れたのだと云う。爆発薬の
 御蔭で外濠を潰したのはこの時の事でありますと、中尉はその
 潰れた土山の上に立って我々を顧みた。我々も無論その上に立つ

ている。この下を掘ればいくらでも死骸しがいが出て来るのだと云う。

土山のひとすみ一隅が少し欠けて、下の方に暗い穴が半分見える。そ

の天てんじよう井が厚さ六尺もあろうと云うセメントででき上っている。

身を横にして、その穴に這い込みながら、だらだらと石の廻廊かいろう

に降りた時に、仰向あおもむいて見て始めてその堅固なのに気がついた。

外濠くずを崩した上に、この厚い壁を破壊しなければ、砲台をどうす

る事もできないのは攻手に取って非常な困難である。しかもこの

小さな裂け目から無理に割り込んで、一寸二寸とじりじりにセメ

ントで築上げた窖道せんにようを専領せんりようするに至っては、全く人間以上の

辛抱しんぼう比べに違ちがない。その時両軍の兵士は、この暗い中で、わず

かの仕切りを界さかいに、ただ一尺ほどの距離を取って戦いくさをした。仕切

は土囊どのおうを積んで作ったとかA君から聞いたように覚えている。上から頭を出せばすぐ撃うたれるから身体からだを隠して乱射したそうだ。それに疲れると鉄砲をやめて、両側で話をやった事もあると云った。酒があるならくれと強請ねだったり、死体の収容をやるから少し待てと頼んだり、あんまり下らんから、もう喧嘩けんかはやめにしようかと相談したり、いろいろの事を云い合つたと云う話である。

三人は暗い廻廊を這い出して、また土山の上に立つた。日は透すき徹とおるように明かるく坊主山ぼうずやまを照らしている。野菊に似た小さな花が処々に見える。じつと日を浴びて佇たんでいると、微かすかに虫の音ねがする。草の裏で鳴いているのか、崩れ掛つた窖こう内ないで鳴いているのか分らなかつた。向うの方かたに支那人の影が二人見えたが、

我々の姿を認めるや否や、草の中に隠れた。ああやって、何か掘りに来るんです。捕つらまると怖こわいものだから、すぐに逃げます、なかなか取り抑えるのが困難ですとA君が苦笑した。

後うしろがわ側へ回ると広い空堀からぼりの中に立派な二階建の兵舎がある。

もとは橋をかけて渡ったものと思われるが、今では下りる事もできない。兵舎の背はもとより、山に囲われて、外からは見えなくなっている。三人は空濠からぼりを横に通り越してなお高く上った。とうとう四方にあるものは山の頭ばかりになった。そうしてそれが一つ残らず昔の砲台であった。中尉はそれらの名前をことごとく諳そらんじていた。余は遮さえぎるもののない高い空の真下に立って、数限りもない山の背を見渡しながら、砲台巡ほうだいめぐりも容易な事ではない

と思つた。

二十六

大連に着いてから二三日すると、まんしゅうにちにち満洲日々の伊藤君から滞たりいりゆうちゆう

留中 には是非一度講演をやつて貰いたいという依頼であつた。

ええ都合ができればと受合つたようなまた断つたような軽いあいさ挨拶あはをして旅順に來た。するとその伊藤君が我々より一日前に同

じ大和ホテルやまとに泊つていたので、ただ、やあ來ているねぐらいでは事がすまなくなつた。伊藤君の話によると、余の承諾を得て講演を開くと云う事を、もう自分の新聞に広告してしまつたと云う

んだから、たちまち弱った。どうしてもやらなければならぬように伊藤君は頼むし、何だかやれそうもない気分ではあるし、かたがた安楽椅子に尻しりを埋うずめて、苦にがく渋り出した。すると橋本がにやにや笑いながら、まあやってやるさと傍はたから余計な事を云う。実を云うと、講演は馬車でホテルに着くや否や、ここの和木君わきくんからも頼たのまれている。もつともこの方は暇ぼうがないので、頼たのまれ放ばなしの体ていであるが、大連に帰ればそう多忙らしく見せる訳には行かない。橋本はそこをよく見破ていつていたので、君そう云うときには快よく承諾するものだよとか君のような人はやる義務があるさとかいろいろな口を出す。余の大連でしゃべらせられたのは全くこの男おかげの御蔭である。しかも短い時日のうちに二遍もやらせられた。

その内の一遍では、云う事が無くって仕方がなかったから、私は
今晚、なぜ講演というものが、そう容易にできるものでないか、
すなわち講演ができない訳を講演致しますと云つて、妙な事を弁
じてしまった。それを是公ぜいこうが聞きに来ていて、うん貴様はなかな
か旨いうま、これからどこへ出て演説しようと思つた、おれが許して
やると評したからありがたい。けれども勧告の本人たる橋本は、
平気な顔をして、どこか遊んで歩いていて聞きに来なかつた。そ
のくせ営口でまた頼まれると早速、君やるさ、せつかく頼むんだ
ものと例の通りやり出したので、やむをえず痛い腹の上にかけて
いた蒲団ふとんを跳ね退はけて、演説をしに行つた。その代りおれが先へ
やるよと断つて、橋本のは聞かずに、すぐ宿屋へ歸つて来て、ま

た腹の上に蒲団を掛けていた。橋本はこう云うところを見ると、君演説をやつてる間は苦しいかなどと気楽な質問をする。もつとも招待を断つたり何かするときには、いや實際この男は胃病でといつても証人に立つてくれた。して見ると、橋本はただ演説に対してだけ冷刻れいこくなのかも知れない。奉天でも危うく高い所へ乗せられるところを、一日日取ひどりが狂つたため、いかな橋本にも、君頼まれたときにはやってやるべきだよを繰返す余地がなかった。京城では兂着が前後した上に、宿屋さえ違つたものだから、泰然と講演を謝絶する余裕があつた。これは偏ひとえに橋本のいなかつた御蔭である。

面白い事に、この演説の勧誘家はその後札ごさつぱろ幌へ帰るや否や、

自身と烈はげしい胃病に罹かかつて、急に苦しみ出した。それで普通ならば毎週十時間余も講義を持たせられるところを、わずか一時間に減らして貰つて、その一時間が済むとすぐに薬を吞むそうだ。旅行中は君の病気である事を知りながら、無理に講演を勧めて大いに悪かつた。何事も自分で経験しないうちは分らぬもので、こうして胃病に悩まされて始めて気がついたが、痛いときに演説などができる訳のものでは、けつしてない。君があの際ふる奮つて演壇に立ったのは実際感心である、と大いに褒ほめたり詫あやまつたりして来た。実際橋本の云う通りである。しかしはたして橋本の推察するほど胃が痛かつたら、いかな余も、いくらせつかくだから君出るのが好いよを繰返されたつて、ついに講演を断つてしまつたらう。

二十七

白仁しらにさんから正餐せいさんの御馳走ごちそうになつたときは、民政部内の諸君がだいぶ見えた。みんな揃そろつてカーキ色の制服を着ていた。食事が済んで別室へ戻つて話していると佐藤が、あしたは朝のうちにひやくさんこうち二百三高地の方を見たら好かろう、案内を出すからと云つてくれる。余も好かろうと答えた。すると、大した案内にも及ぶまいと笑いながら相談を掛けた。我々は一私人で、ただ遊覧に来たのだから、公の職務おおよけを帯びている人を使つてはすまないが、せつかく案内をつけてくれると云うなら、小使でも何でも構わない。非ひ番ばんか閑散の人を一人世話してくれと頼んだ。これは正直恐れ入つ

た本当の謙遜けんそんである。その時佐藤は懷中から自分の名刺を出して、端の方に鉛筆で何か書いて、じゃ明日あしたの朝八時にこの人が来るから、来たらいつしよに行くが好いと云つて分れた。

明日の朝の八時は例いつもの通り強い日が空にも山にも港にも一面に輝いていた。馬車を棄すてて山にかかったときなどは、その強い日の光が毛孔けあなから総身そうしんに浸しみこ込むように空気が澄ちようてつ徹てつしていた。相変らず樹きのない山で、山の上には日があるばかりだから、眼の向く所は、左右ともに、また前後ともに、どこまでも朗らかである。その明かな足元から、ぼつと音がして、何物だか飛び出した。案内の市川君うずらが鶉うずらですと云つたので始めてそうかと気がついたくらい早く、鶉は眼を掠かすめて、空濶くうかつの中に消うえてしまった。その

迹あとを見上げると、遥はるかなる大きい鏡である。

その時我々はもう頂いただき近くにいた。ここいらへも砲丸たまが飛んで来たんでしようなど聞くと、ここでやられたものは、多く味方の砲丸自身のためです。それも砲丸自身のためと云うより、砲丸が山へ当つて、石の砕けたのを跳ね返かえしたためです。こう云う傾斜のはなはだしい所ですから、いざと云う時に、すぐ遠くから駆かけ寄せて敵を追おい退のける訳に行きませんので、みんなこう云うところへ平たくなって嚙かじりついでるのであります。そうして味方の砲丸が眼の前へ落ちて、一度に砂すなけむり煙あが揚あがるとその虚きよに乗じて一間か二間きすずつ這はい上がるのですから、勢い砂煙まじに交まる石のために身体中きす創きずだらけになるのです。と市川君は詳しい説明を与えら

れた。

味方の砲弾たまでやられなければ、勝負のつかないような烈はげしい戦いくさは苛つら過ぎると思おもいながら、天てっぺん辺まで上のぼった。そこには道どうひよう標ひょうに似た御影みかげの角かくちゆう柱ちゆうが立たっていた。その右を少しだらだらと降りたところが新あらたに土を掘返したごとく白しら茶ちやけて見える。不思議な事にはところどころが黒くろずんで色いろが變かつてゐる。これが石油を檻ぼろ樓ろうに浸しみ込こまして、火かを着くけて、下したから放ほうり抛なげたところだと、市川君はわざわざ崩くずれた土饅頭どまんじゆうの上まで降ふりて來た。その時はるか遙下はるかの方を見渡して、山やまやら、谷やら、畠はたけやら、一々実地の地形について、当時の日本軍がどう云う徑路けいろをとつて、ここへじりじり攻め寄せたかをついでながら物語られた。不幸にして、二百

三高地の上までは来たようなものの、どっちが東でどっちが西か、方角がまるで分らない。ただ広々として、山の頭がいくつとなく起伏している一角に、藍色あいいろの海が二カ処ひらほど平たく見えるだけである。余はただ朗かな空の下に立って、市川君の指さす方かたを眺ながめていた。

自分でここへ攻め寄せて来た経験をもっている市川君の話は、はなはだ詳しいものであつた。市川君の云うところによると、六月から十二月まで屋根の下に寝た事は一度もなかつたそうである。あるときは水の溜たまった溝みぞの中に腰から下を濡ぬらして何時間でも唇の色を変えて竦すくんでいた。食事は鉄砲を打たない時を見計みはつて、いつでも構わず口中に運んだ。その食事さえ雨が降って車の輪が

泥の中に埋^{うま}つて、馬の力ではどうしても運^{うんぱん}搬^{ぱん}ができなかつた事もある。今あんな真^ま似^ねをすれば一週間経^たたないうちに大病人になるにきまつていますが、医者^{いしや}に聞いて見ると、戦争のときは身^{からだ}体の組^{そしよく}織^{よく}がしばらくの間に変^かつて、全く犬や猫と同様になるんだそうですと笑^{わら}っていた。市川君は今旅順の巡査部長を勤^とめている。

二十八

旅順の港は袋の口を括^{くく}つたように狭^{せま}くなつて外洋に続^ついている。袋の中はいつ見ても油を注^さしたと思^{おも}われるほど平^{ひら}らかである。始めてこの色^{いろ}を遠^{とほ}くから眺^{なが}めたときは嬉^{うれ}しかった。しかし水^{みづ}の光^{ひかり}が

強く照り返して、湾内がただ一枚に堅く見えたので、あの上を舟で漕ぎ廻つて見たいと云う気は少しも起らなかつた。魚を捕る料とり
ようけん
筒よは無論無かつた。露西亞ロシアの軍艦がどこで沈没したろうかな
どと思ひ浮かべる暇も出なかつた。ただ頭へびかぴかと、平たい
とすま
研ぎ澄すましたものが映つた。

余は大和やまとホテルの二階からこの晴やかな色を眺めた。ホテル
の玄関を出たり這入はいつたりするときにもこの鋭い光の断片に眼を
何度となく射られた。それでも単に烈はげしい奇麗きれいな色と光だなと感
ずるだけであつた。佐藤から港内を見せてやるからと案内される
までは、とうてい港内は人間の這入るところではないくらいに、
頭の底で、無意識ながら分別していたらしい。

さあ行くんだと催促された時は、なるほど旅順に来る以上、催促されなければならんはずの場処へ行くんだと思つた。今日の同勢は朝大連から来た田中君を入れて五人である。港務部を這入るときに水兵がこの五人に礼をした。兵隊に礼をされたのは生れてこれが初はじめであつた。佐藤が真先に中へ這入つて、やがて出て来たから、もう舟に乗れるのかと思つたら、おい這入れ這入れという。我々は石垣の上に立つていた。足元にはすぐ小蒸こじょうき氣が繫つないである。我々の足は、家の方より、むしろ水の方に向いていた。

十分の後のち五人はまた河野中佐こうのちゆうさといつしよに家を出てすぐ小蒸氣に移つた。海軍の将校が下士や水兵を使うのは実に簡潔めいりよ明瞭である。船は河野中佐の云いなり次第の速力で、思う通りの

方角へ出た。港の入口ではここかしこの潜水器へ船の上から空気を送っている。船の数は十艘そとう近くあつた。みんな波に揺られて上あがつたり下さがつたりしている。我々五人のも固もとより平たいではない。鏡のように見えた湾の入口がこうまで動いているとは思いがけなかつた。波で身体の調子が浮いたり沈んだりする上に、強い日が頭から射いりつけるので、少し胸が悪くなつた。河野さんは軍人だから、そんな事に氣のつくはずがない。ああ云う唧筒ポンプで空気を送るのは旧式でね、時々潜水夫を殺してしまいますよと講釈をしている。田中君はふうんとさも感心したらしく聞いている。

河野さんの話によると、日露戦争の当時、この附近に沈んだ船は何艘なんそうあるか分らない。日本人が好んで自分で沈めに來た船だ

けでもよほどの数になる。戦争後何年かの今日こんにちいまだに引揚げ切れないところを見てもおおよその見当はつく。器械水雷なぞになるとこの近海に三千も装置したのだそうだ。

じゃ今でも危険ですと聞くと、危険ですともと答えられたのであるほどそんなものかと思った。沈んだ船を引揚げる方法も聞いて見たが、これは委くわしく覚えていて、百キロぐらいな爆発薬で船体を部分部分に切り壊して、それを六吋インチの針金で結ゆわえて、そうして六百噸トのブイアンシーのある船を、水で重くした上、干かんちよ潮うしほに乗じて作事さくじをしておいて、それから満潮の勢いと唧筒の力で引き揚げるのだそうだ。しかし我々が眺めていた時は、いつまですたっても、何も揚つて来そうになかった。

港の入口は左右から続いた山を掘り割つたように岸が聳そびえていて、その上に砲台がある。あすこから探海灯たんかいとうで照らされると、一番困る。まるで方角も何も分らなくなつてしまふと河野さんが高い処を指さした。

やがて小蒸気は煙りを逆に吐いて港内に引返した。戦闘艦が並んで撃沈されたという前を横に曲つてまた元の石垣もとの下へ着いた。向う岸には戦利品のブイや錨いかりがたくさん並んでいる。あれで約三十万円の価格ですと河野さんが云つた。門の出口には防材ぼうざいの標本が一本寝かしてあつた。その先から尖とがつた剣けんのようなものが出ていた。

風呂を注文しておいたら、用意ができたと見えて、向うの部屋で、湯の迸ほとばしる音が盛さかんにする。靴を脱いで、スリッパアをつっかけて、戸を開けに掛ると、まだ廊下に出ないうちに給仕がやつて来た。田中さんがいっしょにスキ焼を食べにいらつしやいませんかと云う案内である。スキ焼の名はこの際兩人に取つて珍らしい響がした。けれども白状すると、毫ごうも食う気にはならなかつた。スキ焼つて家うちで拵こしらえるのかいと尋ねると、いえ近所の料理屋ですと云う。近所の料理屋はスキ焼よりも一層不思議な言葉である。ホテルの窓から往来を一日眺めていたつて、通行人は滅めった多に眼に

触れないところである。外へ出て広い路を岡の上まで見通すと、左右の家は数えるほどしか並んでいない。そうしてそれがことごとく西洋館である。しかも三分の一は半建のまま雨露に曝されていゝる。他の三分の一は空家である。残る三分の一には無論人が住んでいる。けれどもその主人はたいてい月給を取つて衣食するものとしか受け取れない構である。新市街という名はあるにしても、その実は閑静な寂れた屋敷町に過ぎない。その屋敷のどこにスキ焼を食わす家があるかと思うと、一種小説に近い心持が起る。

ただ、昼の疲れを忘れるため、胃の不安を逃れるため、早く湯に入つて、レースの蚊帳の中で、穩かに寝たかつた。そこで給仕

に、今湯に這入りかけているからね、少し時間が取れるかも知れないから、田中さんに、どうか御先へとおおせきと云つてくれと頼んだ。すると傍そばにいる橋本が例のごとく、そりやいかんよと云い出した。せつかく誘つてくれるものを、そんな挨あいさつ拶をする法はないぜと、また長い説教が始まりそうで恐ろしくなつたので、仕方がないからうんよしよし、それじゃあね、今湯に這入はいつていますから、すぐ行きますつてそう云つてくれ、よく云うんだよ、分つたかねと念を押してすぐ風呂に飛込んだ。

そうして、少しも弱つた顔を見せずにみんなと連れ立つて、ホテルを出た。空はよく晴れて、星が遠くに見える晩であつたが、月がないので往來は暗かつた。危あぶのうございますから御案内を致

しまししようと云つて、ホテルの小僧がついて来た。草の生えた四角な空地あきちを横切つて、瓦斯ガスも電気もない所を、茫漠ぼうぼくと二丁ほど来ると、門の奥から急に強い光が射した。玄関に女が二三人出てゐる。我々の来るのを待つていたような挨拶をした。座敷は畳が敷いて胡坐あぐらがかけるようになっていた。窓を見ると、壁の厚さが一尺ほどあつたので、始めて普通の日本家屋でないと云う事が解つた。窓の高さは畳から一尺に足りないから、足をかけると厚い壁の上に乗る事ができる。女が危のうございまずと云つた。外を覗のぞいたら真闇まつくらに静かであつた。

女は三四人で、いづれも東京の言葉を使わなかつた。田中君はわざと名古屋訛なごやなまりを真似まねて調戲からかつていた。女は御上手だ事とか、御

上手やなとか、何とか云つて賞ほめていた。ところが前まえ触ふれのスキ焼はなかなか出て来ない。酒を飲まないで、肴さかなを突つついて手て持も無沙汰ちぶさたであつた。スキ焼があらわれても、胃の加減で旨うまくも何ともなかつた。天下に何が旨うまいいつてスキ焼ほど旨うまいものは無いと思おもうがねと田中君が云つた。田中君はスキ焼の主唱者だけあつて、大変食べた。傍はたで見みていて羨うらやましいほど食べた。余はしようがないから畳の上に仰向あおむきに寝ねていた。すると女の一人が枕まくらを御貸ご貸し申ましましうかと云いながら、自分の膝ひざを余の頭の傍そばへ持もつて来た。この枕では御氣に入りますまいとか何とか弁わじている。結構だから、もう少しこつちの方へ出してくれと頼たのんで、その女の膝の上うへに頭を乗せて寝ねていた。不思議な事に、橋本も活動の余地がない

ものと見えて、余と同様の真似まねをして、向うの方に長くなっている。枕元では田中君が女を相手に碁石ごいしでキシヤゴ弾はじきをやって大騒さわぎをしている。余があまり静しずかだものだから、膝を貸した女は眠ったのだと思つて、顚あごの下をくすぐった。

帰るときには、神かみさんらしいものが、しきりに泊つて行けと勧めた。門を出るとまた急に暗くなった。森閑しんかんとして人の気合けわいのない往来をホテルまで、影のように歩いて来て、今までの派出はでなスキ焼を眼がん前ぜんに浮かべると、やはり小説じみた心持がした。

朝食に鶉うずらを食わすから来いという案内である。朝飯あさめしの御馳走ごちそうには、ケムブリジに行ったときたしか浜口君に呼ばれた事がある。と云う記憶がぼんやり残っているだけだから、大変珍らしかった。もつとも午前十一時に立つ客に晩餐ばんさんを振舞う方法は、世界にないんだから仕方がない。鶉に至っては生れてからあんまり食った事がない。昔正岡子規まさおかしきに、手紙をもつてわざわざ大宮公園おおみやこうえんに呼び寄せられたとき、鶉だよと云つて喰わせられたのが初めてぐらいなものである。その鶉の朝飯あさめしを拵こしらえるからと云つて、特に招待するんだから、佐藤は物数奇ものずきに違いない。そうして、好いかほかに何にもない、鶉ばかりだよと念を押しした。いったい鶉を何羽喰わせるつもりか知らんと思つて、どこから貰つたのかと聞くと、

いや鶉は旅順の名物だ、もう出る時分だからちようど好かろうと
すでに鶉を捕つたような事を云つていた。

白仁さんのところへ 暇いとまごい 乞こい に行つたので少し後おくれて着くと、

スキ焼を推挙した田中君がもう来ていた。田中君も鶉の御相伴おしよばん
と見える。佐藤は食卓の準備を見るために、出たり這入はいつたりす

る。立派な仙せん台だい平ひらの袴はかまを着けてはいるが、腰こし板いたの所が妙に口

を開あいて、まるで蛤はまぐりを割つたようである。そうして、それを後うしろ

下さがりに引ひき摺ずつてゐる。それでもつて、さあ食おうと云つて、

次の間の食堂へ案内した。西洋流の食卓の上に、会かい席せき膳ぜんを四つ

並べて、いよいよ鶉の朝飯となつた。

まず御お椀わんの蓋ふたを取ると、鶉がいる。いわゆる鶉の御椀だから不

思議もなく食べてしまった。皿の上にもいるが、これはたしか醬
 油で焼かれたようだ。これも旨くうま食べた。第三は何でも芋いもか何か
 といっしよに煮られたように記憶している。しかし遺憾いかんながら、
 はつきり判然とその味を覚えていない。これらを漸次ぜんじに平たいげると、佐藤
 はまだあるよと云つて、次の皿を取り寄せた。それも無論鶉には
 相違なかつた。けれどもただ西洋流の油あぶらあげ揚あげにしてあるばかり
 で、ややともすると前の附つけ焼やきと紛まぎれやすかつた。しかもこの紛
 れやすい油揚はだいぶ仕込んで有つたと見えて、まだ喰い切らな
 い先に御代りが出て来た。

かくのごとく鶉が豊富であつたため、つい食べ過ぎた。余の胃
 の中に這入つた骨だけの分量でもずいぶんある。大連へ歸つて胃

の痛みが増したとき、あまり鶉の骨を喰ったせいじゃなかろうかと橋本に相談したら、橋本は全くそうだろうと答えた。食事が終つてから応接間へ帰つて来ると、佐藤が突然、時に君は何かやるそうじゃないかと聞いた。是公ぜこうに東京で逢あつたとき、是公はにやにや笑いながら、いったい貴様は新聞社員だつて、何か書いてるのかと聞いた。こう云う質問になると、是公も友熊も同程度のものである。

何かやるなら一つ書いて行くが好いと云つて、妙な短冊を出した。それを傍そばへ置いて話をしていると、一つ書こうじゃないかと催促する。今考えているところだと弁解すると、ああそうかと云つて、また話をする。しまいに墨を磨つて、とうとう手てを分わかつふる古

みやこうずね
 き都や鶉鳴くと書いた。佐藤の事だから何を書いたって解るまい
 と思つたが、佐藤は短冊を取上げて、何だ年としを分つ古き都やと読
 んでいた。

うずらはら かか
 鶉の腹を抱えたなり、ホテルへ歸つて 勘 かんじょう 定 じょう を済まして、停
テーション 車場へ駆つけると、プラットフォームに大きな網籠あみかごがあつた。

その中に鶉の生きたのがいっぱい這入はいつて雛鳥ひよっこを詰めたように
 むくむく動いている。発車の時間に少し間があつたので、田中君
 は籠そばの傍へ行つて所有主と談判を始めた。余が近寄つたときは、
 一羽が三錢だとか四錢だとか云つていた。ところへ駅員が来て、
よろ 宜しゅうございます、この汽車へ積込んで御届け申しますと受合
 った。三人はどうとう鶉と別れて汽車へ乗つた。

三十一

いよいよ腹が痛んだ。ゼムを嘔かんだり、宝丹ほうたんを呑んだり、通じ薬をやったり、内地から持って来た散薬を用いたりする。毎日飯を食のんって呑のんきに出歩いているようなものの、内心ではこりやたまらないと思うくくらいであつた。大連の病院を見に行つたとき、くるまぎ苦し紛まぎれに、案内をしてくれた院長の河西君かさいくんに向つて、僕も一つ診察を願うおうかなと云つたら、河西君はとんだお客様だというような顔もせず、明日あしたの十時頃いらつしやいと親切に引き受けてくれた。ところが明日の十時頃になると、診察の事はまるで忘れ

てしまつて、相変らず烏打帽子を被^{かぶ}つて、強い日の下を焦^こげながら、駆^かけ廻^まつた。

橋本が、全体どこまで行くつもりなんだいと聞くから、そうさまあ哈爾賓^{ハルピン}ぐらいまで行かなくつちや義理が悪いようだなと答えたが、その橋本はどうする料^{りょうけん}簡^{かん}かちつとも分らない。考えて見ると、内地ではもう九月の学期が始^{はじ}まつて、教授連がそろそろ講義に取りかかる頃である。君はこれからどうするんだと反問して見た。さあ僕も哈爾賓ぐらいまで行つて見たいのだが、何しろ六月から学校を空^あけているんだからねと決心しかねている。かように義務心の強い男を^{そその}唆^そかして見当違の方角へ連れて行つたのは、全く余の力である。その代り哈爾賓を見て奉天へ帰るや否や、橋

本は札幌さつぽろから電報をかけられた。いよいよ催促を受けたと電報を見ながら苦笑しているの、いいや、急ぎ帰りつつありとかけしておくさと、他の事ひとだからはなはだ洒落しゃらくな助言じよごんをした。

橋本がいよいよいっしょに北へ行くと云う事になつてから、余はすべてのプログラムを橋本に委任してぶらぶらしていた。橋本は汽車の時間表を見たり、宿泊地の里程を計算したり二三日の間はしきりに手帳へ鉛筆で何か付け込んでいた。ときどき、おいどうも旨うまく行かんよ、ここを火曜の急行で出るとするとなどと相談を掛けるから、いいさ火曜がいけなければ水曜の急行にしようと、まるで無学な事を云つているので、橋本も呆あきれていた。よく聞いて見て始めて了解したが、実は哈爾賓ハルビンへ接続する急行は、一週に

たった二回しかないのだそうである。普通の客車かくしゃでも、京浜間のようにむやみには出ない。一日にわずか二度か三度らしい。だから君のように呑気のんきな事を云つたつて駄目だめだよと橋本から叱られた。なるほど駄目である。しかも余の駄目は汽車にとどまらない。地理道程みちのりに至つても悉皆しつがい真闇まつくらであつた。さすが遼陽りょうようだの奉天だのと云う名前は覚えていたが、それがどの辺にあつて、どつちが近いのだからいっさい知らなかつた。その上、これから先どことどこへ泊つて、どことどこを通り抜けるのかに至るまで、全く無頓着むとんじゃくであつたのだから橋本も呆れるはずである。しかし、おい鉄嶺てつれいへは降りるのかと聞いて、いや降りないと答えられれば、はあ、そうかと云つたなりで済ましていた。別に降りて見た

い気にもならなかつたからである。したがって橋本は実に順良な道みちづれ伴を得た訳で、同時に余は結構な御供を雇つた事になる。

いよいよプログラムがきまつたので、是公に出立の事を持ち出すと、奉天へ行つて、それから北京ペキンへ出て、上海シャンハイへ来て、上海から満鉄の船で大連まで帰つて、それからまた奉天へ行つて、今度は安奉線あんほうせんを通つて、朝鮮へ抜いたら好いだろつとすこぶる大袈裟おおげさな助言じよごんを与える。その上、銭ぜにが無ければやるよと註釈を付けた。銭が無くなれば無論貰う氣でいた。しかし余つても困るから、むやみには手を出さなかつた。

余は銭問題を離れて、単に時間の点から、この大袈裟な旅行の計画を、実行しなかつた。そのくせ奉天を去つていよいよ朝鮮に

移るとき、紙入の内容の充実していかないのに気がついて、少々是公に無心をした。もとより返す気があつての無心でないから、今もって使い放しである。

立つ時には、是公はもとより、新たに近づきになつた満鉄の社員諸氏に至るまで、ことごとくステーション停車場まで送られた。貴様が生れてから、まだ乗つた事のない汽車に乗せてやると云つて、是公は橋本と余を小さい部屋へ案内してくれた。汽車が動き出してから、橋本が時間表を眺めながら、おいこの部屋は上等切符を買つた上に、ほかに二十五弗ドル払わなければ這はい入れない所だよと云つた。なるほど表ひょうにちゃんとそう書いてある。専有の便所、洗面所、化粧室が附属した立派な室へやであつた。余は痛い腹を忘れてその中に

横になった。

三十二

トロと云うものに始めて乗って見た。停車場へ降りた時は、柵さくの外に五六軒長屋のような低い家が見えるばかりなので、何だか汽車から置き去りにされたような気持であつたが、これからトロで十五分かかるんだと聞いて、やつと納な得とくした。

トロは昔軍人の拵こしらえたのを、手入もせず、そのまま利用しているらしい。軌道レールの間から草が生えている。軌道レールの外にも草が生えている。先まで見渡すと、鉄色の筋が二本栄はえない草の中を真ま

つすぐ、つら
 直に貫ぬいている。しかし細い筋が草に隠れて、行方知れず
 になるまで眺め尽しても、建物らしいものは一軒も見当らなかつ
 た。そうして軌道の両側はことごとく高梁こうりょうであつた。その大
 きな穂先は、眼の届く限り代赭たいしやで染めたように日の光を吸つて
 いる。橋本と余と荷物とは、この広漠こうばくな畠はたけの中を、ト口に揺ら
 れながら、眩まぶしそうに動いた。ト口は頑丈がんじょうな細長い涼み台に、
 鉄の車を着けたものと思えば差支さしつかえない。軌道の上を転ころがす所
 を、よそから見ていると、はなはだ滑なめらかで軽快に走るが、実地
 に乗れば、胃に響けるほど揺れる。押すものは無論支那人である。
 勢いよく二三十間突いておいて、ひよいと腰をかける。汗臭あせくさい
 浅黄色あさぎいろの股引ももひきが背広せびろの裾すそに触るので気味が悪い事がある。す

ると、速力の鈍った頃を見計^{みはか}らつて、また素足^{すあし}のまま飛び下りて、肩と手をいっしょにして、うんうん押す。押さなければいいと思うぐらい、車が早く廻るので、乗つてる人の臓器^{ぞうき}は少からず振盪^{しんと}する。余はこのト口に運搬されたため、悪い胃を著るしく悪くした。車の上では始終^{しじゆう}ゼムを含んで早く目的地へ着けば好いと思つていた。勢いよく駆け^かられれば、駆けられるほどなお辛^{つら}かった。それでも台からぶら下げた足を折らなかつたのが、まだ仕合せである。実際酒に酔つて腰をかけたまま脛^{すね}を折つぺしよつた人があるそうだ。見ると橋本の帽子の鍔^{つば}が風に吹かれてひらひらと靡^{なび}いている。余は鳥打の前^{まえ} 廂^{まげ}を深く下げてなるべく日に背^{せな}を向けるようにしていた。

苦しい十五分か廿分の後車のちはようやく留まつた。軌道の左側だけが、畠はたを切り開いて平らにしてある。眼を蔽おほう高粱の色を、百坪余り刈り取つて、黒い砂地にした迹あとへ、左右に長い平屋を建てた。壁の色もまだ新しかった。玄関を這入つて座敷へ通ると、窓の前は二間ほどしかない。その縁ふちに朝顔のような草が繁しげつているが、絡からまる竹も杖つえもないので、蔓つると云わず、葉と云わず、花を包んで雑然むらと簇むらがるばかりである。朝顔の下はすぐ崖がけで、崖の向うは広い河原かわらになる。水は崖の真下を少し流れるだけであつた。

橋本と余は、申し合せたように立つて窓から外を眺めていた。首を出すと、崖下にも家が一軒ある。しかし屋根やねがわら瓦わらしか見えな
い。支那流の古い建物で、廻廊のような段々を藉かりて、余のいる

部分に続いていられるらしく思われる。あれは何だいと聞いて見た。料理場と子供を置く所になつていますと答えた。子供とは酌婦しやくふ芸妓げいしやの類を指すものだろうと推察した。眼の下に橋が渡してある。厚くはあるが幅一尺足らずの板を八つ橋に継ついだものに過ぎない。水はただ砂を洗うほどに流れている。足の甲を濡ぬらしさえすれば徒歩かちわた渉るのは容易である。橋本の後あとに食付くつついて手拭てぬぐいをぶら下げて、この橋を渡つた時、板の真中で立ち留まつて、下を覗のぞき込んで見たら、砂が動くばかりで水の色はまるでなかつた。十里ほど上かみさかに遡さかのぼると鮎あゆが漁とれるそうだ。余は汽車の中で鮎あゆのフライを食つて満洲には珍さかならしい肴だと思つた。おそらくこの上流からクーリーが売りに来たものだろう。

三十三

足駄げたを踏むとぎぐりと這入るはい。踵くびすを上げるとばらばらと散る。
 渚なぎさよりも恐ろしい砂地である。冷たくさえなければ、跣足はだしになつ
 て歩いた方が心持が好い。俎まなを引摺ひきずつていては一足ひとあしごとに後あとし
 ざるようはがゆで齒痒はがゆくなる。それを一町ほど行つて板いたがこい 囲いの小屋の
 中を覗のぞき込むと、温泉ゆがあつた。大きい四角な桶おけを縁ふちまで地の中
 に埋いけ込んだと同じような槽ふねである。温泉はいつぱい溜たまつていた
 が、澄み切つて底まで見える。いつの間に附着したもののやら底も
 縁こけも青い苔こけで色取られている。橋本と余は容赦なく湯の穴へ飛び

込んだ。そうして遠くから見ると、砂の中へ生理いきうめにされた人間の
 ように、頭だけ地平線の上に出していた。支那人の中には、実
 際生理になつて湯治とうじをやるものがある。この河原かわらの幅は、向うに
 見える高梁こうりようの畠はたけまで行きつめた事がないからどのくらい分
 らないが、とにかく眼が平たいらになるほど広いものである。その平たいら
 などこを、どう掘つても、湯が湧わいて来るのだから、裸体はだかになつ
 て、手で砂を搔かき分けて、凹くぼんだ処ところへ横になれば、一文も使わな
 いで事は済む。その上寝ながら腹の上へ砂を掛ければ、温泉の搔か
 卷いまきができる訳である。ただ砂の中を潜もぐつて出る湯がいかにも熱
 い。じくじく湧わいたものを、大きな湯槽ゆぶねに溜めて見ると、色だけ
 は非常に奇麗きれいだが、それに騙だまされてうっかり飛び込もうものなら

苛ひどい目に逢あう。橋本と余は、勢いきよく浴衣ゆかたを抛なげて、競争け的に毛け脛すねを突つ込んで、急いに顔を見合あわせながら縮ちぢんだ事がある。大の男がわざわざ裸はだかになつて、その裸の始末はじまつをつけかねるのはきまりが好いものぢやないから、両人ふたりは顔を見合あわせて苦笑しながら小屋を飛び出して、四半丁しはんちようほど先の共同風呂まで行つて、平氣な風にどぼりと浸つかつた。

風呂から出て砂の中に立ちながら、河の上流を見渡すと、河がぐるりと緩ゆるく折れ曲つている。その向う側に五六本の大きな柳が見える。奥には村があるらしい。牛と馬が五六頭水を渉わたつて来た。距離が遠いので小さく動いているが、色だけは判はつきり然ぜん分る。皆茶褐色をして柳の下に近づいて行く。牛追は牛よりもなお小さかつ

た。すべてが世間で云う南画なんがと称するものに髣髴ほうふつとして面白かつた。中にも高い柳が細い葉をことごとく枝に収めて、静まり返っているところは、全く支那めいていた。遠くから望んでも日本の柳とは趣おもむきが違うように思われた。水は柳の茂るところで見えなくなっているが、なおその先を辿たどって行くと、たちまち眼にぶつかるような大きな山脈がある。巒ひだが鋭く刻まれているせいか、ある部分は雪が積つたほど白く映る。そのくらいに周囲はどす黒かつた。漢語には崔嵬さいかいとか さんがん とか云つて、こう云う山を形容する言葉がたくさんあるが、日本には一つも見当らない。あれは何と云う山だろうと傍そばにいる大重君おおしげくんに尋ねたら、大重君も知らなかつた。大重君は支那語の通訳として橋本つに随ついて蒙古もうこまで行

つた男である。余の質問を受けるや否やどこかへ消えて無くなつたが、やがて帰つて来て、高麗城子こまじょうしと云うんだそうですと教えてくれた。土人を捕つらまえて聞いて来たのだそうである。固もとより支那しな音おんで教わつたのだが、それは忘れてしまった。

濡ぬれ手てぬい拭ぬぐを下げ、砂の中をぼくぼく橋の傍そばまで帰つて来ると、崖がけの上から若い女が跣足はだしで降りて来た。橋は一尺に足らぬ幅だからどつちかで待ち合せなければなるまいと思つたが、向うはまだ土堤どてを下おりきらないので、こつちは躊躇ちゆうちよせず橋板はしいたに足をかけた。下駄げたを二三度鳴らして、一間ほど来たとき、女も余と同じ平面に立つた。そこで留まると思ひのほか、ひらひらと板の上を舞うように進んで余に近づいた。余と女とは板と板の継目つぎめの

所で行き合つた。危あぶないよと注意すると、女は笑いながら軽い御お辞儀じぎをして、余の肩を擦こすつて行き過ぎた。

三十四

明日あしたは梨なし畑ばたけを見に行くんだと橋本から申し渡されたので、宜よろしいと受合つた上、床とこについたようなものの実を云うと例のト口で揺られるのが内心苦くになつた。そのせいでもなからうが、容易に寝つかれない。橋本はもう鼾いびきをかいている。しかも豪ごう宕とうな鼾である。緞子どんすの夜具やぐの中から出るべき声じゃない。まして裾すその方には金屏風きんぴょうぶが立て回してある。

明日になると、空が曇つて小雨が落ちてこさめいる。窓から首を出して、一面に濡れた河原の色を眺めながら、おれは梨畑をやめて休養しようかしらと云い出した。橋本は合羽かっぱももっているし、オヴアーシユーも用意して来ているのでなかなか景気が好い。ことに農科の教授だけあつて、梨を見たがったり、栗を見たがったり、豚や牛を見たがる事人一倍である。早速用意をして大重君を伴つれて出て行つた。余はただつくねんとして、窓の中に映る山と水と河原と高梁こうりょうとを眼の底に陳列ちんれいさしていた。薄く流れる河の厚さは昨日きのうと同じようにほとんど二三寸しかないが、その真中に鉄てつの樋と竹しだけが、砂うもに埋れながら首を出しているのに気がついたので、あれは何だいと下女あとに聞いて見た。あれはボアリングをやつた迹

ですと下女が答えた。満洲の下女だけあつて、述語じゆつごを知つてい
る。ついこの間雨が降つて、上かみの方から砂を押し流して来るまで
は、河の流れがまるで違つた見当を通つていたので、あすこへ湯
場ばを新築するつもりであつたのだと云う。河の流れが一ひと雨あめごと
に変わるようでは、滅多めったなところへ風呂を建てる訳にも行くまい。
現に窓の前の崖がけなども水にだいぶん喰くわれている。

そのうち雨が歇やんだ。退屈だから横になつた。約十分も立つた
と思う頃、下女がまたやつて来て、ただいま駅から電話がかかり
まして、これから梨畑へおいでになるなら、駅からト口を仕立て
ますがと云う問い合せである。雨が歇やんだので、座敷に寝ている
口実くわいはもう消滅してしまつたが、この上ト口を仕立てられては敵かな

わないと思つて、わざわざ晴かかった空を見上げて、八の字を寄せた。

今から行つて間に合うのかなと尋ねると、器械ト口だから汽車と同じぐらい早いんだと云う話である。胃は固もとより切せつないほど不安であるが、汽車と同じ速度の器械ト口なるものにも、心得のためちよつと乗つて見たいような気がしたので、つい手軽したくに仕度を始めた。すると隣の部屋に泊つていた御客さんが三四人、十一時の汽車で大連へ行くとか云つて、同じように仕度を始めた。それを送る下女も仕度を始めた。したがつて同勢はだいぶんになつた。その中に昨日きのう橋の途中で行き合つた女がいた。それが余と尻しり合あわせに同じ車に乗る事になつた。互に尻を向けているので、別段口

も利きかなかつた。顔もよくは見なかつた。が、その言葉だけはたしかに聞いた。しかも支那語である。固もとより意味は通じない。しかし盛んにクーリーをきめつけていた。その達弁なのはまた驚くばかりである。昨日微笑しながら御辞儀おじぎをして、余の傍わきを摺すり抜けた女とはどうしても思えなかつた。この女は我々の立つ前の晩に、始めて御給仕に出て来た。洋灯ランプの影で御白粉おしろいをつけている事は分つたが、依然として口は利かなかつた。

苦しい十五分のちの後車はまた停車場ステーションに着いた。御客はすぐ汽車に乗つて大連の方へ去つた。下女はみんな温泉宿へ歸つた。余は独ひとり構内を徘徊はいかいした。いわゆる器械ト口なるものは姿さえ見せない。そこへ駅員が来て、今松山まつやまを出たそうですからと断つた。

その松山は遥向うにある。余は軌道の上に立って、一直線の平たい路を視力のつづく限り眺めた。しかしトロの来る気色はまるでなかった。

三十五

宿屋の者ともつかず、駅の者ともつかない洋服を着た男がいて来た。この男の案内で村へ這入ると、路は全く砂である。深さは五六寸もあるうと思われた。土で造った門の外に女が立っていたが、我々の影を見るや否や逃げ込んだ。手に持った長い煙管が眼についた。犬が門の奥でしきりに吠える。そのうちに村は尽き

て松山にかかった。と云うと大層だが、実は飛鳥山あすかやまの大きいのに、桜を抜いて松を植替えたようなものだから、心持の好い平ひらに庭わを歩るくと同じである。松も三四十年の若い木ばかり芝の上
 に並んでいる。春はるさき先弁当あそびでも持つて遊あそびに来るには至極結構だが、
 ところが満洲だけになお珍らしい。余は痛い腹おそを抑おさえて、とうとう天てっぺん辺まで登った。するとそこに小さな廟びやうがあつた。正面に向
 つて、聯れんなどを読んでいると、すぐ傍そばで梭おさの音がする。廟びやう守もり
 でもおりそうなので、白壁を切り抜いた入口を潜くぐつて中へ這入つた。暗い土間を通り越して、奥を覗のぞいて見たら、窓の傍そばに機はたを据す
 えて、白い疎髯そぜんを生やした爺じいさんが、せつせと梭なを抛なげていた。
 織あつていたものは粗あらい白布しろぬのである。案内の男が一一言三言支那ふたことみこと

語で何か云うと、老人は手を休めて、暢のんき気な大きい声で返事をす
 る。七十だそうですと案内が通訳してくれた。たつた一人でここ
 にいて、飯はどうするのだろうと、ついでに通訳を煩わづらわして見た。
 下の家から運んでくるものを食っているそうであった。その下の
 家と云うのがすなわち梨なし畠ばたけの主人のところだと案内は説明し
 た。

やがて、山を降りて梨畠へ行こうとしたが、正門から這はい入るの
 が面倒なので、どうです土堤どてを乗り越そうじやありませんかと案
 内が云い出した。余はすぐ賛成して蒲鉾かまぼこ形の土堀どべいを向側むこうがわへ
 馳はせ下おりた。胃は実に痛かった。樹きの下を潜くぐって二十間も来ると、
 向うの方に橋本始め連中が床しょうぎ几ぎに腰をかけて梨を食っている。

腕に金筋きんすじを入れた馭長までいっしよである。余も同勢ましに交つて一つ二つ食つた。これは胃の中に何か入れると、一時痛みが止むからである。そうしてまた畠の中をぐるぐる歩き出した。ここの梨はまるで林檎りんごのように赤い色をしている。大きさは日本の梨の半分もない。しかし小さいだけあつて、鈴なりに枝を撓しなわして、累累るるいとぶら下つているところがいかにもみごとに見える。主人がその中で一番うち旨い奴を——何と云つたか名は思い出せないが、下男に云いつけて、筴ざるに一杯取り出さして、みんなに御馳走ごちそうした。主人は背の高い大きな男で、支那人らしく落ちつきはらつて立っている。案内の話では二千万とか二億万とかの財産家だそうだが、それは嘘うそだろう。脂やにの強い亜米利加煙草アメリカタバコを吹かしていた。

梨にも喰くい飽あきた頃、橋本が通訳の大重君に、いろいろ御世話になつてありがたいから、御礼のため梨を三十銭ほど買つて帰りたいと云うような事を話してくれと頼んでゐる。それを大重君がすこぶる嚴肅な顔で支那語に訳していると、主人は途中で笑い出した。三十銭ぐらいなら上げるから持つて御帰りなさいと云うんだそうである。橋本はじや貰つて行こうとも云わず、また三十銭を三十円に改めようともしなかつた。宿へ帰つたら、下女がある御客さんといつしよに梨畠へ行つて、梨を七円ほど御土産おみやげに買つて帰つた話をして聞かせた。その時橋本は、うんそうか、おれはまた三十銭がた買つて来ようと思つたら、三十銭ぐらいなら進しんじ上ようすると云つたよと澄ましていた。

三十六

壁と云うと鑊こての力で塗り固めたような心持がするが、この壁は普通の泥どろが天日てんぴで干上ひあがつたものである。ただ大地と直ちよつかく角かくにでき上つている所だけが泥でなくつて壁に似ている。その上部には西洋の御城ぎやうぎのように、形儀ぎようぎよく四角な孔あなをいくつも開けて、一ぱし櫓やぐらの体裁ていさいを示している。しかし一番人の注意を惹ひくのは、この孔から見える赤い旗である。旗の数は孔の数だけあつて、孔の数は一つや二つではないから、ちよつと賑にぎやかに思われる。始めてこの景色けしきが眼に触れた時には、村のお祭りまつりで、若いものが、面

白半分に作り物でも拵こしらえたのじやなかうかと推測した。ところがこの櫓は馬賊の来襲に備えるために、梨なし畑ばたけの主人が、わざわざ家の四隅よすみに打ち建てたのだと聞いて、半分は驚いたが、半分はおかしかった。ただなぜあんな赤い旗を孔の間から一つずつ出しているかが、さっぱり分らなかつた。裏側へ廻つて、段々のぼを上つて見て、始めてこの赤旗の一つが一挺の鉄砲を代表している事を知つた。鉄砲は博物館にでもありそうな古風な大きいもので、どれもこれも錆さびを吹いていた。弾丸たまを込めても恐らく筒つつから先へ出る気遣きづかいはあるまいと思われるほど、安全に立てかけられていた。もつとも赤い旗だけは丁寧ていねいに括くくりつけてある。そうしてちようど壁かべ孔あなから外に見えるくらいな所にぶら下げてある。番兵

は汚きたない顔を揃そろえて、後うしろの小屋の中にごろごろしていた。馬賊の来襲に備えるために雇われたればこそ番兵だが、その実は、日当三四十銭の苦力クーリーである。櫓やぐらを下りて門を出る前に、家の内部を觀みる訳に行くまいかと通訳をもつて頼んだら、主人はかぶりを振つて聞かなかつた。女のいる所は見せる訳に行かないと云うんだ。そうである。その代り客間へ案内してやろうと番頭を一人つけてくれた。その客間というのは往來を隔てて向う側にある一軒建の家であつた。外には大きな柳が、静な葉を細長く空に曳ひいていた。長屋門ながやもんを這入はいると鼠ねずみいろ色の驃馬らばが木の株つなに繫つないである。余はこの驃馬を見るや否や、三國志さんごくしを思い出した。何だか玄徳げんとくの乗つた馬に似ている。全体驃馬さんごくしというのを滿洲へ来て始めて見た

が、腹が太くつて、背が低くつて、総体が丸く逞しくつて、万事ばんじ邪氣のないような好い動物である。橋本に騾馬の講義を聞くと、まず騾とけつていの区別から始めるので、真しんそつ率な頭脳をただいたずらに混乱させるばかりだから、黙つて鞍くらのない裸姿を眺めていた。騾馬は首を伏せてしきりに短い草を食つていた。

門の突き当りがいわゆる客間であるが、観かんの音扉んびらきを左右に開けて這入るところなどは御寺に似ている。中は汚きたないものであつた。客でも招待するときには、臨時に掃除をするのかと聞いたたら、そうだと答えていた。主人に挨拶あいさつをしてまた松山を抜けたら、松の間に牛が放してあつた。駅長が行く行く初はつだけ茸を取つた。どこから目め付け出すか不思議なくらい目付け出した。橋本も余も面

白半分少し探して見たが、全く駄目であつた。山を下るとき、おい満洲を汽車で通ると、はなはだ不毛ふもうの地のようであるが、こうして高い所に登つて見ると、沃野よくや千里という感があるねと、橋本に話しかけたが、橋本にはそんな感がなかつたと見えて、別に要領の好い返事をしなかつた。余の沃野千里は全く色から割り出した感じであつた。松山の上から見渡すと、高い日に映る、茶色や黄色が、縞しまになつたり、段になつたり、模様になつたり、霞かすみで薄くされて、雲に接つづくまで、一面に平野を蔽おほうている。満洲は大きな所であつた。

宿へ帰つたら、御神おかみさんが駅長の贈つて来た初茸を汁つゆにして、晩に御膳おぜんの上へ乗せてくれた。それを食つて、梨畑や、馬賊や、

土の櫓や、赤い旗の話しなぞをして寝た。

三十七

立つ用意をしているところへ御神さんが帳面を持って出て来た。これへ何か書いて行つて下さいと云う。御神さんは余を二つ接つぎ合あわせたように肥えている。それで病気だそうだ。始めはどこのものだか分らなかつたが、御神さんと知つて、調子の下女と違つているのに驚いた。御神さんはその体格の示すごとき好い女であつた。どうしてあんなすれつからしの下女を使いこなすかが疑問になつたくらいである。帳面を前へ置いて、どうぞと手を膝ひざの上

重ねた。その膝の厚さは八寸ぐらいある。

帳面を開けると、第一頁ページに林学博士のH君が「本邦ほんぽうの山水さんすい

に似たり」と揮ふるつてしまつたあとである。その次にはどこどこれ聯れん隊たい長ちやう何のなにがしと書いてある。宿帳だか、書画帖しよがちやうだか判

然しないものの、第三頁に記念を遺のこす事に差さし逼せまつて来た。橋本

は帳面を見るや否や、向むこを向いて澄むましている。余は仕方がない

から、書くには書くが、少し待つてくれと頼たのんだ。すると御神おかみさ

んが、そうおつしやらずに、どうぞどうぞと二遍も繰返して御辞

儀ぎをする。無論嘘うそを吐つく気は始めからないのだが、こう拝ひむよう

にされて書いてやるほどの名筆でもあるまいと思つと、困こん却きゃく

と慚ざん愧きでほとほと持て余してしまう。時に橋本が例のごとく口を

利きいてくれた。この人は嘘を云う男じゃないから、大丈夫ですよ
今に何か書きますよと笑っている。余はまた世間話をしながら、
その間に発句ほっくでも考え出さなければならなくなった。

同情してくれる人はだいたいあると思うから白状するが、旅をし
て悪筆を懇望こんもうされるほど厄介やっかいな事はない。それも句作に熱心
で壁柱かべはしらへでも書き散らしかねぬ時代ならとにかく、書く材料
の払底ふっていになつた今頃、何か記念のためにと、短冊たんじやくでも出さ
れた日には、節季せつきに無心を申し込まれるよりも苛つらい。大連を立つ
とき、手荷物を悉しっかい皆革靴かばんの中へ詰め込んでしまつて、さあ大丈
夫だと立ち上つた時、ふと気がついて見ると、化粧台の鏡の下に、
細長い紙包があつた。不思議に思つて、折目を返して中を改める

と、短冊である。いつ誰が持つて来て載せたものか分らないが、その意味はたいてい推察ができる。俳句を書かせようと思つて来たところが、あいにく留守るすなので、また出直して頼む気になつて、わざと短冊だけ置いて行つたに違ない。余はこの時化粧台から紙包を取りおろして、革鞆の中へ押し込んで、ホテルを出た。この短冊はいまだに誰のものか分らない。数は五六枚で雲くも形がたの洒落しやれたものであつたが、朝鮮へ来て、句を懇望されるたびに、それへ書いてやつてしまつたから今では一枚も残つていない。長春の宿屋でも御神さんに捕つかまつた。この御神さんは浜のものだとか云つて、意気な言葉使いをしていたが、新しい折手おりてほん本を二冊出して、これへどうぞ同おんなじものを二つ書いて下さいと云つた。同おなじでな

ければいけないのかと尋ねると、ええと答える。その理由は、夫婦別れをしたときに、夫婦が一冊ずつ持っている事ができるためだそうだ。

こう書いて行くと、朝鮮の宴会で統ぬめを持出された事まで云わなくてはならないから、好い加減に切り上げて、話を元へ戻して、肥ふとった御神さんの始末をつけるが、余は切ない思いをして、汽車の時間に間に合うように一句浮かんだ。浮かぶや否や、帳面の第三頁へ熊岳城ゆうがくじょうにてと前書まえがきをして、黍遠きびこほし河原かわらの風呂ふろへ渡わたる人ひとと認ひとめて、ほっと一息吐いた。そうして御神さんの御礼も何も受ける暇のないほど急いでトロに乗った。電話の柱に柳の幹を使ったのが、いつの間にか根を張って、針金の傍そばから青い葉を出し

ているのに気がついて、あれでも匂にすればよかつたと思つた。

三十八

窓から覗のぞいて見ると、いつの間にか高こうり梁りょうが無くなつてい
 先刻さつきまでは遠くの方に黄色い屋根が処々眺められたが、それもつ
 いに消えてしまつた。この黄色い屋根は奇麗きれいであつた。あれは玉と
 蜀黍うもろこしが干してあるんだよと、橋本が説明してくれたので、よう
 やくそうかと想像し得たくらい、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。
 朝鮮では同じく屋根の上に唐辛子とうがらしを干していた。松の間から見
 える孤ひとつ家やが、秋の空の下で、燃え立つように赤かつた。しかし

それが唐辛子とうがらしであると云う事だけは一目ですぐ分つた。満洲の屋根は距離が遠いせいか、ただ茫漠ぼうぼくたる単調を破るための色彩としか思われなかつた。ところがその屋根も高粱もことごとく影を隠してしまつて、あるものはただの地面だけになつた。その地面には赤黒い茨いばらのような草が限りなく生えている。始めは蓼たでの種類かと思つて、橋本に聞いて見たら橋本はすぐ冠かむりを横に振つた。蓼たでじゃない海草かいそうだよと云う。なるほど平原の尽きる辺りあたを、眼を細くして、見究みきわめると、暗くなつた奥の方に、一筋鈍く光るものがあるように思われる。海辺うみべかなと橋本に聞いて見た。その時日はもう暮れかかつていた。際限もなく蔓はびこつている赤い草のあなたは薄い靄もやに包まれて、幾らか蒼あおくなりかけた頃である。あから

さまに目に映るすぐ傍そばをよくよく見つめると、乾いた土ではない。踏めば靴の底が濡ぬれそうに水気みずけを含んでいる。橋本は鹹しお気があるから穀物の種がおろせないのだと云った。豚も出ないようだねと余は橋本に聞き返した。汽車に乗って始めて満洲の豚を見たときは、実際一種の怪物に出逢であったような心持がした。あの黒い妙な動物は何だと真ま面目めに質問したくらい、異いな感じに襲襲われた。それ以来満洲の豚と怪物とは離せないようになつた。この薄暗い、苔こけのように短い草ばかりの、不毛の沢地たくちのどこかに、あの怪物はきつと点てん綴てつされるに違ちがないと云う気がなかなか抜けなかつた。けれども一匹の怪物に出逢う前に、日は全く暮れてしまった。目に余る赤黒い草の影はしだいに一ひと色いろの夜よに変化した。ただ北の

方の空に、夕日の名残なごりのような明るい所が残ったのである。そうしてその明るい雲の下が目立って黒く見える。あたかも高い城壁の影が空を遮さえぎって長く続いているようである。余は高いこの影を眺めて、いつの間にか万里の長城に似た古迹こせきの傍そばでも通るんだらうぐらいの空想たくましを逞たくましうしていた。すると誰だかこの城壁の上を駆けて行くものがある。はてなと思つてしばらくするうちに、また誰か駆けて行く。不思議だと覺さとつて瞬またたきもせず城壁の上を見つめていると、また誰か駆けて行く。どう考えても人が通るに違ちがいな。無論夜の事だから、どんな顔のどんな身装みなりの人かは判然しないが、比較的明かな空を背景にして、黒い影法師が規則正しく壁の上を馳かけ抜ける事は確たしかである。余は橋本の意見を問う暇もない

ほど面白くなつて、一生懸命に、眼前を往来するこの黒い人間を眺めていた。同時に汽車は、刻々と城壁に向つて近寄つて来た。それが一定の距離まで来ると、俄然^{がぜん}として失笑した。今までたしかに人間だと思ひ込んでいたものは、急に電信柱の頭に変化した。城壁らしく横長に続いていたのは大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追い越した。高い所で動くものがようやく眼底を払つた。

三十九

狭い小路^{こうじ}の左右は煉瓦^{れんが}の塀^{へい}で、ちよつと見ると屋敷町のように

人通りが少い。それを二十間ほど来て左手の門を這入った。ただ偶然に這入ったのだから、家の名も主人の名も知るはずがない。今から考えると、小路のうちには同じような家が何軒となく並んでいて、同じような門がまたいくつでも開いているのだから、とくにここだけを覗くべきのぞ 誘インデューメント 致あ は少しもなかったのである。余はただ案内者の後にあと 跟ついて何の気なしに這入った。その案内者もまた好い加減に這入った。案内者は青林館せいりんかんと云う宿の主人である。かつて二葉亭ふたばていといっしよに北の方を旅行して、露西亞人ロシアじんにひど 苛あい目に逢あつたと話した。

門を這入ると、右も室へや、突き当りも室である。左りも隣の壁に隔てられなければ室であるべきはずなのだから、中の一筋だけが

頭の上に空を仰ぐ訳になる。そこに立つて右手の部屋を覗くと、狭い路次ろじから浅草の仲店なかみせを看みるような趣おもむきがある。実際仲店よりも低く小さい部屋であつた。その一番目には幕が垂れていて、中は判はつきり然と分らなかつたが、次を覗いて見る段になつて驚いた。二畳敷ぐらいの土間の後うしろの方を、上り框あががまちのように、腰をかけるだけの高さに仕切つて、そこに若い女が三人いた。三人共腰をかけるでもなく、寝転ぶでもなく、互もたに靠れ合つて身体からだを支えるごとくに、後の壁をいっぱいにした。三人の着物が隙間すきまなく重なつて、柔かい絹をしなやかにお押しつけるので、少し誇張して形容すると、三人が一枚の上衣を引き廻しているように見える。その間から小さな繻子しゆすの靴が出ていた。

三人の身体が並んでいる通り、三人の顔も並んでいた。その左
右が比較的尋常なのに引きかえて、真中のは不思議に美しかった。
色が白いので、眉まゆがいかにも判然はつぜんしていた。眼まなこも朗ほがらかであった。
頬ほから顎あごを包む弧線こせんは春のように軟やわらかかった。余が驚きながら、見
惚とれているので、女は眼まなこを反そらして、空くうを見た。余が立っている
間、三人は少しも口を利きかなかつた。

青林館の主人は自分ほどこの女に興味きょうみがなかつたと見えて、好い
加減いかげんに歩を移して、突き当りの部屋に這入はいりつた。そこも狭い土
間で、中央には普通の卓テーブル上すが据すえてあつた。それを囲んで三人
の男が食事しょくじをしている。皿さら小鉢こぼちから箸茶碗はしちやわんに至いたるまで汚きたない
事はなほだしい。卓テーブルに着きている男に至いたつてはなほおさら汚きたなかつ

た。まるで大連の埠頭ふとうで見る苦力クーリーと同様である。余はこの体てい裁いを一見するや否や、台所で下男が飯めしを掻かき込んでるんじゃないかろうかと考えた。ところがつい隣の室でしきりに音楽をやつてゐる。今見た美人のいる所とはつい三間とは離れていない。実に矛盾な感じである。

余は二歩ばかり洋テーブル卓とおのを遠退むこういて、次の室の入口を覗いて見た。そうしてまた驚いた。向の壁むこうに倚添よりそえて一脚の机を置いて、その右に一人の男が腰をかけている。その左に女が三人立っている。その前には十二三の少女が男の方を向いて立たつている。少し離れて室へやの入口には盲目めくらが床しょうぎ几こきゆうに腰をかけている。調子の高い胡弓こきゆうと歌の声はこの一団から出るのである。歌の意味も節も分らない

余の耳にはこの音楽が一種異様に^{すさま}凄じい響を伝えた。机の右にいる男が、右の手に^{ぜい}筮竹^{ちく}のような物を持って、時々机の上を^{たた}敲くと同時に左の^{てのひら}掌^{やつはし}に八橋と云う菓子に似た竹の片^{きれ}を二つ入れて、それをかちかちと打合せながら、歌の調子を取る。趣向はスペインの女の用いるカスタネットに似ているが、その男の顔を見ると、アルハンブラの昔を思い出すどころではない。蒼^{あおぐろ}黒く土氣^{つちけ}づいた色を、一心不乱に少女の頭の上に乗^のしかけるように翳^{かざ}して、腸^{はらわた}を絞^{しぼ}るほど恐ろしい声を出す。少女はまた^{またた}瞬きもせず、この男の方を見つめて、細い咽喉^{のど}を合している。それが怖^{こわ}い魔物に魅^み入られて身動きのできない様子としか受取れない。盲目は彼の眼の暗いごとく、暗い顔をして、悲しい陰気な、しかも高い調子の胡弓

を擦り続けに擦っている。左の方に立っている女の一人が余を見た。それが忌むべき藪やぶにらみ睨にらみであった。日の目の乏しくつて暮やすい室のうちで、この怪しい団体はこの怪しい音楽を奏して夢中である。余は案内の袖そでを引いてすぐ外へ出た。

四十

橋本は遠い所へ豚を見に行つた。何でも市街まちから一里余もあるとか云う話である。こんな痛い腹を抱かかえて今更豚でもあるまいと思つて止めた。その代りにそこいらをぶらつくべく主人あるじといつしよに馬車で出た。主人がまあ遼河りょうがを御覧なさいと云う。馬車を

乗り棄すてて河岸かしへ出ると眼まなこいっぱいに見えた。色は出水でみずの後あとの大川おほいに似ている。灰のように動くものが、空を呑のむ勢いきおいで遠くから流れて来る。哈爾濱ハルビンに行く途中で、木戸さんに聞いた話だが、満洲の黄土はその昔中央亜細亞アジアの方から風の力で吹き寄せたもので、それを年々河の流れが御町ごていねいに海へ押出しているのだそうである。地質学者の計算によると、五万年の後のちには今の渤海湾ぼっかいわんが全く埋うまつてしまう都合になつていきますと木戸君が語られた。河辺かわべに立つて岸と岸との間を眺めてみると、水の量が泥の量より少くらい濁つたものが際限なく押し寄せて来る。五万年は愚おろか、一二カ月で河口はすっかり塞ふさいがつてしまひそうである。それでも三千噸トぐらいな汽船は苦くもなくのそのそ上のぼつて来ると云うんだから支

那の河は無神経である。人間に至つては固^{もと}より無神経で、古来からこの泥水を飲んで、悠然^{ゆうぜん}と子を生んで今^{こんにち}日まで榮えている。

サンパンと云う船がここかしこに浮かんで形^{なり}に合しては大き過ぎるぐらいな帆^ほを上げている。帆の裏には細い竹を何本となく横に渡してあるから、帆に角^{かど}が立つのみか、捲^まき上げる時にはがら鳴る。日本では見られない絵である。その間を横切つて向^{むこう}岸^{ぎし}へ着いた。向岸には何にもない。ただ停車場^{ステーション}が一つある。

北京^{ペキン}への急行が出るとか云うので、客がたくさん列車に乗り込んでいる。下等室を覗^{のぞ}いたら、腰かけも何もない平土間^{ひらとま}に、みんなごろごろ寝ころんでいた。帰りにはサンパンに乗つて、泥^{ながれ}の流を押し渡つた。風が出ると難儀だそうである。春の初めには山のよ

うな氷が流れてくる。先が見えないので、氷と氷の間に挟はさまれると命を取られる。ある時氷に路を塞ふさがれて仕方がないから、船を棄すてて氷の上へ上あつて、乗り捨てた船を引き摺ずつて向う側へ出て、ようやくまた船に乗ったと云う話がある。これは主人あるじの実歴談じつれきだんである。

サンパンは妙なところへ着いた。岸は芦あしを畳あしんでできている。石垣いしがきではなくて、芦垣あしがきである。こうしなければ水の力で浚さらわれる恐れがあると云う。芦はいくらでも水を吸い込んで平気でいるから無難だと見える。細い小路こうじを突き抜けると、支那町の真中へ出た。妙な臭におがする。先刻さつきから胸が痛むのでポケットから、粉こな薬りを出して飲もうとするが、あいにく水がない。一滴の飲料も用

はずに散薬を呑み下す方法は、その後苦し紛れに発見した分別
 だが、この時はまだそれほど老練な患者でないので、拝むように
 主人を煩わした。主人はええ訳はありませんと云いつつも、ずい
 ぶん烈しく引張り廻した上、ほとんど苦しくつて道傍に竦みそ
 うになつた頃、ようやく一軒の店へ這入った。盆栽などの据え
 てある中庭を通り抜けて角の一部屋へ案内されたが、水はなかな
 か出る様子がない。そのうち、こちらへと云つてまた二階へ招ぜ
 られた。虫のように段々を上つて廊下から室へ這入ると、日本人
 が二三人事務を執っている。さあどうぞと椅子を与えられたので、
 挨拶をして始めて解つたが、水を貰いに飛び込んだところは日
 清豆粕会社で、さあどうぞと迎えてくれたのは、社員の倉田

君である。倉田君は固もとより日本から漫遊まんゆうもしくは視察の目的をもつてわざわざ營えいこう口までやつて来たものと余を信じている。服薬のために通りがかりのついでながら、日清豆粕会社の奥二階へ水を貰いに立ち寄つたと判じようはずがない。そこで水は容易に出ない。湯も出ない。今御茶を上げると云つて、ボーがしきりに支度したくをしている。余は青林館の主人が恨うらめしくなつた。けれども倉田君に対しては相応に体裁ていさいを具えた応対をしなければならぬ。豆が汽車で大連へ出るようになってから、河を下つてくる豆の量が減つたでしようかてような事を、真面目まじめくさつて質問して

いた。

四十一

橋本が博士はかせになつたり、ならなかつたりした話がある。大連の
大和ホテルやまとにいる時分、満鉄から封書が届いた。その表に橋本農
学博士殿と町ていねい寧いに書いてあつたのを乙おつに眺めながら、これだか
ら厭いやになつちまうと云つて余の方を向いて苦笑したから、先生は
学者ぶつて、むやみに博士よば呼わりをされるのを苦にする意味なん
だろうと鑑定して、取り合つてやらなかつた。実際こんな事が苦
になるくらいなら、始めから博士にならなければ好いと思つたか
らである。その時はそれですんだ。

余は橋本をもつて固もとより農学博士と信じていた。是公せこうもそう信

じていた。現にある人に向つて橋本つて農学博士さと説明しているのを聞いた。余に至つては、いつかの新聞で、本人の博士になつた事をたしかに承知した記憶がある。それで大連を立つて北に行く時も、栄誉ある博士の同伴者だと云う自覚がちゃんとあつた。ところが毎日毎晩一つ鍋なべのものを突つついで進行しているうちに、何かの拍ひょうし子しだつたが、いやおれは博士じゃないよと急に橋本が云い出した。その時はいくら本人が証明したつてなるほどと云う気になれないくらい驚いた。第一、十年近くも大学の教授をしている男を、博士にしない法はないと考へてる上、どうしても新聞でその授与式を拝見したとしか思われないんだから、余もできるだけは抗弁したが、やっぱり博士じゃないと頑固がんこを張つて云う事

を聞かない。余もやむをえず、そうかと云つて我がを折つた。この時から橋本は氣の毒ながらとうとう、ただの人間になつてしまつた。

けれども、世間には迂濶うかつものが多いと見えて、どこへ行つても橋本博士、橋本博士と云う。新聞を折々読むときつと橋本博士と出ている。しまいにはおいたまた博士だよと注意するのが面倒になつた。橋本も澄すまし返かえつてゐる。もつとも澄まし返さなくなつたつて、一々博士じゃありませんと訂正して歩く訳に行くものじゃない。こう云う余にも覚おぼえがある。釜山ふざんから馬関ばかんへ渡る船中で、拓殖たくしよく会社の峰みね八郎はちろう君の妻君に逢あつたとき、八郎君は真面目まじめな顔をして、これは夏目博士と引き合した。すると妻君が御名前はかね

て伺つておりますと、叮嚀ていねいに御辞儀おじぎをされるから、余もやむをえず、はあと云つたなり博士らしく挨拶あいさつをした。だから橋本が博士に慣れ切つて満洲を朝鮮へ渡るに何も不思議はない。余もいったんは彼の博士を撤回したようなものの、日を重ねるに従つてまた何だか博士らしい気持がし出した。それで道中つつがなく安あんほ奉線うせんを通つて、安東県あんとうけんまでやつて来た。ところがここで橋本の博士がちよつと気に食わなくなつた。安東県の宿屋の番頭がどう云う不料簡ふりょうけんか、橋本博士御手荷物のうちと云う札を余の革靴かばんにぴたぴた結いつけてしまった。腹が立つたが面倒だからそのままにしておくと次の宿屋で橋本と分れる事になつて、向うの手荷物ステーションを停車場へ運び出す際に、余の奇麗きれいな革靴かばんを橋本のものだと

思い込んで、宿屋の小僧がずんずん停車場まで持つて行ってしまった。余は冗談じゃないぜと云った。橋本は面白がつて笑つていた。それだから、また博士にならない。

四十二

ここだと云うので、降りたには降りたが、夜の事だから方角も見当もまるで分らない。頼りに思う停車場は縁日の夜店ほどに小さいものであつた。その軒を離れるとなおさら淋しい。空には星があるが、高い所に己おのれと光るのみで、足元の景気にはならなかつた。汽車路を通つて行くと、鉄軌レールの色が前後五六尺ばかり、提ちよう

灯ちんの灯ひに照らされて、露つゆのごとく映つてはまた消えて行く。そのほかに何も見えなかった。やがて右へ切れて堤つとみのようなものをだらだらと下りる心持がしたが、それも六七歩を超こえると、靴くつを置く土の感じが不ふ断だんに戻かへつたので、また平地ひらちへ出たなど気がついた。すると虫の音ねが聞えだした。足元で少しばかり鳴いてるような家庭的なものではない。虫の音ねだと云う分ぶん別べつが出た時には、その声こゑがもう左右前後に遠く続ついていた。我々われらは一つの提ち灯ちんを先まにして、平原へいげんにはびこる無む尽じん蔵ざうの虫の音こゑに包つつまれながら歩あいた。

今いま考かんえると、なかなか風流ふうりゅうである。筆ふでを執とつて書いていても、魏ぎ叔しゅく子しの大だい鉄てつ椎すいの伝でんにある曠こう野やの景けい色しよくが眼まなこの前まへに浮うんでくる。

けれども歩いていて途中は実に苦しかった。飯の菜さいに奴豆腐やつことうふを
 一丁食かたまりつたところが、その豆腐が腹へ這入はいるや否や急に石灰いしばいの
 塊かたまりに変化して、胃の中を塞ふさいでいるような心持である。腮あごの奥か
 ら締めつけられて、やむをえない性質たちの唾液つばきが流れ出す。それに
 誘いざなわれるままにしておく、嘔はきたくなる。せめて口中おりあいの折合あ
 でもと思つて、少し抵抗たいかしにかかる、足が竦すくんで動けなくなる。
 余は幾度いくたびか虫の音の中に苦しい尻しつを落ちつけようかと思つた。
 ただ橋本はしもとに心配させるのが、気の毒である。支那しなの荷持にもちに野糞のぐそを
 垂たれてると誤解ごかいされたつて手柄てがらにもならない。そこで無理むりに歩い
 た。

遙向はるかうに灯ひが一つ見える。余が歩いている路は平らである。灯

はその真正面に当る。あすこへ行くんだらうと推測して星の下を無言に辿った。今日の午は營口で正金銀行の杉原君の御馳走を断った。晩は天春君の斡旋ですでに準備のできている宴会を断った。そうして逃げるように汽車に乗った。乗る時橋本にこの様子じゃ千山行は撤回だと云った。実際撤回しなければならぬほど、容体が危しくなつて来た。ただ向うに見える一点の灯火が、今夜の運命を決する孤つ家であると覚悟して、寂寞たる原を真直に横切った。原のなかには、この灯火よりほかに当になるものは一つも見つからないのだから心細かった。宿屋はたった一軒かと聞いたたら、案内がええと答えた。湯崗子は温泉場だと橋本のプログラムの中にちゃんと出ているのだから、温泉が

この茫々たる原の底から湧いて出るのでろうとは、始めから想像する事ができたが、これほど淋しい野の面に、ただ一軒の宿屋がひっそり立っていようとは思いがけなかつた。

そのうちようやく灯のある所へ着いた。平家作の西洋館で、

床の高さが地面とすれすれになるほど低い。板間ではあるが無論

靴で出入をする。宿の女は草履を穿いていた。遠くから見たと同

じように浮き立たない家であつた。造作のつかない広い空家へ

ランプを点して住っているのかと思つた。這入るとすぐの大広間に

置いてあつたオルガンさえ、先の持主が忘れて置いて行つたもの

としか受取れなかつた。暗い廊下を突き当つて右へ折れた翼の端

の室へ案内された。中を二つに仕切つてある。低い床には、椅子

と洋卓テーブルと色の褪さめた長椅子とが置いてあつた。高い方は畳を敷いて、日本らしく取り繕とつくろつてあつた。ちようど土間から座敷へ上あがるようにして、甲から乙に移る構造である。余はいきなり畳の上に倒れた。三四十分の後膳のちぜんが出た。橋本がしきりに起きて食えと勧めたが、ついに起きなかつた。第一食卓に何が盛られたかをさえ見なかつた。眼を開ける勇氣すら無かつたのである。

四十三

朝起きると、馬が来たとか来ないとか云つて橋本の連中が騒いでいる。連中は三人だから、一人が一つの馬に乗るとすれば、三

匹い要る訳になる。この茫ぼう漠ぼくたる原の中で、生きた馬を三匹い生捕けどるとなると、手て数すうのかかるのは一通りではあるまい。連中は格別早起きもしない癖に、今更苦情を並べたつて始まらないと思つて、同行を断念した余は、冷然と落ちついていた。本来を云うと、千せ山さんへ行くのが目的で、わざわざここに降りたには相違ないが、一旦自分が千山行あきらを諦めたとなると、ほかの連中が予よ定てい通どに行動するのが、いまますますなる。第一橋本なんて農科の男は、千山を見る必要も何もないのである。千山は唐とうの時代しゅうに開いた梵ぼん刹さつで、今だに残っているのは、牛でもなければ豚でもない、ただ山と谷と巖いわと御寺と坊主だけであるから、農科の教授がわざわざ馬に乗つて見物に行くべきところではけつしてない。と云つて

せつかく行くと云うものを、意見までして思い止まらせるほどの口実は無論考え出せないから、なすがままにさせて放ほうつておいた。そのうち不思議な事に、ちゆうもんどおり注 文 通馬が三匹出て来た。どこから出て来たものか聞いても見なかつたが、たしかに出て来た。三人は癩しやくさわに障るほど勇んで外へ飛び出した。余は仕方がないから西洋間と日本間の唯一の主人として、この一日を物静かに休養すべく準備した。まず何よりも横になるのが薬だろうと思つて、たぬき狸だか狐きつねだか分らない毛皮の上にごろりと転がった。すると窓の外から橋本の声で、おいおいちよつと出て見ろと呼んでいる。彼かれまだそこいらを迷まよつしいてるなと思つと、少し面白くなつたから、いきゆうどおり請 求 通原の中へ草履ぞうりのまま出た。すると広い牧場のようなど

ころに、馬が三匹立っていた。それがいずれも小汚ない駄馬だったのではなはだ愉快であつた。のみならず、その中の一匹がどうしても大重君を乗せようと云わない。傍へ行くと、飛んだり蹴たりする。馬が怖がるからだと云つて、手拭で眼隠しをして、支那の小僧が両手で轡をしつかり抑えている。遠くから見ると、馬が鉢巻をしたようでおかしかった。その傍へ大重君が苦笑いをしながら近寄つて行くところは、一層面白かつた。しかも一度や二度ではない。よほど馬に遠慮する性質と見えて、容易に埒を明けないから、みんながなお喝采する。橋本は北海道の住人だから苦もなく鞍に跨つた。もう一人——名前を忘れたから、もう一人というよりほかに仕方がないが——これは熊岳城の苗圃

の長で、もと橋本に教わった事があると云うだけに、手綱を執ると術すべを心得ている。余はこの時立ちながら心の中で、要するに千山行を撤回した方が、馬術家としての余の名誉を完まうする所以ゆえんではなからうかと考えた。

けれども、そんな気色けしきは顔にも出さず、ただ残り惜しげに三人の後姿を眺めていた。そうして大重君の腰つきから推測して、千山まであれで乗り通すのは、定めて心配な事だろうと同情した。橋本は今夜のうちに帰るんだとか号して、しきりに馬を急がせるらしい。苗圃長も負けずに、続いて行く。独ひとり大重君だけが後おくれた。馬はまだ眼隠まなこかきをしている。やがて二人の影が高梁こうりょうに遮さぎられて、どっちへ向いて行くかちよつと分らなくなつた。先刻さつきか

らそこいらを徘徊はいかいしていた背の高い支那人もまた高粱の裡うちに姿を隠した。この支那人は肩から背へかけて長い鉄砲を釣っていた。人数にんずは二人であった。始めて気がついたときは咄嗟とっさの際に馬賊という聯想れんそうが起つた。橋本と前後して高粱の底に没して、しばらくすると、どんと云う砲声が聞えて、またしばらくすると、三人の馬の前にどこからかあの背の高い奴が現われて来たら大事件だと想像して、また室へやの中へ帰かへつて狸たぬきの皮の上に寝た。

四十四

手拭てぬぐいを下げ、て風呂に行く。一町ばかり原の中を歩かなければ

ならない。四方を石で置たみあ上げた中へ段々を三つほど床ゆかから下へ降りると湯泉ゆに足が届く。軍政時代に軍人が建てたものだからかなり立派にできている代りにすこぶる殺風景さつぷうけいである。入浴時間は十五分を超こゆべからずなどと云う布告ふこくめいたものがまだ入口に貼付けてある通りの構造である。犯則を承知の上で、石段に腰をかけたり、腹はらばい這はに身を浮かしたり、頬杖よを突いて倚りかかったり、いろいろの工夫を尽くした上、表へ出て風呂場の後へ廻ると、大きな池があつた。若い男が破舟やれぶねの中へ這入はいつてしきりに竿さおを動かしている。おいこの池は湯か水かと聞くと、若い男は類たぐいま稀れなる仏頂面ぶつちようづらをして湯だと答えた。あまり厭いやな奴だから、それぎり口を利きくのをやめにした。岸の上から底のぞを覗くと、時々

泡のようなものが浮いて来る。少しは湯気が立つてるかとも思われる。実は魚がいないかと、念のため聞いて見たかったのだけれども、相手が相手だから歩を回めぐらして宿の方へ帰った。後で、この池に魚が泳いでいる由を承知してはなはだ奇異の思いをなした。その上ここには水が一滴も出ないのだと教えられたときには全く驚いた。

驚いた事はまだある。湯から帰りがけに入口の大広間を通り抜けて、自分の室へやへ行こうとすると、そこに見慣れない女がいた。どこから来たものか分らないが、紫むらさきの袴はかまを穿はいて、深い靴を鳴らして、その辺を往つたり来たりする様子が、どうしても学校の教師か、女生徒である。東京でこそ外へさえ出れば、向うから眼の

中へ飛び込んでくる図だが、渺茫たる草原のいづくを物色したつて、斯様な文采は眸に落ちるべきはずでない。余はむしろ怪しい趣をもつて、この女の姿をしばらく見つめていた。

室に帰つてまた寝た。眼が覚めると窓の外で虫の音がする。淋しくなつたから、西洋間へ出て、長椅子の上に腰をかけて、謡をうたつた。無論出鱈目である。そこへ下女が来た。先刻の女の事を聞いたら、何でも宅で知つてる人なんでしょうと云つただけで、ちつとも要領を得ない。昨夕飯を済まして煙草を呑んでいると急に広間の方で、オルガンを弾く音がしたが、あの女がやつたんじやないかと聞くと、いいえ昨夕のは宅の下女ですと云う。この原のなかに、それほどハイカラな下女がいようとは思いがけなかつ

た。先刻の袴はもう帰ったそうである。

余は一人長椅子の上に坐すわつた。そうして永い日が傾かたむき尽して、

原の色が寒く変わるまでぼかんとしていた。すると静かな野の中で

どうぞ、ちと御遊びに、私一人ですからと云う嬌なまめかしい声が出た。

その音調は全くの東京ものである。余は突然立って、窓の外を眺

めた。あいにく窓には寒かん冷れい紗しやが張つてあつた。手早く硝子ガラスを開

けて首を外へ出すと、外はもう一面に夕暮れていて、蒼あおい煙が女

の姿を包んでしまったので誰だか分らなかつた。

橋本の連中はその晩帰つて来た。下女のしらせで、暗い背戸せどに

出て見ると、豆のような灯ひが一つ遠くに見えた。下女はあれが連

中だと云う。いくら野のびろ広いところだつて、橋本以外にも灯が見え

る事もあるだろうと尋ねても、やっぱりあれだと云う。はたして
 そうであつた。灯は夕方宿から迎むかえに出した支那人の持つて行つた
 提ちようちん灯である。背戸口に馬を乗り捨てた橋本は、そう骨を折つ
 て見に行く所でもないよと云つた。大重君は馬から三度落ちたそ
 うである。

四十五

奉天へ行つたら満まんでつこうしよ鉄公所とまに泊るがいと、立つ前ぜんに是公が
 教えてくれた。満鉄公所には俳人ろっこつ肋骨ろっこつがあるはずだから、世話
 になつても構わないくらいのずるい腹は無論あつたのだが、橋本

がいつしよなので、多少遠慮した方が紳士だろうという事に相談
 がいつか一決してしまった。停車場ステーションには宿屋の馬車が迎えに来
 ていた。やはり泥の中から掘出して、炎天で乾かしたように色が
 変つてゐる。荷物と人間をぐるに乗せて、構内を離れるや否や、
 御者ぎよしゃが凄すさまじく鞭むちを鳴らした。峠とうげを越す田舎いなかの乗合馬車よりも手
 荒な取扱方である。広い通りはそれほどでもないが、しだいに城
 内に近づくに従つて、今まで野原同然に茫ぼうぼう々ぼうとしていた往來おうらい
 が、左右の店の立込たてこんで来ると共に狭くなる上に、鉄道馬車がそ
 の真中を駆けつつあるにもかかわらず、烈しい鞭の影は一分に一
 度ぐらひはきつと頭の上で閃ひらめいた。馬は無理にも急がなければ
 ならない。けれども奉天だけあつて、往來の人は馬車の右にも左

にも、前にも後にも、のべつに動いている。そこへ驟馬らばを六頭も着けた荷車がくるのだから、牛を駆るようにのろく歩いたつて危ない。それだのに無人むにんの境さかいを行くがごとくに飛ばして見せる。我々のような平和を喜ぶ輩ともがらはこの車に乗っているのがすでに苦痛である。御者はもちろんチャンチャンで、油ほこりに埃の食い込んだ辮べんば髪つを振り立てながら、時々満洲の声を出す。余は八の字を寄せ、馬の尻をすかしつつ眺めた。そうして、みだりに鞭やを瘠やせ骨に加えて、旅客の御機嫌ごぎげんを取るのには、女房を叱まろうどつて佳寶まろうどをもてなすの類たぐいだと思つた。

現ほくりに北ほくり陵ようから帰りがけに、宿近く乗りつけると、左り側に人が黒山にくまのようにたかっている。その辺は支那の豆腐やら、肉

饅頭まんじゅうやら、豆素麵まめそうめんなどを売る汚きたない店の隙間すきまなく並んでい
 る所であつたが、黒い頭の塊かたまつた下を覗のぞくと、六十ばかりの爺
 さんが大地に腰すを据すえて、両脛りょうずねを折なつたなり前の方へ出して
 いた。その右の膝ひざと足の甲の間を二寸ほど、強い力で刳えぐり抜ぬいた
 ように、脛の肉が骨の上を滑すべつて、下の方まで行つて、いっしょ
 に縮ちぢれ上つている。まるで柘榴ざくろを潰つぶして叩たたきつけた風に見えた。
 こう云う光景には慣れておくべきはずの案内も、少し寒くなつた
 と見えて、すぐに馬車を留めて、支那語で何か尋ね出した。余も
 分らないながら耳を立てて、何だ何だと繰返して聞いた。不思議
 な事に、黒くなつて集つた支那人はいずれも口も利きかずに老人の
 創きずを眺めている。動きもしないから至つて静かなものである。な

お感じたのは、地面の上に手を後へ突いて、創口をみんなの前に曝している老人の顔に、何らの表情もない事であった。痛みも刻まれていない。苦しみも現れていない。と云つて、別に平然ともしていかない。気がついたのは、ただその眼である。老人は曇りと地面の上を見ていた。

馬車に引かれたのだそうですと案内が云つた。医者はいないのかな、早く呼んでやったらいいだろうと間接ながら窘なめたら、ええ今にどうかするでしょうという答である。この時案内はもう本来の気分を回復していたと見える。鞭の影は間もなくまた閃めた。埃だらけの御者は人にも車にも往来にも遠慮なく、滅法無頼に馬を追つた。帽も着物も黄色な粉を浴びて、宿の玄関

へ下りた時は、ようやく残酷な支那人と縁を切つたような心持がして嬉うれしかった。

四十六

支那の古ふる家いえをそのまま使つてるから、御寺の本堂を客間に仕切つたと同じようである。釣り廊下を渡つて正面の座敷のぞを覗くと、骨董こつとうがいっぱい並べてあつたので、何事かと思つたら、北京ペキンへ買出しに行つた道具屋が、帰り途にここで逗とまり留りゆう中の見世みせを張つたのだと分つたから、冷し半分這入はいつて見ているうちに、時間が来たので、外へ出た。今度は車だから好かろうと安心して、ち

よつとハイカラに膝頭ひざがしらを重ねて反り返そかえつて見たが、やはりけつして無難ではない。人力は日本人の発明したものであるけれども、引子ひきこが支那人もしくは朝鮮人である間はけつして油断してはいけない。彼等はどうせ他の拵ひとこしらえたものだという料簡りょうけんで、毫も人力に對して尊敬を払わない引き方をする。海城かいじょうというところこまで高麗こせきの古跡を見に行つた時などは、尻ふとんが蒲団の上に落ちつく暇がないほど揺れた。一尺ばかり跳ねは上げられる事は、一丁の間こまに一度は必ずあつた。しまいに朝鮮人の頭をこきんと張つけてやりたくなつたくらい残酷に取扱われた。奉天の道路は海城ほど凸凹でこぼこにでき上つていないから、むやみに車の上で踊をおどる苦痛はないが、その引き方のいかにも無技巧で、ただ見境みさかいなく走か

けさえすれば車夫の能事のうじおわ畢ると心得ている点に至つては、全く朝鮮流である。余は車に揺られながら、乗客じようかくの神経に相應の注意を払わない車夫は、いかによく走かけたつて、ついに成功しない車夫だと考えた。

そのうち大きな門の下へ出た。奉天へ前後四泊した間に、この門を何度となく潜くぐつた覚おぼえがある。その名前も幾度いくたびとなく耳にした。ところがそれを忘れてしまった。その恰好かっこうもはなはだ曖昧あいまいに頭に映るだけである。しかし奉天の市街まちに入いつて始めて埃ほこりだらけの屋根の上に、高くこの門を見上げた時は、はあと思った。その時の印象はいまだに消えない。橋本といつしよにこの門の傍そばにある小さな店に筆と墨を買いに行つた折の事も、寂さびた経験の

一つとしてよく覚えている。その時橋本は敷居を跨いで、中へ這入った。余も橋本に続こうとして身体を半分廂から奥へ差し込んだが、支那の家に固有な一種の臭が、たちまち鼻に感じたので、一二歩往来の方へ出て佇んでいた。今云う門は十間ばかり先の四辻にあるので、余は鳥打帽の廂に高い角度を与えてわざわざ仰むいて見た。時刻は暮に近い頃だったから、日の色は瓦にも棟にも射さないで、眩しい局部もなく、総体が肅然と喧びすしい十字の街の上に超越していた。この門は色としては、古い心持を起す以外に、特別な采をいつこう具えていなかった。木も瓦も土もほぼ一色に映る中に、風鈴だけが器用に緑を吹いていただけである。瓦の崩れた間から長い草が見えた。廂の暗い影を掠め

て白い鳩が二羽飛んだ。余は久しぶりに漢詩というものが作りたくなつた。待つてゐる間少し工夫して見たが、一句も纏まとまらないうちに、橋本が筆と墨を抱かかえて出て来たので興趣きようしゆは破れてしまつた。

このほかにこの門から得た経験は、暗い穴倉のなかで、車に突き当りはしまいかと云う心配と、煉瓦れんがに封じ込められた塵埃ちりほこりを一度に頭から浴びると云う苦痛だけであつた。余の車屋はこの暗い門の下を潜つて、城内の満鉄公所まで、悪辣無双あくらつむそうに引いて行つた。余は生きた風呂敷包のごとく車の上で浮沈ふちんした。

茶を飲むと、酸すいような塩はゆいような一種の味がする。少し妙だと思つて、茶碗を下へ置いてゆつくり橋本の講釈を聞いた。その講釈によると、奉天には昔から今こんにち日に至るまで下水と云うものがない。両便の始末は無論不完全である。そこで古来から何百年となく奉天の民が垂れ流した糞くそ小便しょうべんが歲月の力で自然じねんて天然んねんに地じの底に浸しみ込んで、いまだに飲料水に崇たたりをなしているんだと云う。一応はもつともだが、説明が少し科学的でないようである。第一それほどの所なら穀類野菜ともに、もつとよくできなければならぬはずだと思つたが、馬鹿ばか気げているから議論もしなかつた。橋本もこれは伝説だよと断つた。伝説と云えば日やまと

だけのみこと
本武尊の東夷征伐と同種類に属すべきもので、真偽以外に、

重く取扱わねばならぬ筋の来歴を有しているに違いない。いかにも汚きたない国民である。

湯を立てて貰つて這はい入つて見ると、濁つている。別に黄色く濁つている訳ではないが、御茶の味から演えん繹えきすればやつぱり酸すっぱい湯に浸つかつているとよりほかに考えようがない。鹹しおみず水にも溶とけるとか云つて大連でくれた豆石鹼まめシヤボンでも、行李こつりの底から出せばよかつたと思つた。風呂場も風呂桶おけも小さいものである。その上下女が出て来て背中を流してくれる。窮屈に身体を曲げながら、御前は日本人だろう。日本はどここの生れだいななどと話をした。この下女は始めて宿へ着いた時、余を橋本の随行と間違えて、そら

何とかさんもいつしよにいらしたと云った。その何とかさんは橋本が蒙古へ行くとき、彼と同じくここへ泊った事があるのだそうだ。顔が似ているから間違えたのか、様子が御供らしいから間違えたのかは、つい聞き糺して見なかった。窓の外に大きな甕が埋けてある。我々の汗や垢が例の酸っぱい水といっしよになって、朝に晩に流れ込んでいるのだから、時々汲み出さなければ溢れるほど溜ってしまう。それを支那の下男が石油缶へ移して天秤棒で担いで、どこかへ持つて行く。風呂に浸りながら、どこへ持つて行くんだらうなと考えた。余計な心配のようだが余はこの汚水が結局どう片づけられるかの処置を想像して見て、少しく恐ろしくなった。

これでいて御馳走ごちそうがむやみに出る。胃の悪い余のごときものは、
 御膳おぜんの上を眺めただけで、腹がいっぱいになつてしまふ。夜は緞ど
んす子の夜具に寝かしてくる。店の方では電話が仕切なしにちりん
 ちりんと鳴っている。品のひん好い御神おかみさんが、はあもしもしを乃別のべつ
 に繰返す。或る時チョコレートチョコレートの菓子が食いたくなつたから、下
 女に有るかいと聞いて見ると、すぐもしもしで取り寄せてくれた。
 のみならず満鉄公所へ御馳走を受けに行けば、三三シヤンパン鞭むちが現れる。
 領事館へ挨拶に行けば、英吉利イギリスの王様の写真などが恭うやうや々しく飾
 つてあつて、まるで倫ロンドン敦敦のような気持になる。そうかと思うと、
 宿の座敷の廊下の向うが白壁で、高い窓から光線が横はに這入はいつて
 来るのは仕方がないが、その窓に嵌はめてある障子しょうじは、北齋ほくさいの

画いた絵入の三^{さん}国志^{こくし}に出てくるような唐^{から}めいたものである。しかもあまり綺麗^{きれい}ではない。その上室^{へや}の中が妙^にな臭^{におい}を放つ。支那人が執^{しゅう}拗^ねく置^おき去^{ざり}にして行つた臭だから、いくら綺麗好きの日本人が掃除をしたつて、依然として臭い。宿では近^{きん}々^{きん}停^ス車^テ場^シ附^ン近へ新築をして引移るつもりだと云つていた。そうしたら、この臭だけは落ちるだろう。しかし酸っぱい御茶は奉天のあらん限り人畜^たに崇^たるものと覚悟しなければならぬ。

四十八

黒い柱が二本立っている。扉も黒く塗つてある。鋏^{びょう}は飯茶碗を

伏せたように大きく見える。支那町の真中にこんな大名屋敷に似た門があるうとは思いがけなかった。門を這入るとまた門がある。これは支那流にできていた。それを通り越すと幅一間ほどの三和土が真直に正面まで通っている。もつとも左右共に家続きであるから、四角な箱の中をがらん胴にして、その屋根のない真中を、三和土を辿つて突き当る訳になる。肋骨君の説明を聞いて知つたのだが、この突当りが正房で、左右が廂房である。肋骨君はこの正房の一棟に純粹の日本間さえ設けている。ちよつと見たまえと云つて案内するから、後に跟いて行くと、思わざる所に玄関があつて、次の間が見えて、その奥の座敷には立派な掛物がかかっていた。かと思うと左の廂房の扉を開いてここが支那流

の応接間だと云う。なるほど紫檀したんの椅子ばかり並んでいる。もつとも西洋の客間と違って室へやの真中は塞ふさいいでいない。周囲に行儀よく据えつけてある。これじゃ客が来ても向い合つて坐る事はできない訳だから、みんな隣同志で話をする男ばかりでなければならぬ。中にも正面の二脚は、玉座ぎよくざとも云うべきほどに手数この込んだもので、上に赤い角かくまくら枕まくらが一つずつ乗せてあつた、支那人てえものは呑気のんきなものでね、こうして倚よつかかつて談判をするんですと肋骨君が教えてくれた。肋骨君は支那通だけあつて、支那の事は何でも心得ている。あるとき余に向つて、辮べんぱつ髪かみまで弁護したくらいである。肋骨君の説によると、ああ云うぶくぶくの着物ものを着て、派は出でな色の背せ中ちゆうへ細い髪を長く垂らしたところは、振ふる

え付きたくなるほど好いんだそうだから仕方がない。実際肋骨君が振え付きたくになると云う言葉を使つたには驚いた。今でもこの言葉を考え出しては驚いている。いつペン汚きたない爺さんが泥鱈どじょうのような奴をあたじけなく頸筋くびすじへ垂らしていたのを見て、ひどく興さまを覚さましたせいだろう。

これほどの肋骨君も正房の応接間は西洋流で我慢している。その隣の食堂では西洋料理を御馳走ごちそうした。それから襯衣シャツ一枚で玉を突く。その様子はけっして支那じゃない。万事橋本から聞いたより倍以上活澆かっぱつにできているところをもつて見ると、振え付きたいは少々言い過ぎたのかも知れない。肋骨君は戦争で右か左かどつちかの足を失なくした。ところがそれがどつちだか分らないくら

い、自由自在に起つたり坐つたりする。そうして軍人に似合わないような東京弁を使う。どこで生れたか聞いて見たら、神田だと云つた。神田じゃそのはずである。要するに肋骨君は支那好であると同時に、もつとも支那に縁の遠い性質の人である。

室は空へやあいてるから来たまえとしきりに云つてくれるので、じゃ帰りに厄介になるかも知れないと云うとすぐ宜よろしいと快諾したところだけは旨うまかったが、帰りには夜半よなかの汽車で奉天へ着く時間割だと橋本から聞くや否や、肋骨君はたちまち宿泊を断つた。いや、あの汽車じゃ御免ごめんだと云う。もう一つの汽車が好いじゃないかと勧めるんだが、プログラムの全権があいにくこつちにないので、やむをえず、そんなら、もし夜半の汽車でなかったら泊めて貰お

うと云う条件をつけた。すると肋骨君はまた宜しいと答えた。ところが帰りにはやつぱり予定通やはんちやく夜半着の汽車へ乗ったのでとうとう満鉄公所へは泊まれない事になった。満鉄公所で余の知らない所は寢室だけである。

四十九

右へ折れると往来とは云われないくらい広い所へ出たのでようやく安心した。これならば人を引殺す心配もなからうと思つて、案内をしてくれる、宿の番頭を相手に、行く行く話をした。満洲の日は例によつて秋しゅうごう毫ごうの先を鮮あぎやかに照らすほどに思い切つた

ものである。眉深まぶかに烏打帽くわだぼうを被かぶつても、三日月形みかづきがたの廂ひさしでは頬ほから下したをどうする事もできないので、直下じかに射いりつけられる所は痛いくらいほてる。そこへ馬うまの蹄ひづめに搔かき立てられた軽い埃ほこりが、車くるまの下したから濛もうもう々と飛とんで来る。番頭ばんとうは、結構おひよりな御日ごひ和わです、少し風かぜでも吹ふいたらこんなものじゃありませんと喜んでゐる。そのうち馬車ばしやが家を離はなれて広い原はらへ出でた。原はらだから無論もちろん樹きも草くさも見えないのは当然当然だが、遠く眺ながめると、季節きせつだけに青いものが際限さいげんのない地ちの上うわ皮かわに、幾色いくしきかの影かげになつて、一面いっぺんに吹き出でしている。なぜこれほどの地面じめんを空むなしく明あけておくかは、家屋いえの発展はつぜんに忙ぼう殺さいされつつある東京とうきやうものの眼まなこには即時おこの疑問ぎもんとして起おこる訳わけであるが、この際はそれよりも窮屈きやうくつな人間にんげんを通り抜ぬけて晴せい々せいしたと云いう意い

識の方が一度に余の頭を照らした。路は固もとよりついていない。東西南北共に天に作った路であるから、轍わだちの迹あとは行く人の心任せに思い思いの見けんとう当とうに延びて行く。

支那人の馬車が来た。屋根に蒲鉾かまぼこ形の丸味を取った棺かんのようなもののなかに、髪を油で練ねり固かためた女が坐っている。長柄ながえは短いが、車の輪は厚く丈夫なものであった。云うまでもなく騾馬らばに引かしている。まず日本の昔に流行はやった牛車うしぐるまの小ぢんまりしたものと思えば差さ支しえないが、見たところは牛車よりもかえつて雅がである。その代り乗ってる人間は苦しいそうだ。余はこの車のごろごろ行くところを見て、輓げいたり※げつたりと形容したくなつた。輓げいの字も※の字も判然たる意味を知らないのだが、乗ってる人は

定めて輓※たるものに相違なからうと思つたからである。実を云
 うと輓※たるものは支那の車ばかりではない。こう云う自分もは
 なはだ危あやしかった。一望して原だよと澄ましていればそれまでの
 事で、仰おおせのごとく平たいらにも見えるが、いぎ時間に制限を切つて、
 突切つつきつて見ると云われると、恐ろしく凸凹でこぼこができてくる。おい
 こここで馬車の引つくり返る事はあるまいかと番頭に念を押すと、
 番頭はええ、まあたいてい大丈夫でしょうと云うだけで、けつし
 て万一を受け合わない。どうも並んでいる番頭の座が急に高くな
 って、番頭そのものが余の方に摺ずり落ちて来そうになつたり、また
 はあべこべに、余が番頭のシャツポの上に顛こころび落ちそうになるの
 は心こころ好くないものである。余は神経質で臆病な性しょうぶん分だから、

車が傾いたんびに飛び降りたくなる。しかるに人の気も知らないで、例の御者ぎよしやが無敵に馬を馳かけさせる。いらぬ事だと冷や冷やしているうちに、一カ所路の悪い所へ出た。原因は解らないが、轍の迹が際立きわだって三四十本並んでいる。しかもその幅がいずれも五六寸ある。そうして見るからに深そうに、日影を遮よそぎつて、奥の方を黒くかつ暗くしている。我々の御者は平気にそこへ乗り込んだ。順当に乗り込んだのならまだよかつたけれども、片方の輪だけが泥の中へぐしゃぐしゃと滅めり込むと同時に、片方は依然として固い土に支すえられている。余は泥側どろがわに席を占めていた。すると足が土と擦すれ擦すれになるまで車が濘ぬかるみ海に沈んで来た。番頭は余の頭の上にあるごとく感ぜられた。余はたまらなくなつて、泥

の中へ飛び下りた。

五十

原が急に叢くさむらに変化するのは不思議であつた。ここにこれだけの樹きが生えるなら、原の中ももう少し茂しつて然しかるべきであると気がついた時はすでに車の両側が塞ふさがつていた。竹こそないが、藪やぶと云うのが適当と思われるくらいな緑の高さだから、日本の田舎いなかみの道ちを歩くようなおとなしい感じである。ところどころ細い枝などが列はを外はずれて往来へ差し出ているのを、通りながら潜くぐり抜ぬけたり、撓しなわしたりして行き過ぎるのが何より愉快だつた。路も先刻さき

よりは平ひらたくなつて、真白に草と木の間を貫つらぬいている。ある所には大きな松があつた。葉の長さが日本の倍もあつて色は海辺うみべのそれよりも黒い。ある所は荒れ果てた庭園の体ていに見えた。そう云う場所へ来ると、馬車の上から低い雑木ぞうきを一目ひとめに二丁も眺められる。向うに細長い石碑が立っていた。模様だけが薄く見えるが、刻字こくじは無む論分ぶんらなかつた。

しばらくすると、路が尽きて高い門の下へ出た。門は石を畳たたんだ三つのアーチからでき上つているが、アーチの下まで行くにはだいぶ高い石段を登らなくてはならない。門の左右には大きな竜が壁に彫ほり込こんであつた。これが正門ですがね、締切りだから壁へ添ついて廻まわるんですと云つて、馬を土堤どてのような高い所へ上げた。

右は煉瓦れんがの壁である。それがところどころ崩れくずかかっている。左はだらだらのぶどうの谷で野葡萄や雑木が隙間すきまなく立て込んだ。路は馬車からが辛うじて通れるぐらい狭い。そこを廻めぐって横手の門から車を捨てて這入はいると、眼がすつきりと静まった。一ひと抱つかかえもある松ばかりが遥はるかの向まで並んでいる下を、長方形の石で敷きつめた間から、短い草ものさが物寂びものさびて生えている。靴の底が石に落ちて一歩ごとに鳴った。一丁ばかり行いって正面に曲ると、左右に石の象がいた。大きおくうつて、鷹揚おうようで、しかも石だからはなはだ静かである。突きしょうとくひ頌徳碑しょうとくひが立ててあった。亀も大きかったが、碑も高い。蒙古と満洲と支那の三国語で文章が刻つてある。後へ出ると隆恩門りゅうおんもん

と云うのが空に聳そびえていた。積み上げたアーチの上を見ると三層あつた。左右に回めぐらしてある壁も尋常ではない。あの上を歩いて見たいと番頭に頼むと、ええ今乗つて見ましようびようと云つて中へ這入つた。中は真四角に仕切つてある。正面にある廟びようの横から石段を登つて壁の上へ出ると、廟の後びよううしろだけが半月形はんげつけいになつていわずに北ほくりよう陵りやうを取り巻いている。

支那の小僧はだしが跣足はだしで跟ついて来た。番頭を捕つらまえてしきりにこそこそ何か云つている。番頭に聞くと、ええなにと曖あいまい昧まいな答こたをする。また聞き返したらこう云つた。——屋根やねの廂ひさしの所に着けてある金の玉を、この間一つ落ちた時に、拾つておいたから、買つてくれと云うんです。表おもてむき向むかひにすると厳きびしいものですから、こう

して見物に来た時、そうつと売りつけようてんで、支那人は実にじつ狡猾こうかつですからね。

支那の陵りょうもり守も無論狡猾だろうが、金の玉を安く買おうと云う番頭もあまり正直な方じゃない。番頭はそつとぜに銭をやつて金の玉をポケットへ入れたようである。

壁の上を歩くと太い樹が眼の下に見える。桑があんなに大きくなつてますと番頭が指ゆびさした。なるほど一ひとかかえ抱もある。この四角な壁の一側ひとかわは長さどのくらいかねと尋ねると、へえ今勘定かんじようして見ましようひとあしと云いながら、一歩二尺の割で、一二三四と歩いて行つた。余は壁の外を見下みおろして、そこらを絡からんでいる赤い木の実を眺めていた。せつかく番頭の勘定した壁の長さは忘れてし

まった。

五十一

撫順ぶじゆんは石炭の出る所である。そのこうちよう坑長を松田さんと云つて、橋本が満洲に来る時、船中でちかづき知己になつたとかで、その折の勧誘通り明日あす行くと云う電報を打つた。汽車に乗ると西洋人が二人いた。朝早いので、客車内で持参の弁当か何か食つていたが、撫順に着いたら我々といつしよに汽車を降りた。出迎えのものがあいさつ挨拶しているところを聞いて見ると、そのうちの一人は奉天の英国領事であつた。我々もこの英人等といつしよに炭坑の事

務室に行つて、二階で松田さんに逢つた。松田さんは縞しまの縮ちぢみの襯シ衣ヤッの上に薄い背広を着ていた。背の低い気軽な人なので、とうてい坑長とは思えなかつた。我々と英国人を一一ふたところ所に置いて、双方へ向けて等分に話をした。橋本も余も英語はいっさい口にしなかつた。したがつて英人とは言葉を交まじえなかつた。

やがて松田さんが案内になつて表へ出た。貯水池の土堤どてへ上あがると、市街が一目に見える。まだ完全にはでき上つていないけれども、ことごとく煉瓦れんが作りである上に、スチユジオにでも載りそうな建築ばかりなので、全く日本人の経営したものとは思われない。しかもその洒落しゃれた家がほとんど一軒おもむきごとごとに趣を異にして、十軒十色といろとも云うべき風に変化しているには驚いた。その中には教

会がある、劇場がある、病院がある、学校がある、坑員の邸宅は無論あつたが、いずれも東京の山の手へでも持つて来て眺めたいものばかりであつた。松田さんに聞いたら皆日本の技師の拵こしらえたものだと言われた。

市街から眼を放して反対の方角を眺めると、低い丘の起伏している向うに煙突の頭が二カ所ほど微かすかに見える。双方共距離はたしかに一里以上あるんだから広い炭坑に違ない。松田さんの話によると、どこをどう掘つても一面の石炭だから、それを掘尽くすには百年でも二百年でもかかるんだそうである。我々の立つているつい傍そばでも、八百尺と九百尺のシャフトを抜いていた。

事務所へ帰つて午餐ひるめしの御馳走ごちそうになつたとき英国人は箸はしも持てず

米も喰えず気の毒なものであつた。この領事は支那に十八年とかいたと云うのに、二本の箸を如何いかにともする事のできないのは案外である。その代り官話かんわは達者だそうだ。松田さんは用事が忙いそがしいとかで、食卓へは出て来られなかつた。接待役として松田さんに代つた人は、英語で英国人に話したり、日本語で余等に話したりはなはだ多事であつた。けれども橋本氏も余もこの時まで英語はいっさい使わなかつた。元來英人と云うものはプラウドな氣風を帯びていて、紹介されない以上は、他ひとに向つて容易に口を利きかない。だから我々も英人に対しては同様にプラウドである。

食後は坑内を見物する事になつた。田島君という技師が案内をしてくれた。入口で安全灯を五つ点ともして、杖を五本用意して、そ

れを各自めいめいに分けて、一間四方ぐらゐの穴をだらだらと下りた。

十四五間行くか行かないに坑あなのなかは真暗まつくらになつた。カンテラ

の灯ひは足元を照らすにさえ不足である。けれども路は存外平らで、
てんじよう

天 井もかなり高かつた。右へ曲つて、探るようになり下りて行く

と、余のすぐ前にいる田島君がびたりととまつた。余もとまつた。

案内がとまつたから、あとから続いて来たものもことごとくとまつた。ここに腰かけがあります。坑へ這はい入るものはここで五六分

休んで眼を慣らすんですと云つた。五人は休みながらカンテラの
灯で互の顔を見合わした。みんな立つて黙っている。腰をおろす

ものは一人もない。静かな中で時の移るのは多少凄すげかつた。その
うち暗い所が自然と明るくなって来た。田島君はやがて、もうよ

かろうと云つて、またすぐ右へ曲つて、奥へ奥へと下りて行つた。余も続いて下りた。あとの三人も続いて下りて来た。

ここまで新聞に書いて来ると、大晦日になつた。二年に亘るのも変だからひとまずやめる事にした。

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年4月26日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年6月20日公開

2004年2月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

満韓ところどころ

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>